

西川津遺跡 IX

朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第14冊

2003年3月

島根県土木部
島根県教育委員会

西川津遺跡 IX

朝鈴川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第14冊

2003年3月

島根県土木部
島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、昭和 52（1977）年から島根県土木部より委託を受けて、朝酌川広域河川改修事業区域内の発掘調査を実施してきました。この調査は 24 年間にわたって断続的に行われ、平成 13（2001）年をもって現地調査を終了しました。本報告書は、最終年にあたる平成 13 年度に実施した、松江市西川津町に所在する西川津遺跡Ⅲ区・Ⅵ区の発掘調査の成果をまとめたものです。

この調査では、今からおよそ 6,000 年前～江戸時代までの朝酌川の旧河道を検出するとともに、堆積していた土砂の中から当時の人々が日常使用していた土器や木製品などを多量に発見しました。これらの遺構・遺物は朝酌川流域の集落の変遷と当時の生活を知る上で貴重な資料となるものです。

本書がこの地域の自然環境の変化と歴史の変遷に触れる契機となり、私たちの周りに残されている文化財の理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、長期間にわたる発掘調査並びに報告書作成にあたって御協力いただきました地元の皆様をはじめ、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成 15 年 3 月

島根県教育委員会
教育長 広沢卓嗣

例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が、島根県土木部河川課から委託を受けて平成13年度に実施した朝鶴川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。

西川津遺跡Ⅲ区　島根県松江市西川津町560番地

西川津遺跡VI区　609番地

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

〔平成13年度〕

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（同総務課長）、

今岡　宏（同総務係長）、松本岩雄（同調査第1課長）、

調査員　広江耕史（調査第1係長）、宮本正保（同文化財保護主事）、鹿野孝博（同調査補助員）、寺本和明（同）

調査指導　中村唯史（三瓶フィールドミュージアム指導員）、西本豊広（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）

〔平成14年度〕

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）、

内田　融（同総務課長）、坂本淑子（同総務係長）

調査員　今岡一三（調査第1係長）、宮本正保（同文化財保護主事）、寺本和明（同調査補助員）

4. 発掘調査及び報告書作成にあたって協力及び従事していただいた方々・機関は以下のとおりである。記して感謝の意を表す。（敬称略）

〔調査協力〕 山本信夫（山本考古学研究所）

〔発掘調査作業〕

安達多津子、石倉春枝、石丸正、岩本大平、遠藤繁、小川吉子、木村ミヨ子、坂根栄、杉谷勉、

高倉重夫、田部茂、田部千重子、永島八重子、永島雄三、野津昭江、野津千俊、福島秀香、

藤井武美、福田定男、福田美代江、細木澄子、細田美智子、細田美晴、松本長子、山本雄太、

山本嘉男、吉岡昭男、吉野智、和田隆徳

〔遺物整理・報告書作成〕

瀬川恭子、馬庭志津子、吉田典子、若佐裕子、景山光子、金森千恵子、野田清美、原美樹

5. 採図中の北は測量法による第Ⅲ座標系X軸方向を示し、レベル高は海拔高を示す。平面直角座標系XY座標は、日本測地系による。

6. 朝鶴川遺跡群発掘調査区と周辺の遺跡位置図（第2図）は、松江圏都市計画図を使用した。

7. 本報告書に掲載した写真は、宮本が撮影した。

8. 本報告書に使用した実測図は、各調査員のほか伊藤幸子、景山、金森、野田、原が作成し、景山、野田、原が添書した。

9. 本書の執筆は第1章～第4章・第6章を宮本が、第6章付編を岩橋孝典（島根県古代文化研究センター）が行った。また第5章については渡邊正巳氏（文化財調査コンサルタント株式会社）

に執筆していただいた。

10.本書の編集は、宮本が行った。

11.本書に掲載した遺跡出土の遺物・実測図及び写真は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過	(宮本)	1
第1節 西川津遺跡・タテチョウ遺跡・原の前遺跡の発見と調査		1
第2節 西川津遺跡における2001(平成13)年の調査		2
第2章 遺跡の位置と環境	(宮本)	3
第1節 遺跡の位置と歴史的環境		3
第2節 遺跡周辺の環境変化		7
第3章 III区の調査	(宮本)	9
第1節 調査の経過と概要		9
第2節 調査の結果		10
第4章 VI区の調査	(宮本)	45
第1節 調査の経過と概要		45
第2節 調査の結果		46
第5章 平成13年度西川津遺跡発掘調査に係る自然科学分析	(渡辺)	81
第6章 小結	(宮本)	91
付編 西川津遺跡V-4-1区出土の杭状木製品について	(岩橋)	93

掲図目次

- 第1図 遺跡位置図
第2図 朝酌川遺跡群 発掘調査区と周辺の遺跡位置図
第3図 遺跡周辺の地理的変遷
第4図 西川津遺跡Ⅲ区 調査区全体図
第5図 西川津遺跡Ⅲ区 土層図(1)
第6図 西川津遺跡Ⅲ区 土層図(2)
第7図 Ⅲ-1区 砂疊層出土土器実測図(1)
第8図 Ⅲ-1区 砂疊層出土土器実測図(2)
第9図 Ⅲ-1区 砂疊層出土土器実測図(3)
第10図 Ⅲ-1区 砂疊層出土土器実測図(4)
第11図 Ⅲ-1区 砂疊層出土土器実測図(5)
第12図 Ⅲ-1区 砂疊層出土土器実測図(6)
第13図 Ⅲ-2区 砂疊層出土土器実測図(1)
第14図 Ⅲ-2区 砂疊層出土土器実測図(2)
第15図 Ⅲ-2区 砂疊層出土土器実測図(3)
第16図 Ⅲ-3区 灰茶色砂層出土土器実測図
第17図 Ⅲ-3区 砂疊層出土土器実測図(1)
第18図 Ⅲ-3区 砂疊層出土土器実測図(2)
第19図 Ⅲ-3区 砂疊層出土土器実測図(3)
第20図 Ⅲ-3区 砂疊層出土土器実測図(4)
第21図 Ⅲ-3区 砂疊層出土土器実測図(5)
第22図 Ⅲ区出土 繩文土器実測図
第23図 Ⅲ区出土 土器実測図
第24図 Ⅲ区出土 陶磁器実測図
第25図 Ⅲ区出土 土製品・錢貨実測図
第26図 Ⅲ区出土 石製品実測図(1)
第27図 Ⅲ区出土 石製品実測図(2)
第28図 Ⅲ区出土 木製品実測図(1)
第29図 Ⅲ区出土 木製品実測図(2)
第30図 西川津遺跡VI区 調査区全体図
第31図 西川津遺跡VI区 土層図
第32図 VI区 淡青灰色土出土土器実測図
第33図 VI区 杭・木製品出土位置図
第34図 VI区 杭・木製品出土状況実測図
第35図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(1)

- 第36図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(2)
第37図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(3)
第38図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(4)
第39図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(5)
第40図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(6)
第41図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(7)
第42図 VI区 砂疊層2出土土器実測図(1)
第43図 VI区 砂疊層2出土土器実測図(2)
第44図 VI区 砂疊層3・4出土土器実測図
第45図 VI区出土 土器実測図(1)
第46図 VI区出土 土器実測図(2)
第47図 VI区出土 石製品・土製品実測図
第48図 VI区出土 木製品実測図(1)
第49図 VI区出土 木製品実測図(2)
第50図 VI区出土 木製品実測図(3)
第51図 VI区出土 木製品実測図(4)
第52図 VI区出土 木製品実測図(5)
第53図 V-4-1区 出土杭状木製品実測図

表目次

- 表1 周辺の遺跡
表2 西川津遺跡Ⅲ区出土土器観察表
表3 西川津遺跡Ⅲ区出土陶磁器観察表
表4 西川津遺跡Ⅲ区出土土製品・錢貨観察表
表5 西川津遺跡Ⅲ区出土石製品観察表
表6 西川津遺跡Ⅲ区出土木製品観察表
表7 西川津遺跡VI区出土土器観察表
表8 西川津遺跡VI区出土石製品・土製品観察表
表9 西川津遺跡VI区出土木製品観察表

図版目次

- 図版 1 III区全景
III-1 区全景（北から）
図版 2 III-2 区全景（北東から）
III-3 区全景（南東から）
図版 3 III区西壁土層
III区西壁土層（南端）
図版 4 III区南壁土層
III区北西壁土層
図版 5 VI区全景
VI区西壁土層
図版 6 VI区北壁土層
VI区北壁土層（西側）
図版 7 VI区北壁土層（西側）
VI区杭列検出状況
図版 8 杭列検出状況（北から）
同上（南から）
杭列と土層との関係
図版 9 III-1 区砂礫層出土土器
図版 10 III-1 区砂礫層出土土器
図版 11 III-1 区砂礫層出土土器
図版 12 III-1 区砂礫層出土土器
図版 13 III-1 区砂礫層出土土器
III-2 区砂礫層出土土器
図版 14 III-2 区砂礫層出土土器
図版 15 III-2 区砂礫層出土土器
図版 16 III-2 区砂礫層出土土器
III-3 区灰茶色砂層出土土器
図版 17 III-3 区砂礫層出土土器
図版 18 III-3 区砂礫層出土土器
図版 19 III-3 区砂礫層出土土器
図版 20 III区出土繩文土器
III区出土土器
図版 21 III区出土陶磁器
図版 22 III区出土陶磁器
III区出土土製品・錢貨
図版 23 III区出土石製品
図版 24 III区出土木製品

- 图版 25 III区出土獸骨
- 图版 26 VI区淡青灰色土出土土器
- 图版 27 VI区淡青灰色土出土土器
VI区砂砾层 1 出土土器
- 图版 28 VI区砂砾层 1 出土土器
- 图版 29 VI区砂砾层 1 出土土器
- 图版 30 VI区砂砾层 1 出土土器
- 图版 31 VI区砂砾层 1 出土土器
- 图版 32 VI区砂砾层 2 出土土器
- 图版 33 VI区砂砾层 2 出土土器
- 图版 34 VI区砂砾层 2 出土土器
VI区砂砾层 3·4 出土土器
- 图版 35 VI区出土土器
- 图版 36 VI区出土土器
VI区出土石器·土製品
- 图版 37 VI区出土木製品
- 图版 38 VI区出土木製品

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 西川津遺跡・タテチョウ遺跡・原の前遺跡の発見と調査

西川津遺跡は、島根県松江市の北東部を南北に流れ、大橋川に注ぐ朝酌川沿いに位置している。朝酌川沿いには西川津遺跡のほか、原の前遺跡、タテチョウ遺跡と合わせて3つの遺跡が約2kmにわたって連なるように存在する。これら3つの遺跡は一体となって低湿地遺跡群を形成していることから、近年では「朝酌川遺跡群」と呼称されることもあり、県下でも有数の規模と豊富な出土品をもつ遺跡である。

「朝酌川遺跡群」の発見は、1934（昭和9）年に行われた堰と水門の工事中に西川津町字堅町（現在のタテチョウ遺跡の南端にあたる）において弥生土器などが出土し、遺跡の存在が確認されたことを契機とする。1949（昭和24）年には、島根大学の山本清氏によりこの付近の試掘調査が実施され、タテチョウ遺跡が弥生時代を中心とし、古墳時代に及ぶ複合遺跡であることが確認された。

西川津遺跡の発見は、1939（昭和14）年に行われた水田の排水工事の際に、弥生土器などが発見されたことによる。また、戦後間もない時期の電柱埋設工事や、1967（昭和42）年の県道松江一境線（現在の国道431号線）沿いの電話線埋設工事の際にも、土器などの遺物が発見されていたが、発掘調査が実施されなかったことから遺跡の範囲・性格は不明であった。昭和40年代に入り、朝酌川流域の水田地帯は急激に市街地化が進み、朝酌川の氾濫が宅地にも大きな被害を与えるようになった。1972（昭和47）年から島根県土木部は朝酌川の河川改修計画を立て、河道の直線化と河幅の拡幅に着手することになった。島根県教育委員会では、島根県土木部の依頼を受けて1974（昭和49）年に工事予定地となったタテチョウ遺跡の範囲確認調査を実施し、この遺跡が南北300mに及ぶ大規模な遺跡であることを確認した。タテチョウ遺跡は1977（昭和52）年から本格的に発掘調査が行われ、1991年に終了した。

河川改修の暫定掘削工事は下流側から行われたが、1979（昭和54）年に西川津町橋本に位置するガラガラ橋-宮尾橋の間で遺物が発見されたことで、西川津遺跡とタテチョウ遺跡の中間地帯にも遺跡が存在することが判明した。この遺跡は字名から「原の前遺跡」と命名され、発掘調査が1992（平成4）年と1993（平成5）年の2カ年実施された。

朝酌川遺跡群の最上流部に位置する西川津遺跡では、タテチョウ遺跡の調査と一部並行して1972（昭和47）年から1981（昭和56）年にかけて暫定掘削部分の発掘調査を実施した。1994（平成6）年からは西川津遺跡の残りの区間にについて調査を実施し、1999（平成11）年をもって現地調査は終了する予定であった。この後、学園橋上流における公園整備工事と西川津遺跡の北端に近い海崎橋上流での河川拡幅工事の計画が追加されたため、2001（平成13）年、この2つの地区について発掘調査を実施して河川改修に伴う現地調査は終了した。

第2節 西川津遺跡における2001(平成13)年の調査

西川津遺跡のⅢ区とⅥ区の発掘調査を実施した。Ⅲ区で調査を実施した箇所は、1997(平成5)年に発掘調査が行われたⅢ区右岸の北側に隣接する部分である。調査前は中州だった場所で、調査対象面積は約400m²である。調査区を便宜上3つに分け、南からⅢ-1区、同2区、同3区とした。Ⅵ区は、西川津遺跡の北端に近い海崎橋上流の左岸に設定した。1999(平成11)年のトレンチ調査で、遺物包含層の存在が確認された場所で、調査前は水田・河川敷であった。調査対象面積は約800m²である。

発掘調査は、平成13年7月2日にⅢ区に着手した。Ⅲ区は全体が朝酌川の旧河道となっており、これ以外に遺構は検出しなかった。遺物は、砂礫層から縄文時代～近世にかけて各時代の土器・陶磁器などが出土したほか、輸入銭、獸骨などを確認した。途中、降雨による朝酌川の増水のため調査区が2度にわたり水没し、壁が崩落したため土層観察が行えない箇所もあったが、調査区内は完掘し9月13日に空中写真撮影を実施して調査を終了した。

Ⅵ区は9月17日に調査を開始した。この調査区も基本的に旧河道となっており、増水時に堆積した砂礫層に土器などの遺物が含まれていた。遺構は、平面L字状に並ぶ杭列を検出した。砂礫層は少なくとも4層が認められ、上位の層は縄文時代～弥生時代・古墳時代の遺物が混在していたが、下位の層では縄文土器のみが出土し、堆積した時期が特定できる可能性が考えられた。この調査区では遺物包含層が当初の予想よりかなり深くまで存在したが、発掘調査の安全を図るために調査区の一部を深く掘り下げるにとどめ、最終的には基盤層となる玄武岩まで検出し12月17日に調査を終了した。



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

西川津遺跡は松江市西川津町に所在し、松江市の市街地の東側に位置する。付近には島根大学や松江市立川津小学校などの学園が集まり、最近、遺跡の周囲は宅地化が進んでいる。

西川津遺跡は、朝酌川の河川敷を中心とする低湿地遺跡である。朝酌川は島根半島の北山に流れを発し、西川津遺跡付近で持田川と合流し、松江市街の東端にある沖積地を南下して宍道湖と中海をつなぐ大橋川に注ぐ河川である。この朝酌川沿いには西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡と3つの低湿地遺跡が存在し、近年ではこれら3つを総称し「朝酌川遺跡群」と呼称することもある。西川津遺跡はこの朝酌川遺跡群の最上流部に立地し、朝酌川に架かる宮尾橋の上流、持田川との合流地点の間に位置する。また、この川が形成する平野周辺部の低丘陵には古墳をはじめ、多くの遺跡が分布する。

〔旧石器時代〕

現在の地形とは大きく異なり、谷合になっていたと考えられ、今のところ、この時代の遺跡は知られていない。しかし、西川津遺跡やタテチョウ遺跡において、尖頭器や細石刃核と考えられる石器が出土しており、付近に旧石器時代の遺跡が発見される可能性がある。

〔縄文時代〕

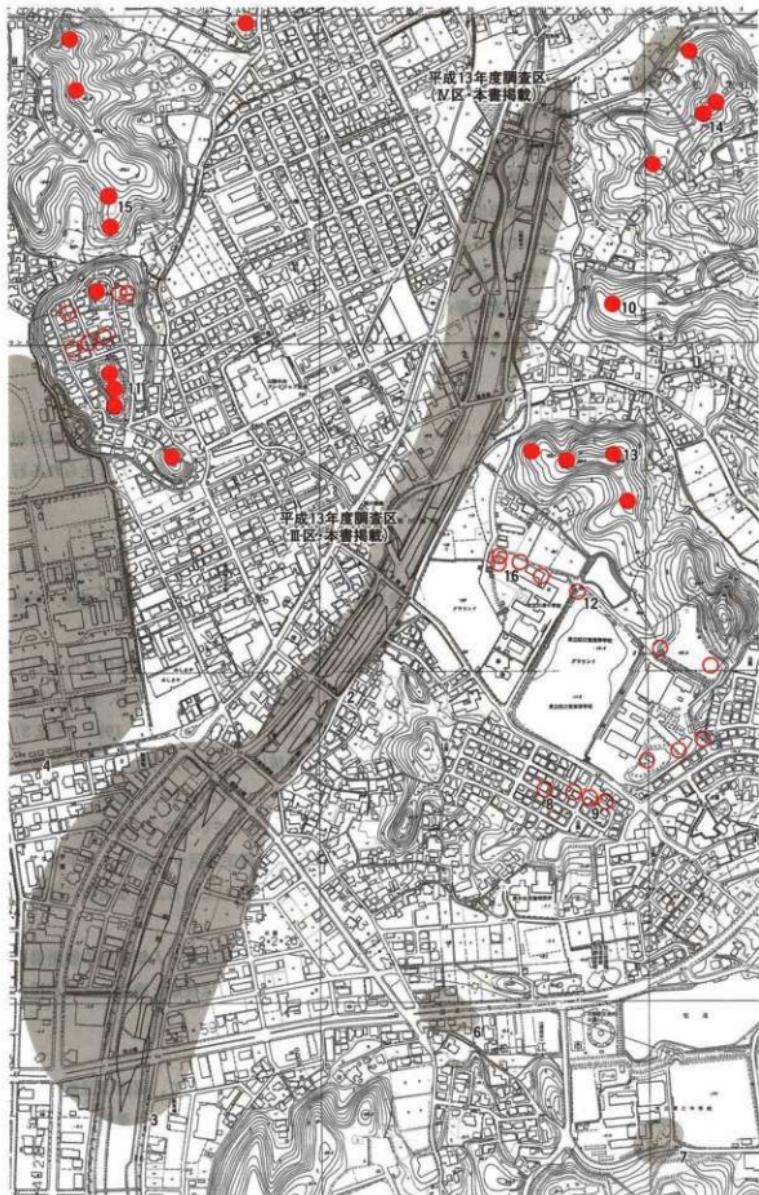
気候が温暖な時期にあたり、海水面が上昇して宍道湖は現在の山合まで広がっていたと推定される。縄文土器が出土している遺跡としては西川津遺跡、タテチョウ遺跡、島根大学構内遺跡、金崎遺跡、城の越遺跡が挙げられる。

西川津遺跡は1979（昭和54）年から発掘調査が行われており、縄文時代と弥生時代を中心とした多量の遺物が発見されている。縄文時代の遺物としては早期末の繊維土器をはじめ、前期、晚期の土器や石製品類が多く出土している。タテチョウ遺跡も1977（昭和52）年より1991（平成3）年まで調査が行われ、西川津遺跡と同様に遺物が多く、この地域における縄文時代の様子を知るうえで貴重な遺跡である。また、西川津遺跡や原の前遺跡ではアカホヤ火山灰が古宍道湖湖底の堆積層中で認められ、前期から中期にかけて宍道湖がこの付近まで拡張していたことを物語っている。島根大学構内遺跡は1994（平成6）年から発掘調査が行われ、橋繩手地区からはアカホヤ火山灰の純粹層を挟んで早期末から前期末にかけての遺物群が層位的に出土している。主な遺物には前期初頭から前半頃の丸木船がある。

地質学的調査もあわせて行われており、古環境変遷の復元とそれに適応する人類遺跡の展開過程を追求するうえで重要な遺跡である。なお、金崎遺跡と城の越遺跡からは後期と晚期の土器が採集されている。

〔弥生時代〕

縄文時代の終わり頃には、宍道湖の汀線もタテチョウ遺跡付近まで後退して、周囲は湿地帯となり、水田に利用されていたと想像される。遺跡は、前述の西川津遺跡やタテチョウ遺跡をはじめ貝崎遺跡、横本遺跡などが知られている。西川津遺跡では前期から中期にかけての多量の土器や木製農耕具、石製品、骨角器などが出土し、遺構としては前期の貝塚、中期の掘立柱建物跡などが検出されている。タテチョウ遺跡では前期から後期までの土器や木製品および石製品などが発見されて



第2図 朝酌川遺跡群 発掘調査区と周辺の遺跡位置図 S=1:7500

いる。両遺跡から出土した特異な遺物には土笛や櫛、腕輪、管玉などの装身具、分銅形土製品、流水文銅鐸がある。原の前遺跡と同様、川辺の生活や朝鶴川の洪水などの痕跡を知る遺跡である。なお、貝崎遺跡や橋本遺跡からも弥生土器が採集されている。

[古墳時代]

朝鶴川流域の低丘陵には多くの古墳が分布し、出雲地方における古墳の密集地の一つとなっている。しかし、古い時期のものは少なく、山崎1号墳や柴尾2号墳が知られているに過ぎない。山崎1号墳は一辺15mの方墳で、埋葬施設から埴丘裾へ延びる、石を置いた排水溝をもつ。割竹形木棺が直葬されていたと推定されるが、副葬品は少なく、鉄劍と銅鏡のみが出土している。柴尾2号墳は朝鶴川中流域の下東川津町に所在する一辺8mの小規模な方墳で、内部主体としては割竹形木棺と箱形木棺が各1基検出されている。出土品には古式の土師器壺や壺がある。

中期以降になると周辺部の丘陵に多くの古墳群が出現する。大部分は、須恵器が出る墳のもので、柴古墳群(3基)、馬込山古墳群(4基)、金崎古墳群(11基)、上浜弓古墳群(9基)、住吉神社裏古墳などがあり、一辺20m以下の方墳が相当数築造されるようになる。また、出土品が多く、時期を明確にできないものの、中期～後期と推定されるものに宮田古墳群、菅田丘古墳群、大内谷古墳群、福山古墳群、深町古墳群などがある。これら古墳群の中でも、規模が大きいのが金崎古墳群である。1号墳は全長35mの前方後方墳で、小形の堅穴式石室をもつ。副葬品には倣製内行花文鏡、子持勾玉などの玉類、劍、矛等の武器及び各種の須恵器があり、朝鶴川流域一帯を支配した首長の墓と考えられる。谷を挟んで西の丘陵にある美郷山古墳からも倣製珠文鏡や古い須恵器が出土している。

しかし、後期には、横穴式石室をもつ古墳は原の前遺跡付近の朝鶴川中流域には全く存在しない。横穴墓も深町横穴墓のみが知られる程度である。この時期には、上流の持田地区付近には太田古墳群(5基)に代表される、各墳を一枚石で構成する石棺式石室をもつ古墳が多く築造されている。さらに、全長50mの前方後方墳で横穴式石室を2基もつ薄井原古墳も出現する。これらの古墳の被葬者は、後に出来國府の置かれた意宇川下流域の古墳群の勢力には及ばないものの、大きな力をもった首長であることがうかがえる。

一方、集落跡は調査例が少なく、柴遺跡や堤廻遺跡が知られる程度である。柴遺跡は小さな谷合の奥部に所在し、前期の堅穴住居2棟が調査されている。堤廻遺跡は低丘陵の斜面に位置し、堅穴住居跡21棟、掘立柱建物跡2棟を検出し、この時代の集落を知るうえでの好資料を提供することとなった。堅穴住居については、3棟が前期、8棟が中期前半、9棟が後半、掘立柱建物は1棟が中期前半で他は時期不明である。なお、西川津遺跡、タテチョウ遺跡、原の前遺跡の河川堆積物中に古墳時代の土師器や須恵器をはじめ、木製品などの遺物が大量に含まれている。この時代の集落が川沿いに幾つも存在し、洪水時に、その一部が川に押し流されたことを示している。また、最近の調査結果より、この時代も今とは同じところが流路となっていたことが知られている。

表1 周辺の遺跡

1 西川津遺跡	5 貝崎遺跡	9 柴古墳群	13 大内谷古墳群
2 原の前遺跡	6 橋本遺跡	10 住吉神社裏古墳	14 貝崎古墳群
3 タテチョウ遺跡	7 堤廻遺跡	11 金崎古墳群	15 福山古墳群
4 島根大学構内遺跡	8 山崎古墳	12 馬込山古墳群	16 馬込山古墓群

[奈良時代・平安時代]

733（天平5）年に作成された『出雲國風土記』によれば、奈良時代の西川津町一帯は島根郡に属し、当時の郡の役所である郡家も所在する山口郷に比定されている。郡家の所在地には諸説があるが、松江市福原町の芝原遺跡では規則性をもつ掘立柱建物群が発見され、その可能性が指摘されている。朝酌川は『出雲國風土記』には水草河とあり、その源は二つで途中で合流し、入海(宍道湖)に注いでいたとある。なお、今は、朝酌町で大橋川と合流している。この時期の遺構としてはタテチヨウ遺跡において船着き場と推定される杭列があり、付近から「驛」と墨書きされた須恵器坏が出上している。柴Ⅲ遺跡では8世紀末から9世紀前半にかけての掘立柱建物跡が十数棟検出されている。平安時代初めの集落跡である。

[中世]

西川津地域は中世には「長田郷」と呼ばれるようになった。遺跡としては川津城跡や堂ヶ平城跡などの小規模な山城や馬込山古墓群、上浜弓遺跡等の中世末から近世にかけての古墳が知られているに過ぎない。しかし、近年の発掘調査において、古代末から中世の陶磁器や土師質土器などが出土しており、集落は新しい時代にも川沿いに営まれていたと考えられる。

【参考文献】

- 島根県教育委員会「タテチヨウ遺跡発掘調査報告書」I～IV 1979～1992
島根県教育委員会「西川津遺跡発掘調査報告書」I～III 1980～2001
山本 清「古代」「川津郷上緒」川津公民館 1982
松江市教育委員会「山崎古墳」 1984
松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団「柴尾遺跡発掘調査報告書(1)」 1994
松江市土地開発公社・松江市教育委員会「堤越遺跡」 1986
松江市教育委員会「上浜弓1号墳他発掘調査報告書」 1993
石橋逸郎・近藤正「松江・馬込山古墓群」「島根県埋蔵文化財調査報告書」Ⅲ 岛根県教育委員会 1971
島根大学埋蔵文化財調査研究センター「島根大学埋蔵文化財調査研究報告」1～6 1997～2000
田中義昭「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」「山陰地域研究」12 岛根大学汽水域研究センター 1996

第2節 遺跡周辺の環境変化

西川津遺跡は松江低地に立地する低湿地遺跡である。宍道湖に面する松江低地の環境は、10000年前以降の海面変化などの影響を受けながら、陸域から海域・汽水域、そして低地の拡大によって再び陸域へと大きく変化してきた。

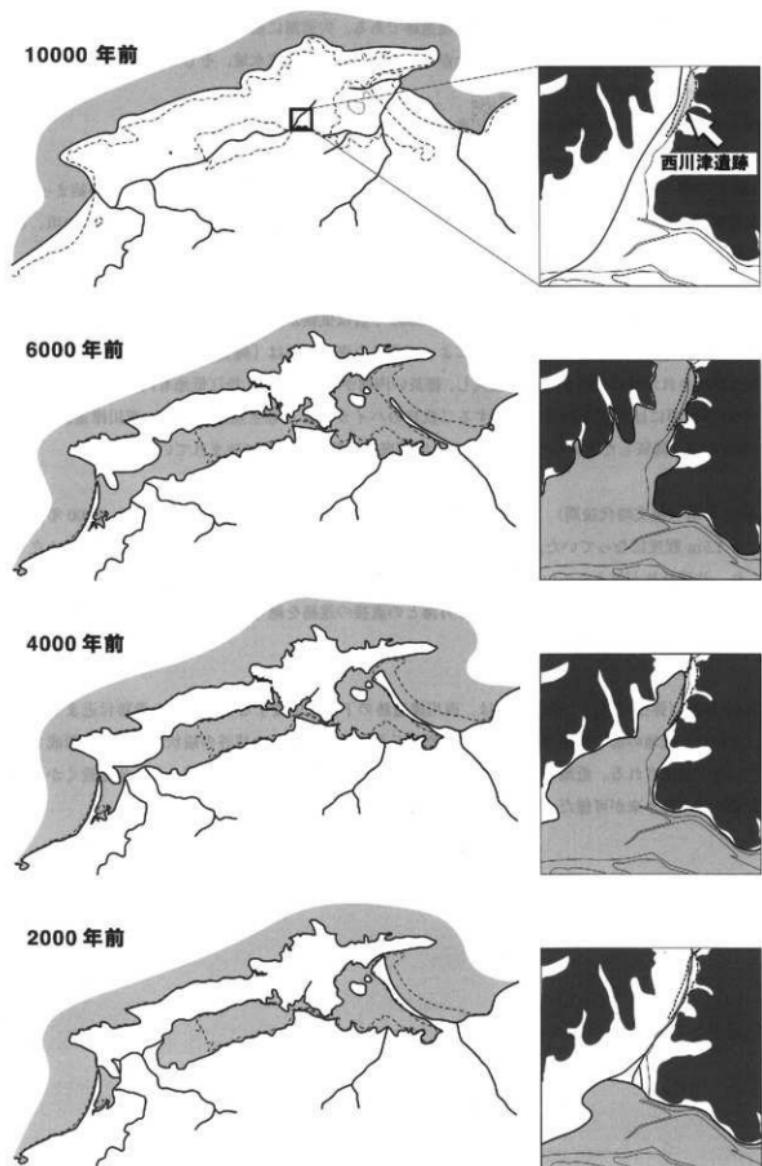
西川津遺跡をとりまく環境の変化は、次のようなものであった。

10000年前（縄文時代早期）：最終氷期が終わり、地質時代では現在に続く「完新世」が始まった。まだ氷期の影響が残っていて、日本列島周辺の海面は-30m～-40m付近にあった。この頃、松江低地から西へ向かって流れる河川が深い谷を形成し、宍道湖から出雲平野の位置を流れている。

6000年前（縄文時代前期）：10000年前～6000年前は気候が急速に温暖化した時代で、それに伴って海面が急上昇した。この海面上昇によって生じた海進現象は「縄文海進」と呼ばれている。氷期に形成された谷には西から海が侵入し、細長い内湾が形成された。松江低地も内湾の一部となり、7000年前頃には温暖な内湾に生息する二枚貝のハイガイなども生息していた。西川津遺跡では、6300年前に降灰したアカホヤ火山灰層が、内湾底に堆積した泥層に挟まれている。

4000年前（縄文時代後期）：海面は6000年前頃に現在と同水準まで達し、その後、5000年前頃に+1.5m程度になっていた。海面上昇が終わると、三角州と海岸砂州が成長して内湾は埋め立てられ、沖積低地が拡大していった。朝駒川の三角州もゆっくりと成長し、松江低地が拡大していく。内湾の西部では出雲平野が拡大して外海との直接の連絡を絶ち、現在のように中海を経て海水が流入する宍道湖へ変化していった。

2000年前（弥生時代）：松江低地は、西川津遺跡の下流に位置するタテチョウ遺跡付近まで広がっていた。低地の広い範囲は湿地状で、集落は丘陵裾部の緩斜面や枝谷の扇状地を中心に形成されていたと推定される。低地を流れる朝駒川は、西川津遺跡付近まで海水が週上し、集落近くから海まで舟での行き来が可能だった。



第3図 遺跡周辺の地理的変遷

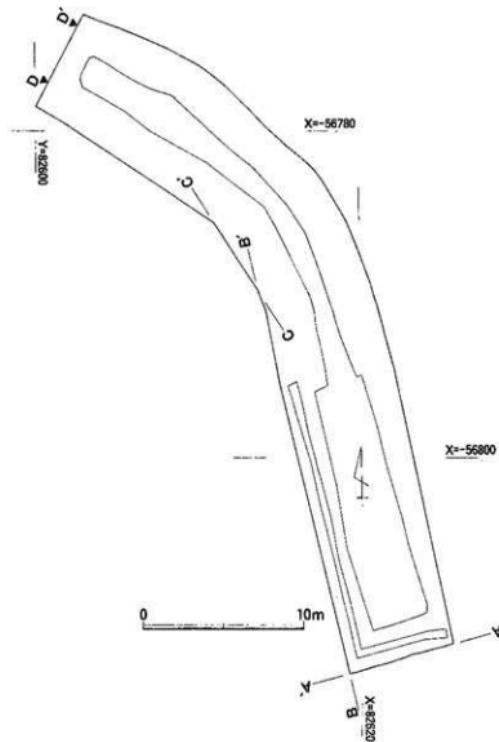
第3章 III区の調査

第1節 調査の経過と概要

調査経過

西川津遺跡III区で今回調査を実施した場所は、学園橋と嵩見橋との間に存在する中州の南西側部分である。この中州の公園整備に伴い、北西から流れ込む小河川と朝霧川を接続する部分が調査の対象となった。1997（平成5）年、この中州の東側部分は「西川津遺跡III区右岸」として調査が行われ縄文時代～平安時代の土器が出土している¹⁾が、このときの調査成果を参考に土層や包含層の様子を推定した。

調査区は、表土掘削や矢板工事との関係から、便宜的に南からIII-1区、同2区、同3区とし、南側のIII-1区から調査を開始した。重機により青灰色粘質土（第5図2層）まで除去し、その下位にある青灰色粘質土（第5図3層）から人力で掘り下げを行った。



第4図 西川津遺跡III区 調査区全体図 S = 1:300

調査概要

Ⅲ区は調査区全体が朝駒川の旧河道と考えられ、遺構はこの調査区では認められなかった。

基本的な層序はⅢ-1区・2区はほぼ共通で、上位から表土（第5図1層）-鉄分を含む青灰色粘質土（同2層）-砂層を含む青灰色粘質土（同3層）-青灰色砂礫層（同4層）-褐色粘質土（同5層）で、青灰色砂礫層が遺物包含層である。褐色粘質土は古穴道湖の湖底堆積物層と考えられており、この中にはアカホヤ火山灰層（同6層）が挟まる。

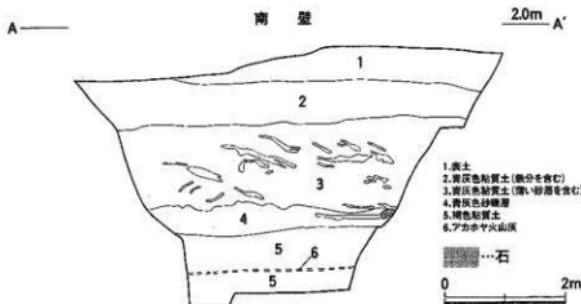
Ⅲ-3区は調査前まで朝駒川の支流だった部分であるため、土層堆積状況が他の調査区とは若干異なる（第5図）。最上層には現代の河川堆積物があり、その下位に青灰色粘質土が存在するが、Ⅲ-1区・2区に比べて薄く、場所によっては認められないところもある。また、壁の崩落のため図示できなかったが、青灰色粘質土と砂礫層との間に青灰色砂層と灰茶色砂層が存在する箇所があり、このうち灰茶色砂層からは弥生土器などの土器が出土している。

遺物は各調査区の砂礫層から縄文時代～近世の土器が出土しているほか、土錐などの土製品、石包丁、石錐などの石製品、椀や下歎などの木製品、獸骨が出土した。

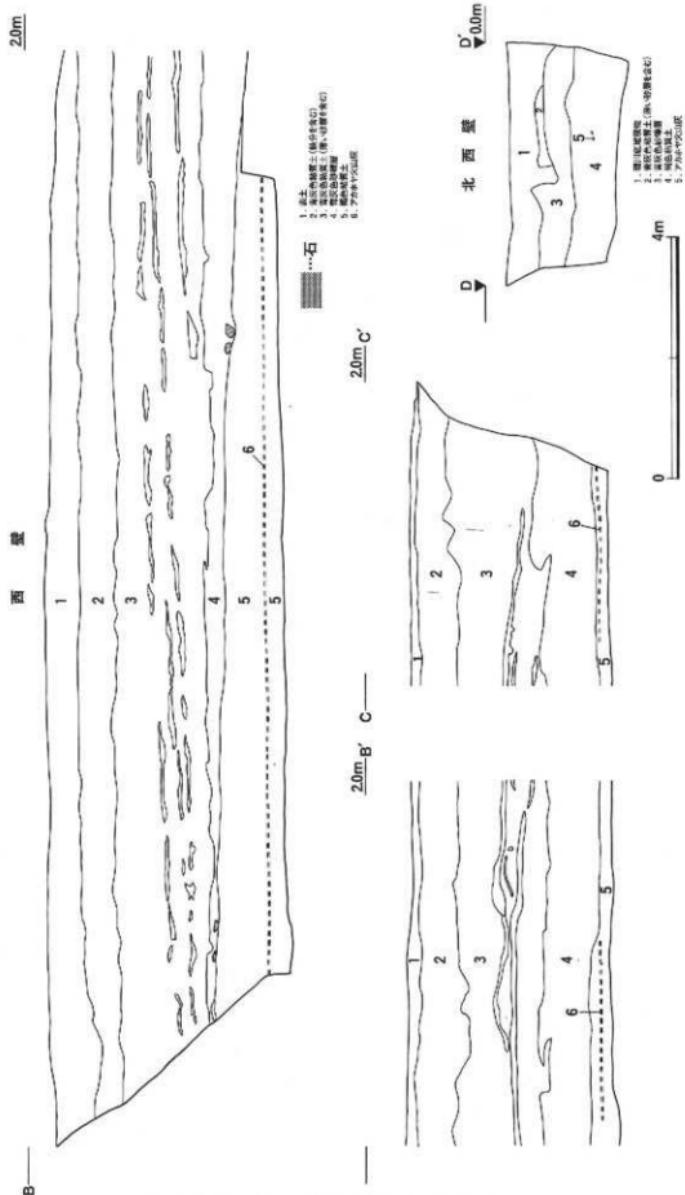
第2節 調査の結果

(1) Ⅲ-1区

Ⅲ区の最も南側に位置し、南端は1996（平成4）年の調査区に接する。調査区は南北25m、東西7mに設定した。南壁（第5図）の土層は、層序・レベルとも基本的に前回の調査で確認されたものと一致する。青灰色粘質土に挟まれる砂層の堆積状況から、南壁は当時の流路にはほぼ直交、西壁が流路にはほぼ平行との指摘を受けている²⁾。南壁、西壁ともには水平の堆積を示すが、西壁では北に行くにつれてわずかに砂礫層の高さが高くなっていく。



第5図 西川津遺跡Ⅲ区 土層図(1) S=1:80



第6図 西川津遺跡Ⅲ区 土層図(2) S = 1:80

III-1 区出土遺物

Ⅲ区から出土した遺物は、土器・陶磁器・土製品・石製品・錢貨・木製品・獸骨と多岐にわたる。ここでは土器のうち、Ⅲ-1区砂礫層から出土した弥生時代以降の土器について記すこととし、他のものはⅢ-2区・3区出土のものと合わせて種別ごとにまとめて後述する。

III-1区砂礫層出土土器（第7～12図）

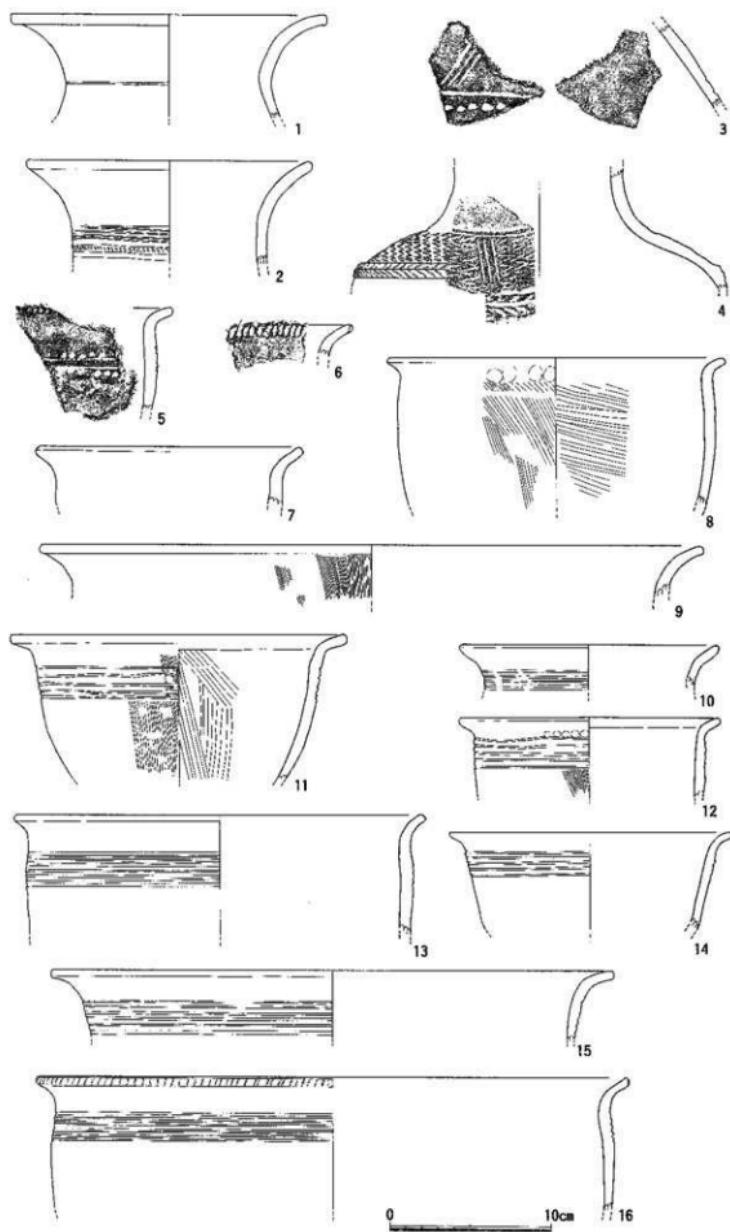
第7図～第9図は弥生時代の土器である。第7図1・2は壺で、1は口縁が外反し、頸部に段をもつ。2は口縁部が外反し、頸部が比較的長くなると見られる。頸部にはヘラ描沈線と刺突文が施される。3も壺の破片で、ヘラ描き沈線・刺突文・木葉文が認められる。4はヘラ描沈線・貝殻腹縁による沈線・羽状文をもつ。羽状文は胴部の突帯にも施される。5・6は壺の口縁で、いずれも口縁部外面に刻目文をもち、5は頸部にヘラ描沈線と刺突文が施される。7～9は壺の口縁で無文のものである。10～12は頸部に多条化したヘラ描沈線文をもつ。13～16は多条のクシ描き沈線を頸部にもつもので、16の口縁部には刻目文も施される。このうち11・14は鉢とみられる。

遺物の時期は、1・3～5が出雲I-2様式³⁾、2・10～16が同I-3～4様式に相当する。6～9については出雲I様式の範疇であるが詳細は不明である。

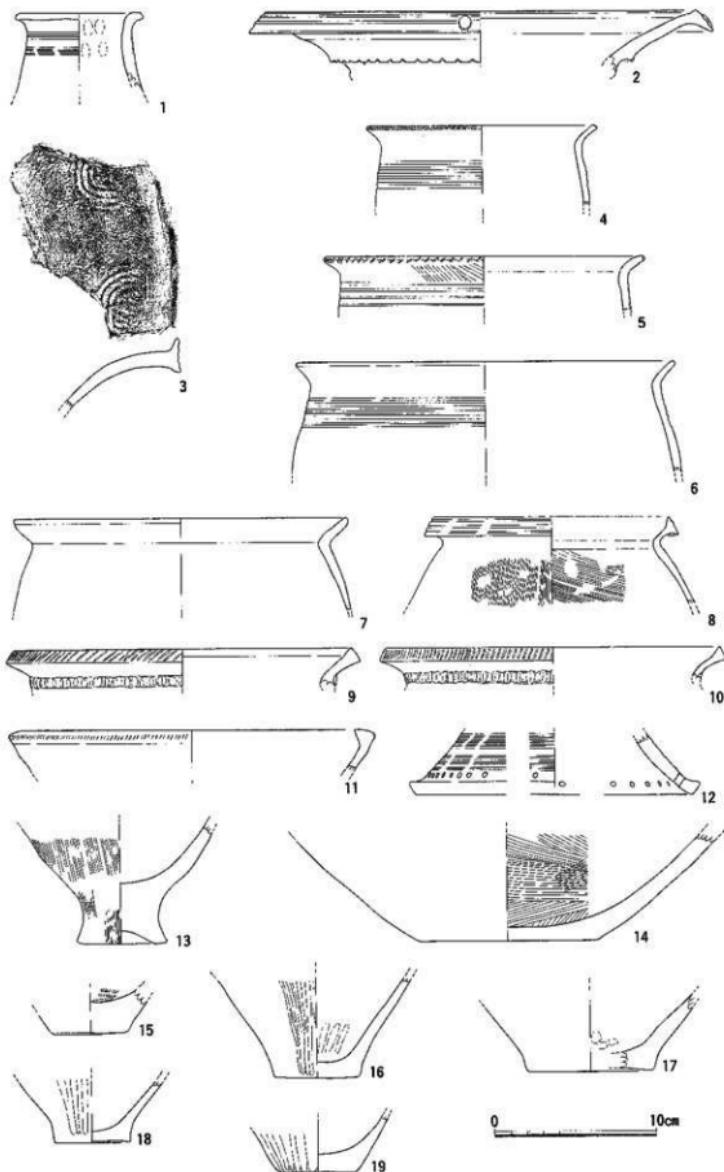
第8図1～3は壺、5～10は壺、11・12は高杯、13～19は底部である。1は長頸壺とみられ、口縁部は短く外反し上面は平坦になる。頸部には7条の浅いクシ描き平行沈線が施される。2は口縁端部が凹線文と円形浮文で加飾され、頸部には刻目突帯を複数有すると見られる。3は大きく開く口縁の内面に弧文が描かれる。4～6は口縁が短く外反し胴部があまり張らないもので、頸部に多条のクシ描き平行沈線をもつ。7は口縁部がやや内湾気味で、胴部の張りもやや強くなるようである。8～10は口縁端部が肥厚し平行沈線や刻目文が施される。8・9は頸部に指頭圧痕突帯ももつ。11は口縁端部が肥厚し、刻目文をもつ。調整は風化のため不明である。12は脚部で、端部が肥厚して平坦面をもつ。浅いクシ描き平行沈線と孔で加飾される。13は台付の壺と見られる。外面は全面ハケメ、内面はナデで調整される。14・15は内面ハケメ、外面ナデ、16～20は内面ナデ、外面ヘラミガキで調整する。

遺物の時期は1・4～6が出雲II-1様式、7・9・11が同III-1～2様式、8・12がIV-1～2様式、13以降の脚部、底部については内面にヘラケズリ調整がみられないことから出雲III-1様式以前となる可能性が高い。

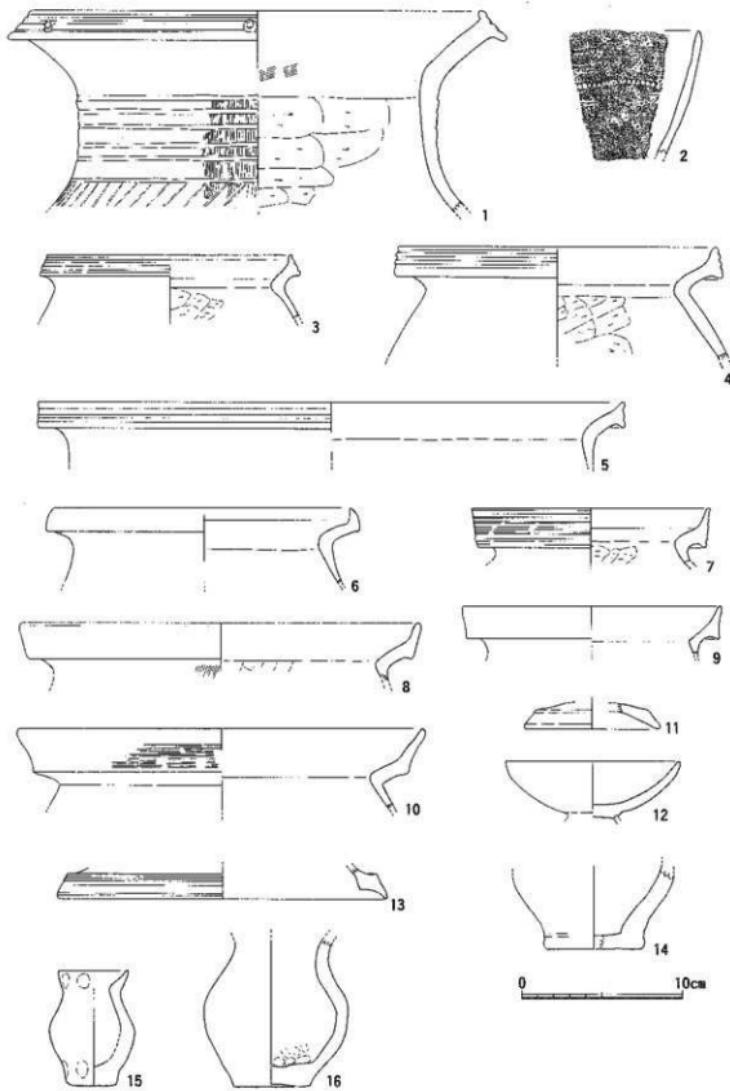
第9図1・2は壺と考えられる。3～10は壺である。11は蓋、12は低脚杯、13は脚部、14～16はミニチュア土器である。1は口縁部に円形のスタンプ文、頸部には凹線文と刻目文が施される。調整は頸部外面がハケメ、内面はヘラケズリされる。2は、細頸壺と考えられ、外面に平行沈線と連続刺突文がわずかに認められる。3～5は口縁端部が内傾し、2～3条の凹線を施す。内面頸部以下はヘラケズリされ、5も不明確ながらヘラケズリと見られる。6も風化が著しいが、同様なものであろう。7～10は口縁端部が外傾するもので、8・9は口縁端部に平行沈線が施されるものと思われる。11は端部が複合口縁状に作られ、内外面ともヨコナデ調整されている。12は口縁部が丸く作られ稜などはもない。13は高杯と見られ、複合口縁状の端部に3条の沈線をもつ。14～16は頸部が短く、口縁が外傾するものと考えられる。弥生時代前期の壺のミニチュアであると見られる。



第7図 III-1区 砂疊層出土土器実測図(1) S=1:3



第8図 III-1区 砂疊層出土土器実測図(2) S = 1:3



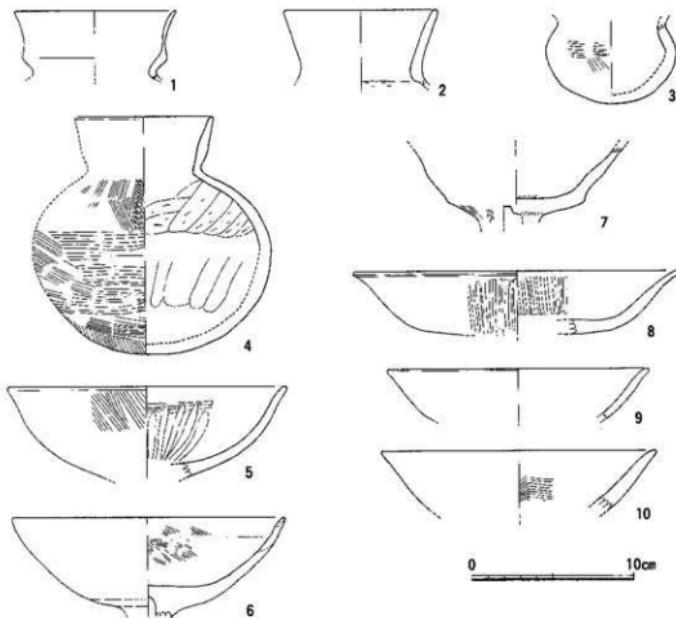
第9図 III-1区 砂砾層出土土器実測図(3) S=1:3

遺物の時期は、1~6・8が出雲V-1様式、7・9・13が同V-2様式と考えられる。11・12は出雲V-3~4様式であろう。

第10図は土器器で、1~4は壺または壺、5~10は高坏である。1は複合口縁で、風化のため文様・調整は不明である。2も口縁で直線的に外傾する。頸部以下はヘラケズリである。3は小形の胴部で内面胴部上半はナデ、下半はヘラケズリとみられる。4は完形の壺で、2に似た口縁をもつ。胴部内面上半はヘラケズリ、下半はナデを施す。5・6は坏部が比較的深いもので、5の内面にはヘラミガキが認められる。6は脚との接合部近くにかすかな稜をもち、内面はハケメののちヨコナデで調整する。7は坏部外面に段を有し、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面ともナデとハケメで調整される。8は坏部が比較的浅く、口縁端部はわずかに外反する。内外面とも縱方向のヘラミガキで調整する。9は外面ともヨコナデ、10は内面ハケメ調整される。

遺物の時期は1~3が松山編年Ⅰ期⁴、4~7が同Ⅱ期、6が同Ⅲ期と考えられる。そのほかは同Ⅱ~Ⅲ期と見られるが、詳細は不明である。

第11図は須恵器である。1は坏蓋で、口縁端部に平坦面をもつ。2・3は坏身で、口縁部は内湾する。4~6は坏と考えられる。4は体部が外傾し、外面は凹凸が著しい。5・6は器壁が薄い。7・8は、体部がきわめて短い坏である。9・10は束縛系の鉢で、10は口径が不明である。11は単純口縁の壺で縫部は丸く取める。12は底部で、内面は回転ナデ、外面はケズリの後ナデか。

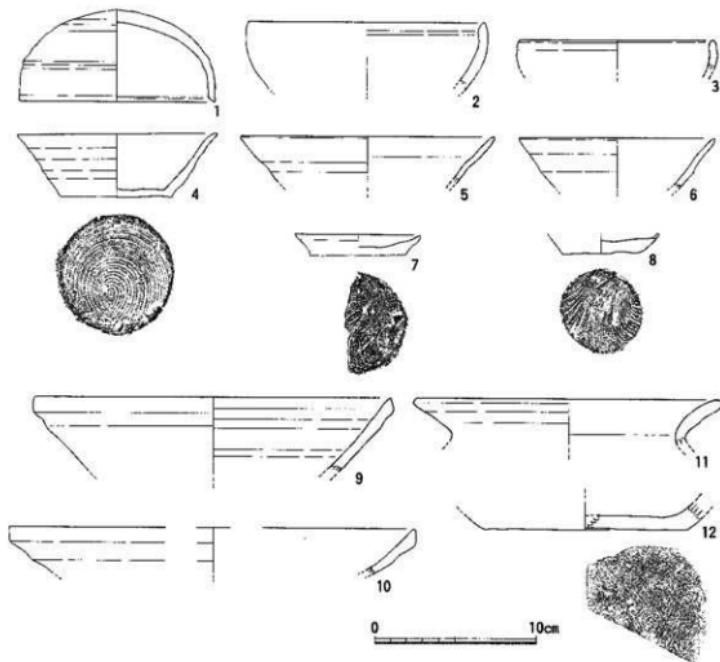


第10図 III-1区 砂疊層出土土器実測図(4) S=1:3

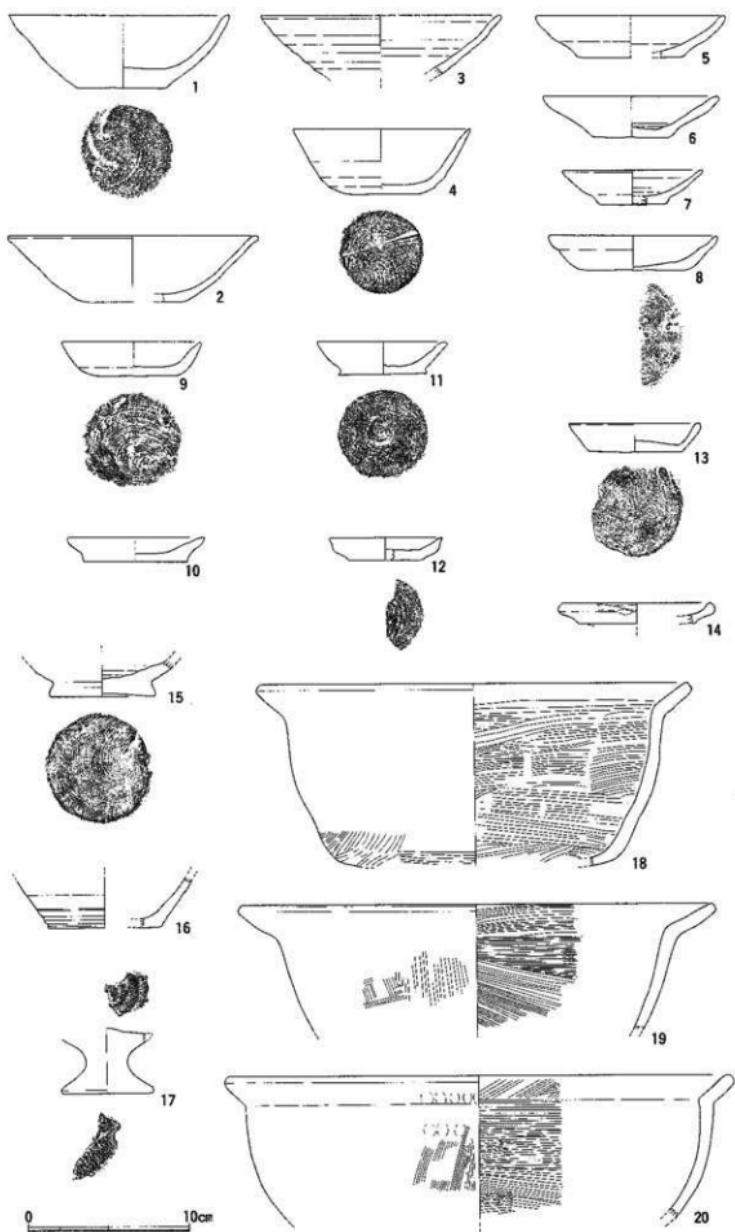
遺物の時期は、1が大谷編年出雲3期⁹、2~3が出雲国庁編年¹⁰の3形式、4が同4形式、5~6が10世紀代、7・8は12世紀¹¹と考えられる。9・10が12世紀末~13世紀初頭¹²、11・12については中世のものと見られるが詳細な時期は不明である。

第12図は奈良時代以降の土師器を図示した。1~14は壺または皿、15・16は底部、17は高台付き壺、18~20は鍋である。1は壺部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。2は口縁端部がわずかに外反する。3は壺部に凹凸が顕著である。4は、壺部が深く、口縁端部は若干細くなる。5・6は口縁部の外傾が大きく、全体に肥厚する。7もこれらに近い器形であるが、口径が小さく口縁も肥厚しない。8は全体に器壁が厚く、壺部外面中位に稜をもつ。9は器壁の厚い小形品である。10~12は底部が外へ張り出す。13は口縁端部が肥厚する。14は口縁端部が玉縁状に肥厚する。15は台状の底部で、回転糸切りである。16は底部外面に沈線状の凹凸をもつ。17は柱状高台付き壺で、壺部内面には回転ナデ、底部には糸切り痕が残る。18~20は口縁部・頸部外面をナデ、そのほかは粗いハケメで調整される。

遺物の時期は2・3・5~7は12世紀、17、18~20も同時期と見られ、9~12は12世~13世紀と考えられる¹³。その他についても古代末~中世のものと見られるが、詳細な時期は特定できない。



第11図 III-1区 砂礫層出土土器実測図(5) S=1:3



第12図 III-1区 砂疊層出土土器実測図(6) S=1:3

(2) III-2区

III-1区の北側に位置する。III区自体が狭いため、調査の際にはIII-1区を北側に拡張するように掘り下がった。調査区は南北約10m、東西7mに設定した。堆積状況は基本的にIII-1区と同様であるが、遺物包含層である青灰色砂疊層（第6図4層）が厚くなり、西壁北側ではアカホヤ火山灰層（同6層）が確認できない。

III-2区出土遺物

III-2区においてもIII-1区と同様に、青灰色砂疊層から各時代の多様な遺物が出土している。第13図に弥生土器、第14図は弥生土器と土師器、第15図には須恵器を示した。

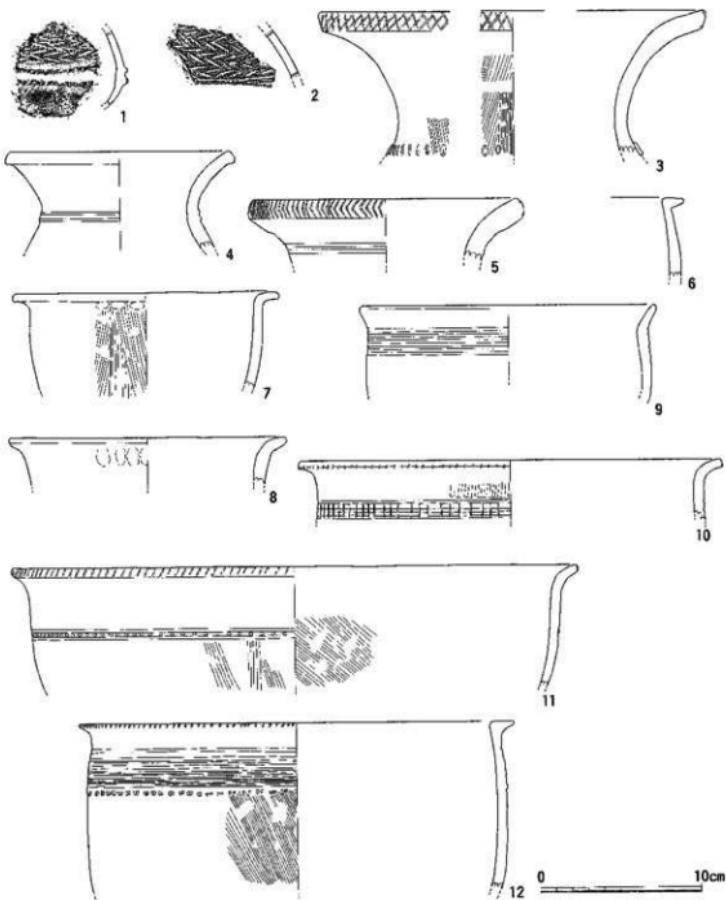
第13図はいずれも前期の土器で、1~5は壺、6~12は甕である。1・2はいずれも肩部の破片で貝殻腹縁による羽状文を施す。1は肩部最大径付近に2条の刻目突帯をもつ。3は口縁端部外面に面をもち、そこにヘラ描きの斜格子文を施し、頸部には指頭圧痕のある浮文を貼り付ける。破片のため径は定かではない。4は口縁端部が肥厚するもので、頸部には2条の削出突帯をもつ。5は口縁部に羽状文、頸部に沈線文が施される。6は口縁部が外側へ屈曲し、上面に面をもつもので、いわゆる「L字甕」である。7は口縁が外へ屈曲し、頸部に指頭圧痕をもつ。8は口縁が緩やかに外反するものである。9は口縁の屈曲は緩やかで、頸部には5条のヘラ描き沈線をもつ。10は口縁端部に刻目文、頸部にはヘラ描き沈線と円形のスタンプ文をもつ。12は口縁が外側に屈曲するもので、端部には刻目文、頸部にはヘラ描き沈線と2個単位の刺突文を施す。

遺物の時期は、いずれも出雲I-2~4様式のものである。このうち、器形、施文の特徴から1・2・10・11は出雲I-3~4様式、3~5・9・12はI-4様式に特定できると考えられる。

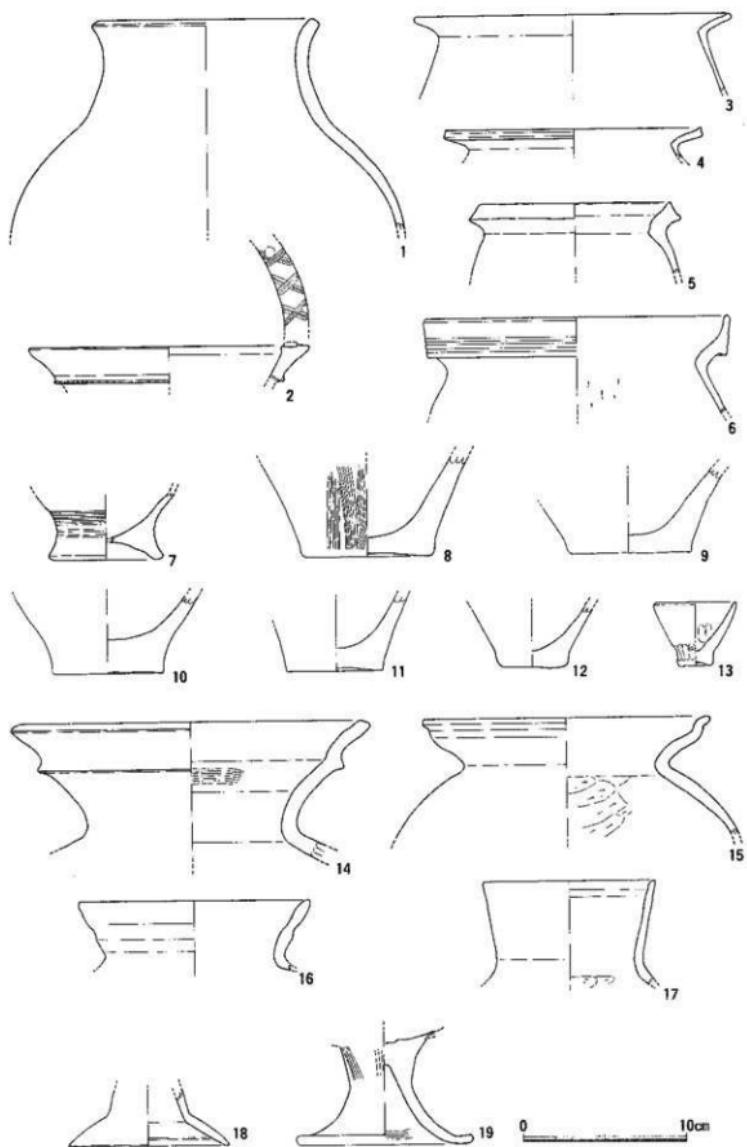
第14図1~5は弥生時代中期の土器、6は後期、7~12は底部、13はミニチュア土器、14~19は土師器である。1・2は壺で、1は口縁部がわずかに外反し、端部は肥厚しないがわずかに面をもつ。2は口縁部が外傾するもので上面に2条単位の斜格子文が施され、円形浮文の痕跡も残る。頸部には刻目突帯も認められる。3~5は甕で、3は口縁端部がわずかに肥厚する。4は口縁端部が肥厚し、わずかに上方に突出する。3は頸部付近から器壁が全体的に厚く、口縁端部が幅広くなる。これらはいずれも文様をもたず、ナデで調整すると見られる。6は風化が進んでいるが、口縁は複合口縁となり外面には沈線文も認められる。頸部以下はヘラケズリである。7は脚部で、外面に多条の平行沈線が施される。8~12は底部で、いずれも内面にヘラケズリは認められない。13は手づくねで、指頭圧痕が顕著である。14は古墳時代前期の壺で、複合口縁をもつ。15・16は甕で、複合口縁を意識しているがかなり形骸化している。口縁部はヨコナデ、内面頸部以下はヘラケズリである。17は単純口縁の壺とみられ、頸部以下はヘラケズリである。18・19は高杯の脚部である。18は脚端部へ屈曲しながら広がるもので、ヨコナデ調整、19は緩やかに外反し、端部がわずかに肥厚する。一部にハケメが認められるほかはナデで調整する。

遺物の時期は、1・2が出雲III-1様式、3・4が同III-1~2様式、5はIV様式、6はV-1様式と考えられる。7~12は出雲III-1様式以前の可能性が高い。13は出雲I様式であろう。14・15は松山編年Ⅱ期、16・17が同III期、17~19は同III~IV期と考えられる。

第15図1~3は須恵器、4~13は土師器である。1は口縁部で複合口縁状を呈する薄手のものである。2・3は坏で、口縁部まで直線的に外傾する。坏部には回転ナデによる凹凸が目立ち、低い高台をもつ。風化のため不明瞭だが、底部は回転糸切りである。4は壺で、頸部が「く」の字に屈曲する単純口縁のものである。口縁部内面と胴部外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリである。5・6は坏と見られるが、底部を欠いている。坏部は直線的に口縁に至るもので、6は器壁が厚い。7・8も坏であるが、坏部が深く内済しながら口縁に至る。9は全体が復元できた小形品で、底部はヘラで切り離すようである。10も小形の坏だが底部の調整は不明である。11・12はいずれも坏



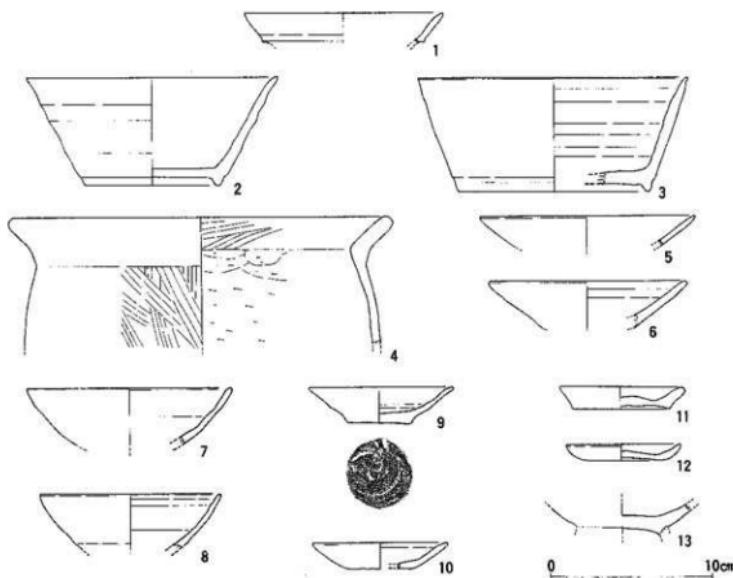
第13図 III-2区 砂疊層出土土器実測図(1) S=1:3



第14図 III-2区 砂礫層出土土器実測図(2) S = 1:3

部が短く浅いもので、11は器壁が厚く直線的に立ち上がり、12はやや内湾する。13は短い脚をもつものと見られる。坏部、脚部ともに欠くが、底部内面に糸切りの痕跡が認められる。

遺物の時期は、1は器形から大谷編年の出雲2期と見られる。2・3が国庭編年の5形式¹⁰、4～13は古代末～中世の土師器で5～10が12世紀、11・12は13世紀とみられ、13は足高高台とすれば11世紀と考えられる¹¹。



第15図 III-2区 砂疊層出土土器実測図(3) S=1:3

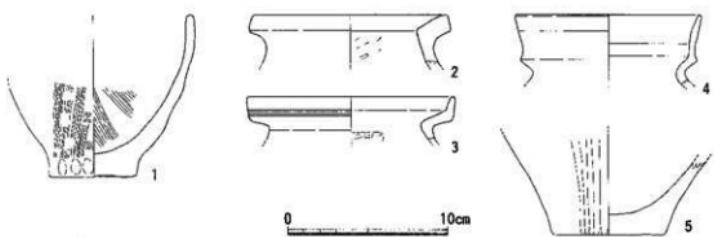
(3) III-3区

III-2区の北西側に位置する。この地区もIII-2区から北西に拡張して調査を実施した。III区自体が狭いため、調査の際にはIII-1区を北側に拡張するように掘り下げた。この調査区についても調査区は南北約14m、東西8mに設定した。調査終了直前に調査区が再び水没したため、西壁のセクションが図示できなかったが、堆積状況は、基本的に前の2つの調査区と同様である。ただ、III-2区との境界付近のごく一部で、青灰色砂疊層の上に灰茶色砂層が存在する箇所があり、この層の中から土器が出土した。また、北西壁のセクションでは、青灰色砂疊層、褐色粘質土の検出面は他の調査区よりやや深いが、わずかに認められるアカホヤ火山灰層は逆にやや高い位置で検出されており、青灰色砂疊層が堆積する際に褐色粘質土が削られているものと見られる。

III-3区出土遺物

この調査区でも縄文時代以降、各時代の遺物が出土した。第16図は灰茶色砂層出土の土器でいずれも弥生時代のものである。1は直口の鉢で、ヨコナデとハケメで調整し、底部には指頭圧痕が

残る。2~4は壺である。2は風化のため詳細は不明だが、無文のものとみられ、内面頸部以下はヘラケズリが施される。3は口縁部に平行沈線をもち、内面頸部以下をヘラケズリする。4は口縁端部が大きく拡張する。5は底部で外面ヘラミガキ、内面ナデ調整である。遺物の時期は、1が出雲I~II様式、2・3が同V-1様式、4が同V-4様式に相当するとみられるが、灰茶色砂層自体は二次堆積で、遺物の時期とは異なる。



第16図 III-3区 灰茶色砂層出土土器実測図 S=1:3

第17図~第21図は青灰色砂層から出土した土器類で、第19図までが弥生土器、第20図が古墳時代前期~中期の土師器、第22図に須恵器と奈良時代以降の土師器を示した。

第17図1・2は壺、3~5、7~15は壺、6は鉢である。1は口縁が緩やかに外反し端部に面をもつ。2は頭部に段を有し、内面は細かいヘラミガキを施す大形のものである。3は口縁部が外傾し頸部から胴部へ直線的に続く。4・5は口縁部が短く外反するもので、5は口縁部に刻目文が施される。6は口縁部が肥厚し、上側には面をもつ。頸部には断面三角形の突帯を有する。7・8は頸部に1条の沈線が施される。9は頸部の2条のヘラ描き沈線の間に、竹管状工具によるスタンプ文が施される。10は頸部に細く鋭い沈線が施され、外面頸部と内面に指頭圧痕が残る。11~15は頸部のヘラ描き沈線が多条化するものである。ナデ調整のものが多いが、11の外側にはハケメも認められる。また、12・14は口縁部に刻目文をもつ。時期は2が出雲I-2様式、1・3~10が出雲I-3様式、11~15が出雲I-4様式に相当すると考えられるが、6については口縁形態から、出雲III様式ぐらいまで下る可能性もある。

第18図1・2は壺、3~14は壺、15・16は鉢と考えられる。1は口縁部が大きく外反するもので、上面には2条の指頭圧痕突帯、外面には2条単位の斜格子文を施す。2は頭部から口縁部へ直線的に外傾し、端部上面に円形浮文を貼り付ける。頸部には複数の刻目突帯をもつ。3は口縁部のみの破片で、刻目文が施される。4・5は口縁が短く外反し、端部には刻目文が施される。頸部にはクシ描きの平行沈線をもつ。6・7は頸部が外へ屈曲するもので、6は口縁端部が丸みをもつが、7はわずかに肥厚し面をもつ。また、6の頸部には指頭圧痕突帯が巡らされる。8~10は口縁部が短く外反する無文のものである。8・9は外面ハケメ、内面はナデで調整され、8は内面に部分的にヘラミガキを施す。11は口縁部のみであるが、頸部が外へ鋭く屈曲するものとみられる。風化のため、調整など詳細は不明だが口縁端部には刻目文が認められる。12~14は、頸部が外へ屈曲し、口縁部が肥厚・拡張して平行沈線をもつものである。口縁部の肥厚はわずかで、施される沈線はいずれも2条である。調整は口縁部~頸部付近がヨコナデ、胴部は12をのぞきハケメが認めら

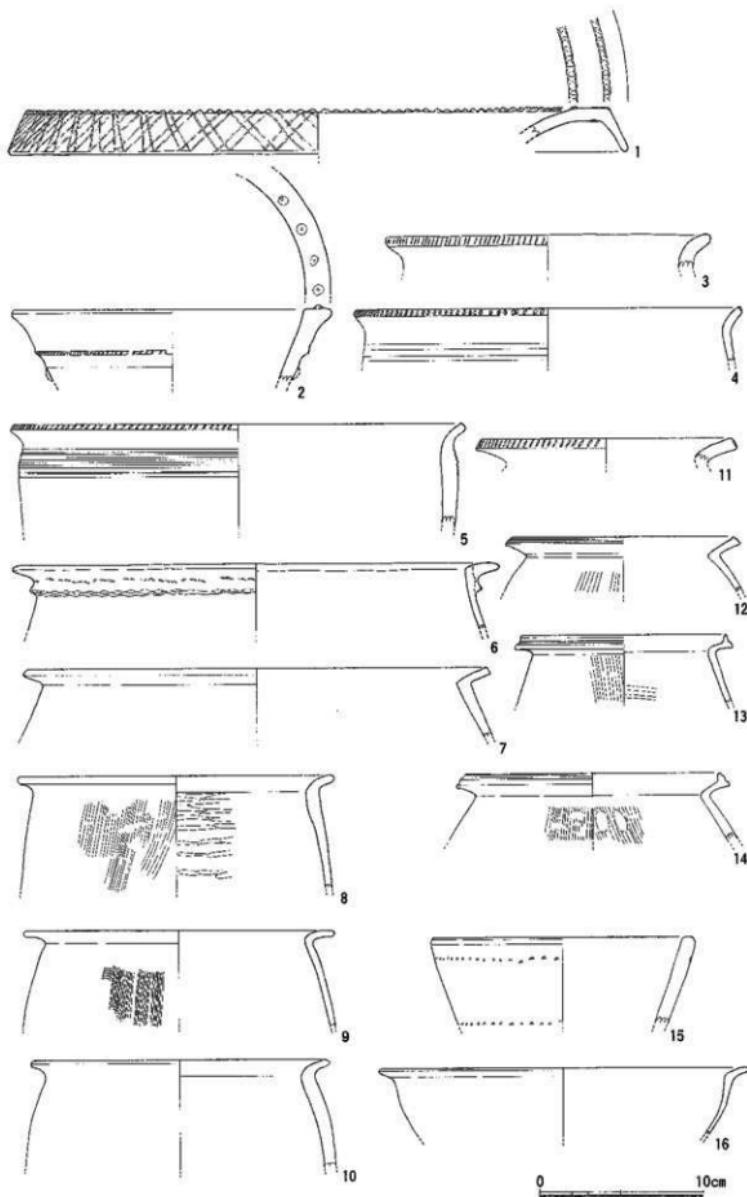


第17図 III-3区 砂疊層出土土器実測図(1) S=1:3

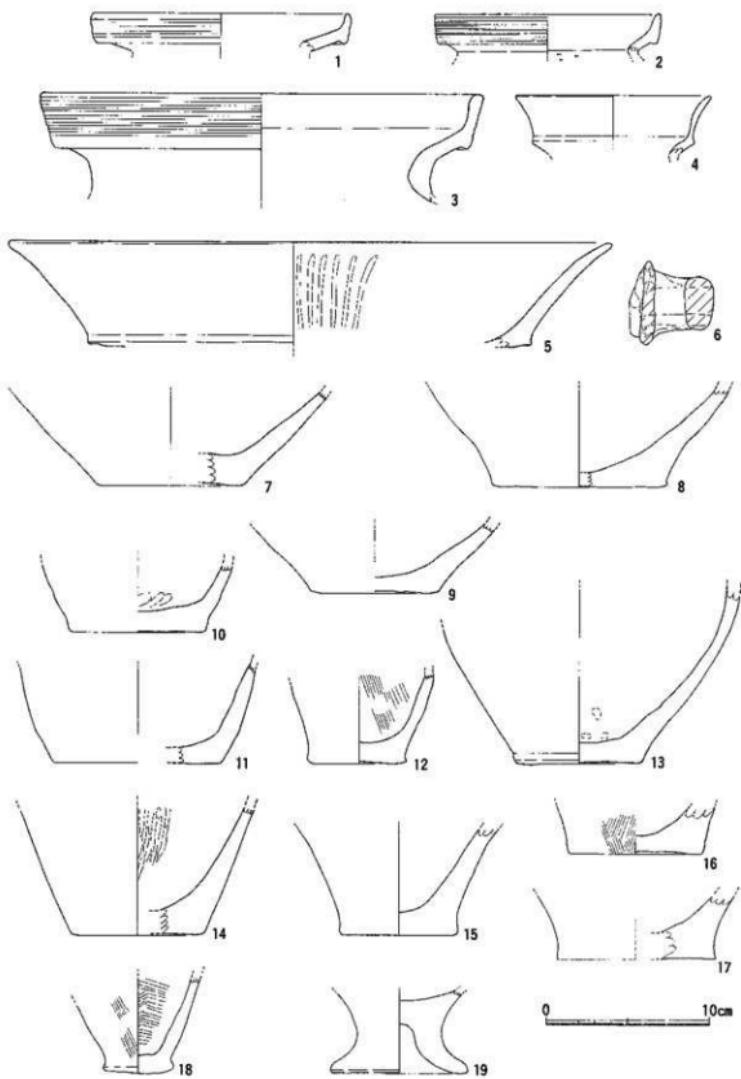
れる。15は厚い器壁をもつ直口の口縁で、三角形の刺突文が2列認められる。この地方ではあまり見られない器形だが、備前の弥生時代中期の鉢にこのような口縁をもつものが存在するようである¹⁰⁾。16は風化が著しく器壁の厚さも本来よりかなり薄いものと見られる。調整も不明だが、一応鉢としておくが、高坏の可能性もある。遺物の時期は、3~5・8・15が出雲II-1様式、2・6~10・16が出雲III-1様式、1・11が出雲III-2様式、12~14が出雲IV-1様式に相当すると考えられる。

第19図1・2・4は壺、3は壺、5は鼓形器台、6は把手、7~19は底部・脚部である。1・2は口縁端部が上下に拡張し、外面に擬四線を施す。1は口縁部のみの破片で、頸部以下の調整が不明であり、中期の範疇に入る可能性もある。2は内面頸部以下ヘラケズリである。3は複合口縁で6条の擬四線文が施される。4は口縁部が内溝して外へ開くもので、調整は風化のため不明である。5は大形の鼓形器台で、受部と見られる。内面に縱方向のヘラミガキがかすかに認められる。6は風化のため調整は不明だが、器壁が厚くしっかりしたもので、大形の注口土器またはいわゆる山陰型瓶につくものであろう。7~9は大きく外傾して胴部に至るもので、調整が不明な部分もあるが、ナデ調整と見られる。10~13はやや外溝しながら立ち上がるもので、10・13の内面に指頭圧痕が残るほか、12はハケメが施される。14~17は外傾が小さく、直線的またはやや内溝して胴部に至るもので、14の内面にヘラミガキ、16の外面にはハケメが施される。18はやや小形の底部で、手捏の可能性もある。内外面ともハケメが認められる。19は脚部である。器壁は厚く、短く外反して端部は丸くおさめる。遺物の時期は、1・2が出雲V-1様式、3が出雲V-2様式、4・5が出雲V-4様式、6が出雲V-3~4様式に相当すると考えられる。7~18はヘラケズリが認められないことから出雲III-1様式以前、19は出雲III-2様式以降と考えられるが、いずれも詳細な時期は特定できない。

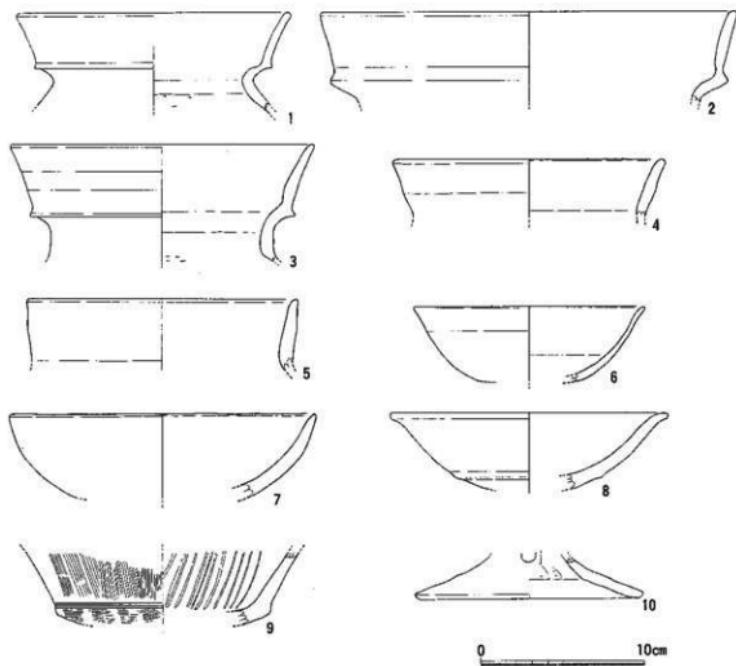
第20図1・4・5は壺、2・3は壺、6~10は高坏とみられる。1は複合口縁で、外方へ直線的に開き、端部がわずかに肥厚する。頸部下位からヘラケズリで調整する。2・3もこれと似た口縁部をもつが、端部や縫が全体に丸みを帯びる。3も頸部の下位からヘラケズリを施す。4・5は単純口縁であるが、口縁部外面にくほみをもち、複合口縁の痕跡がみられる。6は器壁が薄く、坏部が比較的深いもので、丸底の坏の可能性もある。7は器壁が厚く、口縁端部はやや鋭くなる。8は坏部外面に段をもち、口縁部は外反する。9は坏部外面の段が8よりも強調され、坏部も深い。坏部内面には暗文が施され、外面の段より上側は縦方向、下側は横方向のは細かいハケメで調整される。10は高坏の脚部で、端部に向かって大きく開く。径約1cmの円孔をもち、内面はヘラケズリ、端部付近はナデで調整される。遺物の時期は、1~3が松山編年I期、4~10が同III期に相当すると考えられる。



第18図 III-3区 砂砾層出土土器実測図(2) S=1:3



第19図 III-3区 砂礫層出土土器実測図(3) S = 1:3

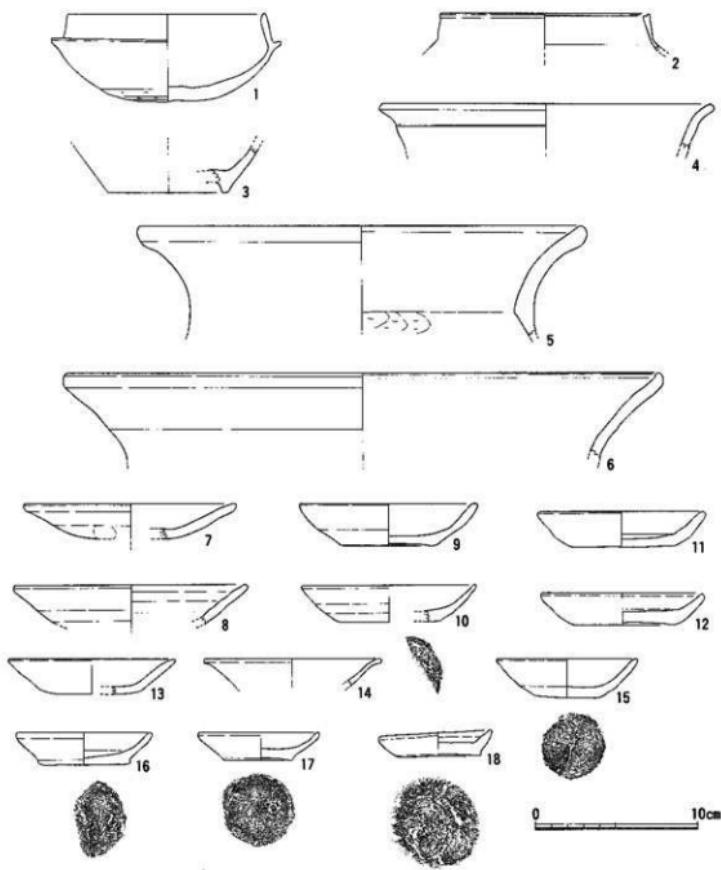


第20図 III-3区 砂礫層出土土器実測図(4) S=1:3

第21図1~4は須恵器で、1・2は壺身、3は底部、4は甕の口縁部である。5以下は土師器で、5・6は甕、7~18は壺である。1は口縁部に沈線などを施さず丸くおさめるもので、底部の狭い範囲にヘラケズリを施すほかは回転ナデで調整する。2も壺身の口縁部付近の破片と考えられ端部には沈線状のくぼみをもつ。3は底部で、短い高台が底部最外周につけられる。4は口縁部が外反し、頸部付近に1条の沈線をもつ。5・6は口縁部が緩やかに外反するもので、5は端部が肥厚し、6は上側につまみ上げられるような形をとる。5では頸部以下はヘラケズリで調整しており、6も頸部を欠くが同様な調整と思われる。7・8は口径に対し底部が小さいもので、回転ナデで調整し、これによる凹凸が内外面に残る。7の外面底部付近には指頭圧痕も認められる。9・10は底部からやや内湾しながら口縁部に至るもので、9では口縁部の器壁が厚くなる。風化のため明瞭ではないが、いずれも回転糸切りで切り離される。11・12は全体的に器壁が厚く、壺部がやや浅いものである。底部は11が糸切り、12はヘラ切りと見られる。13は底部から直線的に口縁部に至り、端部はやや鋭くなるが丸くおさめる。底部まで回転ナデを施しており、ヘラや糸切りの跡は認められない。14は壺部のみで、口縁部は緩やかに外反する。15は壺部外面にわずかな稜をもち、回転糸切りで底部を切り離している。16~18は底部が外へ張り出すものである。16・17は壺部がやや内湾しながら立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。底部は回転糸切りの痕跡が残る。18は壺部

が短く不整形なものであるが、完形品で底部は回転糸切りである。

遺物の時期は 1 が大谷縄年出雲 3 期、 2~6 は古墳時代後期～奈良時代と考えられる。 7~18 は古代末～中世のもので、 7~17 が 12 世紀、 18 は 13~14 世紀とみられる¹³⁾。



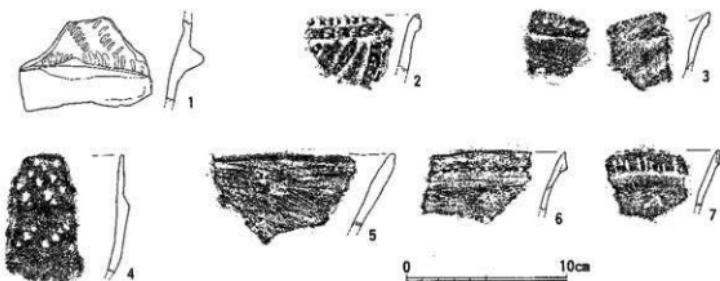
第 21 図 III-3 区 砂礫層出土土器実測図(5) S = 1:3

III区出土上縄文土器

第 22 図は、III区から出土した縄文土器をまとめて図示したものである。1 は外間に突起をもち、それより上はヘラ状工具による連続刻突文で押引刺突文とも考えられる。下は条痕調整、内面も条痕調整である。2 は口縁部で、幅約 1 cm の隆帯が貼り付けられる。口縁端部と隆帯には半截竹管状工具による刻目文が施され、地文が縄文となっている。3 は口縁部が肥厚する波状口縁で、口縁

部外面には刺突文が認められる。4は浅鉢で口縁部付近は器壁が薄くなる。外面全体に刺突文が施される。5は粗製の深鉢で条痕調整である。6・7は突帯文土器で突帯には刻目をもつ。

遺物の時期は、2が縄文時代早期末、1・3・4が前期初頭¹⁴⁾、5が縄文時代後・晚期、6・7が晩期である。



第22図 III区出土 縄文土器実測図 S=1:3

その他のIII区出土土器

第23図は、壁の崩落土などから出土した土器のうち図化できるものを掲載した。1~10は弥生土器、11~13は土師器、14は須恵器である。

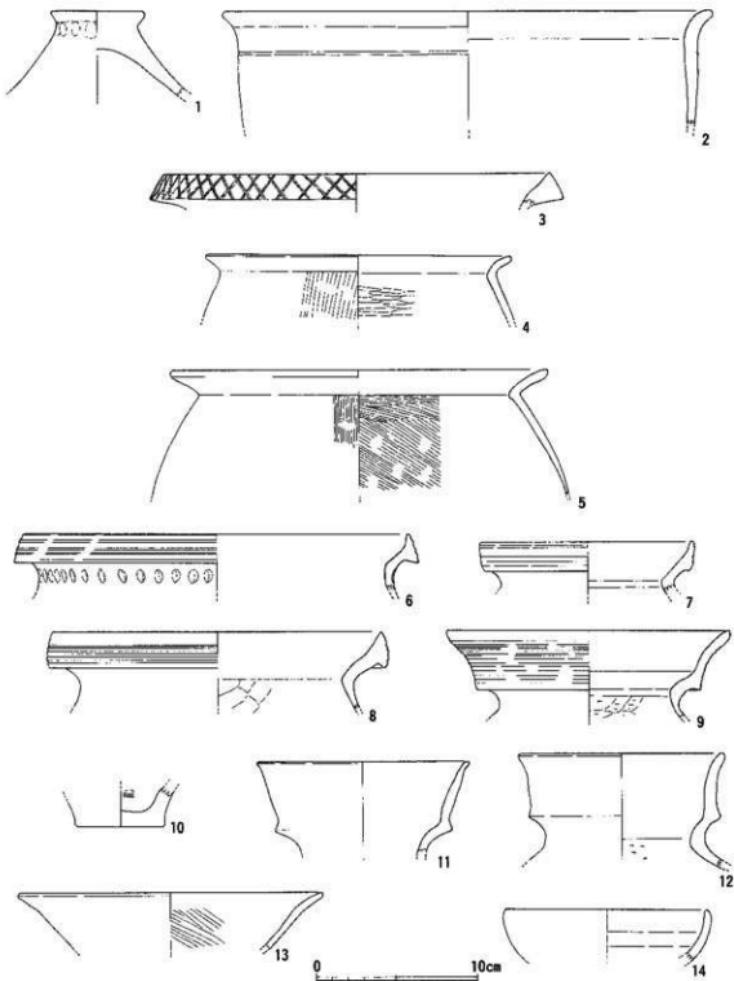
1は蓋で、III区から出土したものはこの1点のみである。風化しているが、外面ヘラミガキ、そのほかはナデと見られ、指頭圧痕も一部に残る。2は壺で、頸部にヘラ描き沈線をもつ。3は壺の口縁で、肥厚する腹部の外面には2条単位の斜格子文を描く。4・5は壺で、頸部がくの字に屈曲する。腹部はハケメ調整であるが、4の内面はヘラミガキを施す。6~9も壺である。6は口縁部には4条の擬凹線文、頸部には指頭圧痕文をもつ。調整は風化のため定かではないが、内面頸部はヘラケズリと見られる。7・8は口縁部が肥厚し、外面に3~4条の沈線をもち内面頸部以下はヘラケズリである。9は口縁部が拡張して外反し、13条の平行沈線を施す。10は底部で、内面の一部にハケメが見られる。11・12は壺で口縁部に沈線文はもたない。11は端部を肥厚させ外面に屈曲させる。12は全体に器壁が厚く、口縁部は外反する。13は高杯と考えられ、内面の一部にハケメが見られる。14は壺で、壺部は内溝口縁は丸くおさめる。遺物の時期は、1が出雲I-3様式、2が同I-2様式、3~5がIII-1様式、6~8がV-1様式、9がV-3様式、11・12がV-4様式である。13は松山編年のII期、14は奈良時代以降と考えられるが詳細は不明である。

III区出土陶磁器

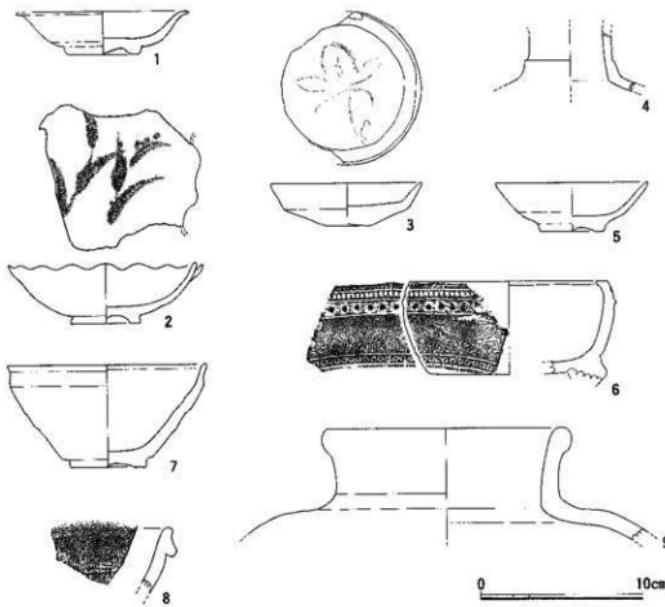
第24図は、III区から出土した陶磁器類をまとめたものである。小片のため図化できず、写真掲載のみとしたものもここで合わせて紹介する。

1・2は肥前系の皿である。1は、内面に胎土目が認められる。2は輪花皿で、内面に鉄絵が描かれる。時期はいずれも17世紀第1/4半期である。3は龍泉窯の青磁皿で、大宰府編年¹⁵⁾の皿1類に比定される。4は広東産の水注なし瓶である。時期は平安時代である。5は李朝の皿で、高台にも胎土目が認められるものである。6は瓦質の高炉で、中世後半のものである。7は美濃天

図、8は肥前系の摺鉢、10は備前の甕である。写真図版22aは越州窯系の青磁碗1類または2類で、内面に目跡を残す。bは龍泉窯の青磁碗B1または2類で、蓮弁をもつ。cは大宰府縦年の碗類である。d・eは肥前系の碗と見られ、17世紀末～18世紀初めと考えられる。出土した地区は1・3～6とb・c・dがIII-1区、9がIII-2区、2・7・8とa・d・eがIII-3区である。



第23図 III区出土 土器実測図 S=1:3



第24図 III区出土 陶磁器実測図 S=1:3

III区出土土製品・錢貨

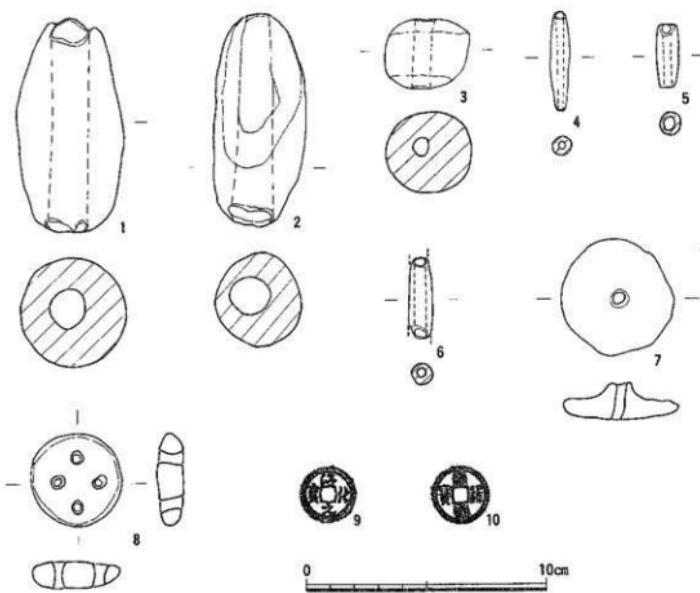
第25図はIII区出土の土製品と錢貨を図示した。

1~6は上鍊である。1・2は平面が長椭円形で、長さ約9cm、幅約4cmとほぼ同様な大きさのものである。2は長さ2.9cm、幅3.6cmで横幅の方が大きくなるものである。4~6は細身で小形のものである。完形品は4のみで、長さ約4cm、幅約1cmである。7は紡錘車で、欠損する部分があるように見られる。径は約5cm、孔の径は0.5cmである。8是有孔円盤の可能性があるが、孔を4つもつ例はないようであり、詳細は不明である。9・10は輸入銭で、9は淳化元寶（草書・990年初鑄）、10は唐國通寶（篆書・959年初鑄）である¹⁰⁾。遺物の出土した地区は、1・3~6・8がIII-1区、2・7はIII-2区、9・10はIII-3区である。

III区出土石製品

第26・27図には石製品を図示した。第26図2・4、第27図1・2・4・6がIII-1区、そのほかはIII-3区から出土した。

第26図1は黒曜石製の石鎚で、先端を一部欠いている。2は石包丁の破片である。刃も一部に残存する。紐を通す孔から浅い溝状のくぼみが読み、これは紐による摩滅痕の可能性もある。3は石鎚の破片と見られる。右下のごく一部に刃が残っている。4は石鎚で、両端に紐をかけるくぼみをもち、長さ約7cm、幅約5cmである。摩滅が著しく一方の端部を一部欠く。



第25図 Ⅲ区出土 土製品・銭貨実測図 S=1:2

第27図1~3は管玉の未製品及び素材である。いずれも薄い緑色を呈する石材を使用するものである。1は右端付近が厚さ約5mmになっており、片面に溝の痕跡が残る。2は全体が厚さ約5mmになっており、右端から約5mmのところに溝をもつ。円の上端をのぞく3つの端も直線的になってしまっており、打割・研磨の痕跡は明瞭ではないが、一定程度厚さ・長さの調整が行われた段階のものと考えられる。3は前の2者よりやや原みがある。溝の痕跡は右端にあり、円の表面と裏面の両方から溝を入れている。右側面には擦痕をもつほか図の左上も斜めに切り取られているが、これが玉作に関係するものかどうかは不明である。これらは板状の素材に施溝して柱状の素材を得る擦切技法が認められるものである。

4は表・裏面の一部に平坦面や凹面をもち、擦痕も認められることから砥石とした。きめの細かい軟質の石を使用している。5も片面が凹面になっており砥石と考えられる。砂岩系の石を使用している。6は板状を呈する石材の片面に墨書きが残るものである。墨書きは2文字のうち上が「冠」ないし「罪」と見られるが、「冠」の可能性が高い。下の文字は「神」である。何らかの祭祀に関わる遺物で、平安時代以降のものと考えられるが詳細な時期や性格については不明である。

III区出土木製品

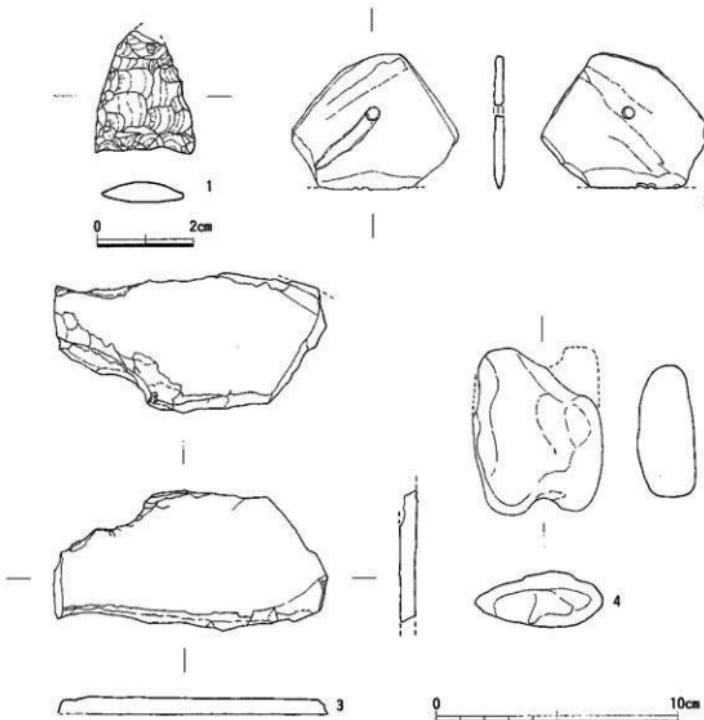
III区から出土した木製品を第28・29図に図示した。木製品は、青灰色砂疊層のほか灰茶色砂、青灰色砂質土からも加工痕をもつものが出土しており、それらについても掲載した。

第28図1は椀で、口縁の平面形は梢円になり、口径は長径で15.2cmとなる。2は下駄と考えられる。3は用途不明で、外径約5cm、中に径2.5cmの孔をもつ。4は下駄の差し歯と考えられる。

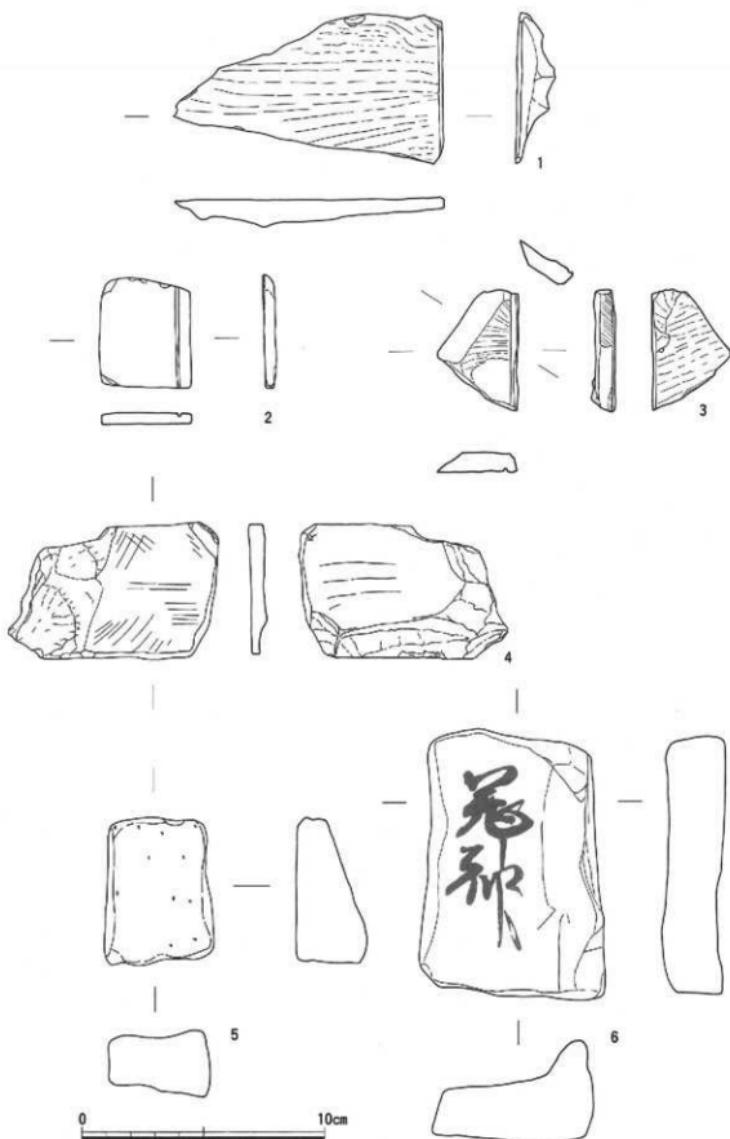
第29図1・2は下駄である。2は一方の端部が斜めにカットされ、中央に3つ、端部に1つの小孔をもつ。3は棒状で一方の端部を欠くが、もう一方の端部には小さな抉りをもつ。4は平面四角形の板状を呈するもので、一方の端部付近に削り込みがある。両端には計4つの釘孔を有する。5は断面円形の棒状のものである。一方の端部付近に抉りがある。

III区出土動物遺体（写真図版25）

III区から出土した動物遺体を掲載した。ウシ、ウマ、シカの骨や歯牙、スッポンの腹甲が検出された¹⁷⁾。



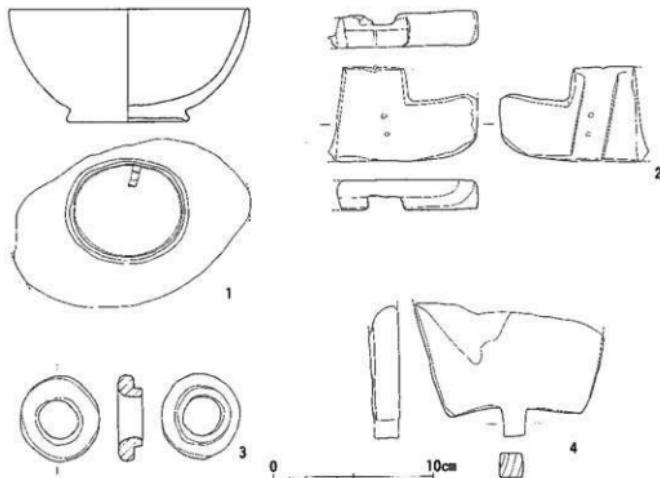
第26図 III区出土 石製品実測図(1) S=1:2 (1のみS=1:1)



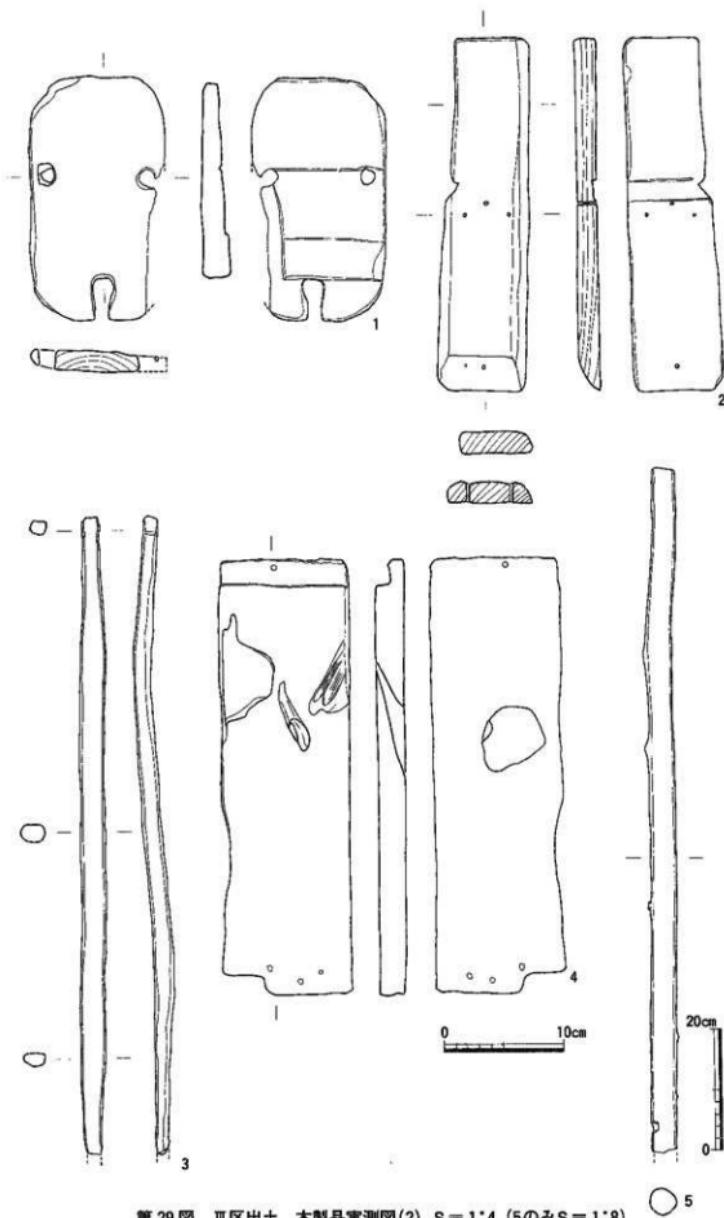
第27図 Ⅲ区出土 石製品実測図(2) S=1:2

註

- 1) 島根県教育委員会『西川津遺跡VI』 1996
- 2) 中村唯史氏の御教示による
- 3) 松本岩雄「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』一山陰・山陽編一 1992
以下、出雲○様式と記載したものはこの編年による。
- 4) 松山智宏「出雲における古墳時代前半期の土器様相」『島根考古学会誌』第8集 1991
以下、松山編年○期と記載したものはこの編年による。
- 5) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
以下大谷編年出雲○期と記載したものはこの編年による。
- 6) 松江市教育委員会『出雲国府跡発掘調査概報』 1971
- 7) 広江耕史「鳥取県における中世土器について」『松江考古』第8集 1992
広江耕史・片岡詩子「鳥取県における古代末～中世にかけての須恵器について」「中近世土器の基礎研究」IV 1988
- 8) 明石市教育委員会・平安博物館『魚住古窯跡群発掘調査報告書』 1985
- 9) 註7に同じ
- 10) 註6に同じ
- 11) 註7に同じ
- 12) 正岡龍夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年』一山陰・山陽編一 1992
- 13) 註7に同じ
- 14) 井上智博「西日本における绳文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 1991
- 15) 輸入陶磁器の時期については山本信夫氏の御教示を得た。他に次の文献を参考にした。
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国磁について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- 16) 永井久美男 編『中世の出土鉄』兵庫埋蔵鉄研究会 1994
- 17) 骸骨・動物遺体鑑定については西本豊弘氏に御指導いただいた。



第28図 三区出土 木製品実測図(1) S=1:3



第29図 Ⅲ区出土 木製品実測図(2) S=1:4 (5のみS=1:8)

○ 5

表2 西川津遺跡Ⅲ区出土土器観察表

探査番号	種類	法面(cm)	形態・手法の特徴	出土場所	胎土・色調・焼成	備考	
						口径	底径
07-01	陶生 盤	19.6	外面:ヘラミガキ ナデ 内面:ナデ・ヘラミガキ	青灰色砂礫 良好	2mmの大砂粒を含む 淡青灰色 良好	頭部に段	
07-02	陶生 盤	17.2	内・外面:ナデ?	青灰色砂礫 良好	1~3mmの大砂粒を含む 黄褐色 良好	頭部に3~5条のへら掛け線文、 刻文文	
07-03	陶生 盤		外面:ナデ? 内面:ハケメ	青灰色砂礫 良好	3mmの大砂粒を含む 灰白色 良好	木蓋文? ハラ掛け線文、刻文文	
07-04	陶生 盤		内・外面:ナデ	青灰色砂礫 良好	3mmの大砂粒を含む 黄褐色 良好	頭部による羽伏文、ヘラ掛け線文	
07-05	陶生 盤		外面:ナデ・ハケメ 内面:ナデ	青灰色砂礫 良好	2~3mmの大砂粒を含む 外面:淡灰褐色 内面:灰褐色 良好	頭部による羽伏文、ヘラ掛け線文	
07-06	陶生 盤		内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫 良好	2~3mmの大砂粒を含む 外面:淡青色 灰褐色 良好	口縁部:クシカ真剣による刻目文	
07-07	陶生 盤	16.0	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	青灰色砂礫 良好	5mm以下の砂粒を多く含む 淡褐色 良好	口縁部:クシカ真剣による刻目文	
07-08	陶生 盤	20.8	外面:雨刷り状、ハケメ 内面:ナデ・ヘラミガキ・ハケメ	青灰色砂礫 良好	1~3mmの大砂粒を含む 外面:淡茶色 内面:灰褐色 良好	頭部:木蓋文? ハラ掛け線文	
07-09	陶生 盤	40.8	外面:ハケメ 内面:ヨコナデ	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡褐色 灰褐色 良好	頭部:木蓋文? ハラ掛け線文	
07-10	陶生 盤	16.0	内・外面:ナデ? (風化した)	青灰色砂礫 良好	3~5mmの大砂粒を含む 灰白色 良好	頭部:最低3本のヘラ掛け線文	
07-11	陶生 盤	20.8	内・外面:ナデ・ハケメ	青灰色砂礫 良好	3mm以上の砂粒を多く含む 外面:淡褐色 外面:淡灰褐色~暗褐色 良好	頭部:ヘラによく65条の沈線文	
07-12	陶生 盤	15.8	外面:ナデ・ハケメ 指紋压痕 内面:風化したため不明	青灰色砂礫 良好	2~4mmの大砂粒を多く含む 外面:暗褐色 灰褐色 良好	頭部:5条のヘラ掛け線文	
07-13	陶生 盤	15.4	内・外面:ナデ?	青灰色砂礫 良好	3mmの大砂粒を含む 淡茶褐色 良好	頭部:ヘラ掛け線文	
07-14	陶生 盤	17.0	内・外面:ナデ	青灰色砂礫 良好	1~3mmの大砂粒を多く含む 外面:灰褐色 灰褐色 良好	頭部:5条のヘラ掛け線文	
07-15	陶生 盤	35.0	内・外面:風化したため不明	青灰色砂礫 良好	2~4mmの大砂粒を多く含む 外面:淡褐色 灰褐色 良好	頭部:6条のヘラ掛け線文	
07-16	陶生 盤	35.4	内・外面:ナデ	青灰色砂礫 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	頭部:3条の平行沈線文	
08-01	陶生 盤	7.5	外面:風化したため不明 内面:ナデ (指紋压痕)	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を含む 淡褐色 良好	頭部:4条のシザス彫文、 3条シザス彫文	
08-02	陶生 盤	26.8	内・外面:ナデ	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡褐色 灰褐色 良好	頭部:3条平行沈線文、 刻文文	
08-03	陶生 盤		風化したため不明	青灰色砂礫 良好	2~3mmの大砂粒を含む 淡褐色 良好	口縁部:木蓋文	
08-04	陶生 盤	13.8	内・外面:ナデ?	青灰色砂礫 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	刻目文、クシカ真剣による平行沈線文	
08-05	陶生 盤	19.8	外面:ナデ・ハケメ 内面:風化したため不明	青灰色砂礫 良好	2~3mmの白・砂粒を含む 外面:淡褐色 内面:灰褐色 良好	口縁部:刻文文 頭部:4条以上 のクシカ真剣による平行沈線文	
08-06	陶生 盤	23.2	内・外面:ナデ?	青灰色砂礫 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	頭部:5条平行沈線文	
08-07	陶生 盤	20.6	内・外面:ナデ?	青灰色砂礫 良好	1~2mm以下の砂粒を多く含む 淡褐色 良好	口縁部:木蓋文	
08-08	陶生 盤	14.6	内・外面:ヨコナデ・ハケメ	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 淡褐色 良好	口縁部:3条平行沈線文	
08-09	陶生 盤	21.0	内・外面:風化したため不明	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡 青色~淡褐色 内面:灰褐色 良好	頭部:クシカ真剣による平行沈線文 頭部:指紋压痕	
08-10	陶生 盤	20.8	内・外面:風化したため不明	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:灰褐色 内面:淡褐色 良好	口縁部:刻目文 頭部:4条以上 のクシカ真剣による平行沈線文	
08-11	陶生 盤	29.4	内・外面:風化したため不明	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:灰褐色 良好	口縁部:刻目文	
08-12	陶生 盤	17.0	内・外面:ナデ?	青灰色砂礫 良好	2~3mmの大砂粒を多く含む 灰褐色 良好	外縁部:平行沈線文(2段)、 裏側:4段の平行沈線文	
08-13	陶生 盤	4.2	外面:ハケメ 腹部ナデ 内面:ナデ	青灰色砂礫 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	口縁部:クシカ真剣による平行沈線文 頭部:指紋压痕	
08-14	陶生 盤	11.0	外面:ナデ 内面:ハケメ	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を含む 淡褐色 良好	口縁部:刻目文	
08-15	陶生 盤	4.5	外面:ナデ 内面:底部指紋压痕、ハケメ	青灰色砂礫 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 黒褐色 良好	頭部:指紋压痕	
08-16	陶生 盤	5.3	外面:ナデ 内面:指紋压痕 (指紋)	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 外縁部:指紋压痕 良好	口縁部:木蓋文	
08-17	陶生 盤	7.4	外面:風化したため不明 内面:ナデ (指紋压痕)	青灰色砂礫 良好	2~3mmの大砂粒を多く含む 外面:淡 褐色 内面:淡褐色 良好	外縁部:指紋压痕 良好	
08-18	陶生 盤	4.8	外面:ヘラミガキ 腹部ナデ 内面:ナデ	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 外縁部:指紋压痕 良好	口縁部:指紋压痕	
08-19	陶生 盤	4.8	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	青灰色砂礫 良好	1~2mmの大砂粒を含む 外面:灰褐色 良好	外縁部:指紋压痕	
09-01	陶生 盤	27.8	外面:ヨコナデ・ナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	青灰色砂礫 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 外面:灰褐色 良好	3条平行沈線文、内円スタンプ文、 6条の凹線文、ヘラ掛け線文	
09-02	陶生 盤		外面:ナデ? 内面:風化したため不明	青灰色砂礫 良好	3mm以下の砂粒を含む 灰褐色 良好	クシカ真剣による平行沈線文、 連続刻目文	
09-03	陶生 盤	15.1	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ	青灰色砂礫 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡褐色 黑褐色~暗褐色 内面:淡褐色 黑褐色 良好	口縁部:3条平行沈線文	
09-04	陶生 盤	19.6	外面:雨刷り文 頭部風化したため不明 内面:頭部ヨコナデ 頭部ヘラケズリ	青灰色砂礫 良好	1mmの大砂粒を含む 淡褐色 良好	口縁部:3条平行沈線文	
09-05	陶生 盤	35.4	外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ? ヘラケズリ	青灰色砂礫 良好	1mmの大砂粒を含む 外面:灰褐色 内面:淡褐色 黑褐色 良好	口縁部:清い沈線文2本	
09-06	陶生 盤	18.6	外面:ヨコナデ? 口縫風化したため不明 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ	青灰色砂礫 良好	1mmの大砂粒を含む 淡茶褐色 良好		
09-07	陶生 盤	14.8	外面:ナデ 内面:ヨコナデ? ナデ? ヘラケズリ	青灰色砂礫 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡褐色 黑褐色~暗褐色 内面:淡褐色 黑褐色 良好	口縁部:7条平行沈線文	
09-08	陶生 盤	24.5	外面:頭部ハケメ 他不明 内面:頭部ヘラケズリ 他不明	青灰色砂礫 良好	2mm以下の砂粒を含む 外面:淡褐色 内面:灰褐色 黑褐色 良好		
09-09	陶生 盤	16.0	風化したため頭部が不明	青灰色砂礫 良好	1~2mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡灰褐色~暗褐色 良好		
09-10	陶生 盤	25.0	外面:ヨコナデ? 内面:口縫風化した 外面:ヨコナデ? 頭部ナデ? 腹部ナデ? ヘラケズリ	青灰色砂礫 良好	1mm以下の砂粒を含む 外面:淡灰褐色 内面:灰褐色 良好	口縁部:清い平行沈線文	

件番号	種類 器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	出土場所	胎土・色調・焼成	備考
		口径	底径	高さ				
09-11	弥生 灰陶	8.4			内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を多く含む 淡灰茶色 良好	
09-12	弥生? 低脚 灰	10.8			外面:ヨコナデ 内面:ナデ?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡 桃白色 内面:淡灰白色 良好	内面:口縁付近に一部すり付
09-13	弥生 灰陶 灰	20.4			外面:ヨコナデ 内面:風化のため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 外面:灰 茶色 内面:淡灰褐色 良好	脚部:3条の沈織
09-14	弥生 灰陶 灰	6.0			内・外面:ナデ	青灰色砂礫	1~2mmの砂粒を多く含む 外面:灰 茶色 内面:淡灰褐色 良好	蓋のみニチュア
09-15	弥生 灰陶 灰	4.2	2.8	7.1	外面:ナデ(強調仕様) 内面:ナデ?	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 黄褐色 良好	蓋のみニチュア
09-16	弥生 灰陶 灰	4.8			外面:ナデ 内面:ナデ 強調仕様	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 灰白色 良好	蓋のみニチュア
10-01	土師 陶	9.8			黒化のため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 青灰褐色 良好	
10-02	土師 陶?	9.2			外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ ハラケズリ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 青灰褐色 良好	
10-03	土師 陶?				外面:ナデ ハラケ 内面:ナデ ハラケズリ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を少し含む 黑褐色 良好	
10-04	土師 陶?	8.4	14.5		外面:ヨコナデ ハラケ 内面:ヨコナデ ハラケズリ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色 良好	
10-05	土師 陶?	17.2			外面:ナデ ハラケズリ 内面:ナデ ハラケズリ(後ハラケガキ)	青灰色砂礫	微砂粒を含む 茶白色 良好	
10-06	土師 陶?	17.0			外面:ヨコナデ ナメ 内面:ヨコナデ ハラケズリ(後ハラケナデ)	青灰色砂礫	1mm以上の砂粒を含む 外面:淡黄赤 褐色 内面:淡茶白色 良好	脚部に直径1cm穴あり
10-07	土師 陶?				外面:ナデ ハラケ 内面:ナデ ハラケ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を少し含む 青灰褐色 良好	
10-08	土師 陶?	20.2			内・外面:ハラミガキ(タテ方向)	青灰色砂礫	微砂粒を多く含む 茶白色 良好	
10-09	土師 陶?	15.8			内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 青灰褐色 良好	
10-10	土師 陶?	26.8			外面:ヨコナデ ハラケ 内面:ヨコナデ ハラケズリ	青灰色砂礫	1mm以上の砂粒を含む 青灰褐色 良好	
11-01	須恵 灰陶 灰	12.0	5.7		外面:ヨコナデ 底部凹切 内面:ナデ ハラケズリ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 青灰色 良好	
11-02	須恵 灰陶 灰	14.8			内・外面:圓転ナデ	青灰色砂礫	微砂粒を僅かに含む 暗青灰色 良好	
11-03	須恵 灰陶 灰	12.0			内・外面:圓転ナデ	青灰色砂礫	密 灰色 良好	
11-04	須恵 灰陶 灰	12.2	7.0	3.9	外面:圓転ナデ 底部凹切 内面:圓転ナデ ナメ	青灰色砂礫	密 灰→暗灰色 良好	
11-05	須恵 灰陶 灰	15.6			内・外面:圓転ナデ	青灰色砂礫	密 灰色 良好	
11-06	須恵 灰陶 灰	12.2			内・外面:圓転ナデ	青灰色砂礫	密 暗青灰色 良好	
11-07	須恵 灰陶 灰	7.8	5.4	1.3	外面:ナデ 底部跡止系切?	青灰色砂礫	微砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
11-08	須恵 灰陶 灰	4.6			外面:ナデ 底部跡止系切?	青灰色砂礫	1~2mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色 良好	
11-09	須恵 灰陶 灰	22.0			内・外面:ナデ?	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 淡褐色 不規	東播系
11-10	須恵 灰陶 灰				内・外面:圓転ナデ	青灰色砂礫	微砂粒を含む 暗青灰色 良好	東播系
11-11	須恵 灰陶 灰	18.6			内・外面:ナデ	青灰色砂礫	密 灰色 良好	
11-12	瓦器?	12.8			外面:一定方向のケズリ棒ナデ	青灰色砂礫	密 灰色 良好	
12-01	土師 灰陶 灰	13.2	5.4		内面:圓転ナデ 底部凹切?	青灰色砂礫	2mm以上の砂粒を僅かに含む 灰茶色 良好	
12-02	土師 灰陶 灰	15.2			内面:圓転ナデ 底部条切?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色 良好	
12-03	土師 陶?	14.8			黒化のため不明	青灰色砂礫	密 淡褐色 良好	
12-04	土師 陶?	11.0	4.8		外面:圓転ナデ 底部凹切? 内面:圓転ナデ	青灰色砂礫	微砂粒を含む 外面:明茶色 内面:淡褐色 良好	
12-05	土師 陶?	11.6	5.6		外面:圓転ナデ 内面:圓転ナデ 底部凹切?	青灰色砂礫	密 外面:茶色 内面:淡茶褐色 良好	
12-06	土師 陶?	10.8	4.8		外面:圓転ナデ 内面:圓転ナデ	青灰色砂礫	仰絞を含まない 外面:淡灰黄色 内面:淡褐色 良好	
12-07	土師 陶?	8.8	4.2		内・外面:圓転ナデ 進退風化のため不明	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 茶褐色 良好	
12-08	土師 陶?	10.6	6.2	2.1	外面:圓転ナデ 底部条切?	青灰色砂礫	微砂粒を僅かに含む 暗青褐色 良好	
12-09	土師 陶?	8.5	5.4		外面:圓転ナデ 底部凹切? 底部圓転条切?	青灰色砂礫	3~4mmの砂粒を含む 暗褐色 良好	
12-10	須恵 灰陶 灰	7.2	6.4	1.5	内面・外面:圓転ナデ 底部凹切?	青灰色砂礫	微砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
12-11	土師 陶?	8.2	5.2	2.0	内・外面:圓転ナデ 底部へら切り?	青灰色砂礫	砂粒を含まない 淡茶褐色 良好	
12-12	土師 陶?	7.0	4.6	1.3	内・外面:ナデ 底部凹切?	青灰色砂礫	密 淡茶褐色 良好	
12-13	土師 陶?	7.6	6.0	1.8	外面:圓転ナデ 底部底板条切?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:淡褐色 内面:淡褐色~淡灰褐色 良好	
12-14	土師 陶?				内・外面:圓転部へらぎ?	青灰色砂礫	密 淡茶褐色 良好	
12-15	土師 陶?	6.6			外面:圓転ナデ 内面:圓転ナデ 底部条切?	青灰色砂礫	微砂粒を含む 淡灰褐色 良好	脚部をもつ
12-16	土師 灰陶 灰	7.0			外面:圓転ナデ 底部条切?	青灰色砂礫	密 黑褐色 良好	
12-17	土師 陶?	5.4			外面:圓転ナデ 底部条切?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含み 茶白色 良好	柱状窓台付坪
12-18	土師 陶?	13.2			内・外面:ナデ ハラケ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 黑褐色 良好	

伴存号	種類	法量(cm)		形態・手法の特徴	出土場所	胎・土・色調・焼成	備考
		器種	口径				
12-19	土師 鍋	25.2		外観:ナデ、ハケメ 内面:ハケメ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 墨褐色 良好	
12-20	土師 鍋	30.8		外観:ナデ(指揮圧痕)、ハケメ 内面:ハケメ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 墨褐色 内面:淡灰褐色 良好	
13-01	陶生 盤			外観:不明 内面:ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 灰黄色 良好	貝殻腹縁による羽状文、 2次の刻目直済
13-02	陶生 盤			内・外面:ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 墨褐色 良好	貝殻腹縁による羽状文、沈線文
13-03	陶生 盤			外観:ナデ、ハケメ 内面:ナデ?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を多く含む 黄褐色 良好	ヘラ削り格子文、指揮圧痕浮文
13-04	陶生 盤	13.6		内・外面:ナデ?	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	頭部:前出突等
13-05	陶生 盤	16.4		外観:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ?	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を少し含む 淡灰褐色 良好	羽状文(クシ状工具)平行沈線文
13-06	陶生 盤			内・外面:ナデ	青灰色砂礫	4mm以下の砂粒を含み密 淡灰褐色 良好	
13-07	陶生 盤	16.2		外観:ナデ、ハケメ 頭部指揮圧痕	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 墨褐色 良好	
13-08	陶生 盤	17.0		外観:ナデ? 指揮圧痕 壁 内面:風化したため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色 良好	
13-09	陶生 盤			内・外面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 灰茶色 良好	5条平行沈線文
13-10	陶生 盤	25.8		外観:ヨコナデ、ハケメ 内面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を少し含む 淡白褐色 良好	刻目文、ヘラ削り格子文
13-11	陶生 盤	35.0		外観:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ハケメ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色 良好	刻目文、ヘラ削り平行沈線文、 円形スタンプ文
13-12	陶生 盤	26.8		外観:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:淡灰褐色 内面:灰褐色 良好	口縁部:胸部:刺突文
14-01	陶生 盤	6.5		内・外面:ナデ	青灰色砂礫	5mm以下の砂粒を含む 淡褐色 良好	
14-02	陶生 盤	17.5		外観:風化のため不明 内面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 淡乳褐色 良好	斜格子文(3条単位)円形浮文痕、 刻目直済
14-03	陶生 盤	19.0		風化のため不明	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色 良好	-
14-04	陶生 盤	15.8		外観:ヨコナデ 内面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色 良好	
14-05	陶生 盤	11.6		内・外面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
14-06	陶生 盤	18.4		外観:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ?	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 灰茶色 良好	口縁部:平行沈線文2条以上
14-07	陶生 盤?	7.0		風化のため不明	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	6条以上の沈線
14-08	陶生 盤	7.4		外観:ハケメ 底部ナデ 内面:ナデ?	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を少し含む 淡灰褐色 内面:淡灰褐色 良好	
14-09	陶生 盤	7.6		外観:ナデ? 内面:ナデ	青灰色砂礫	2~3mmの砂粒を含む 外面:淡灰褐色 内面:淡褐色 良好	
14-10	陶生 盤	6.6		内・外面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 淡褐色 良好	
14-11	陶生 盤	5.7		外観:底部ナデ、他不明 内面:風化のため不明	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
14-12	陶生 盤	3.6		外観:風化のため不明 内面:ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を僅かに含む 淡褐色 良好	
14-13	盤?	4.8	1.8	4.0 内・外面:ナデ(一部指揮圧痕)	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	ミニチュア器
14-14	土師 瓶	20.6		外観:ナデ 内面:ヨコナデ、ハケメ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の白色砂粒を含む 淡褐色 内面:淡褐色 良好	
14-15	土師 瓶	17.2		外観:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ?	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色	
14-16	土師 瓶?	14.0		外観:ヨコナデ 内面:ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色	
14-17	土師 瓶?	10.4		外観:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:灰褐色 内面:灰褐色 良好	頭部
14-18	土師 瓶?	9.8		内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 灰褐色 良好	
14-19	土師 瓶?	10.6		内・外面:ハケメ、ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	
15-01	須恵 盤?	12.4		内・外面:凹輪ナデ	青灰色砂礫	微砂粒を含む 灰褐色 良好	
15-02	須恵 盤?	15.6	8.4	6.5 外面:凹輪ナデ 底部回転系切り 内面:凹輪ナデ	青灰色砂礫	微砂粒を含む 外面:磁褐色 内面:淡褐色 良好	
15-03	須恵 盤?	16.8	11.8	7.0 内・外面:凹輪ナデ 底部回転系切り(風化)	青灰色砂礫	微砂粒を含む 外面:淡褐色 内面:淡褐色 良好	
15-04	土器 裏?	23.4		外観:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ+ナデ、ヘラケズリ?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰褐色 良好	
15-05	土器 裏?	13.4		外観:回転ナデ 内面:四角ナデ?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含み密 淡灰褐色 良好	
15-06	土器 裏?	12.0		内・外面:回転ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 淡灰褐色 良好	
15-07	土器 裏?	12.6		内・外面:回転ナデ	青灰色砂礫	空 淡明褐色 良好	
15-08	土器 裏?	11.0		内・外面:回転ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰褐色 良好	
15-09	土器 裏?	8.7	4.1	2.3 内・外面:ナデ 底部ヘラ切り?	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 灰褐色 良好	
15-10	土器 裏?	8.2		内・外面:回転ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含み密 外面:淡灰褐色 内面:淡褐色 良好	
15-11	土器 裏?	7.5	5.9	1.4 外面:回転ナデ 底部ヘラ切り?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色	
15-12	土器 裏?	7.1	4.7	1.0 外面:風化のため不明 内面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 外面:淡褐色 内面:淡褐色 良好	
15-13	土器 裏?			内面:ヨコナデ 底部系切り? 内面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含み密 淡灰褐色 良好	足高台?
16-01	陶生 盤			外面:ヨコナデ、ハケメ(指揮圧痕) 内面:ヨコナデ、ハケメ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 灰白色	

種別 神田番号	種類 口径 底径 高さ	法量(cm) 外側 内側	形態・手法の特徴	出土場所	鉛土・色調・焼成		備考
					鉛土	色調	
16-02 弥生 土器	12.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ(ヘラケズリ)	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色	良好	
16-03 弥生 土器	12.6	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ(ヘラケズリ)	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色	良好	口縁部:2条平行沈線文
16-04 弥生 土器	11.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰白色 良好	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰白色	良好	
16-05 弥生 土器	6.7	外面:ハラミガキ 内面:ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 灰白色	良好	
17-01 弥生 土器	18.0	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色 良好	2mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色	良好	
17-02 弥生 土器	28.8	外面:ヨコナデ 内面:ハラミガキ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 良好	3mm以下の砂粒を含む 乳褐色	良好	顎部に段
17-03 弥生 土器	22.2	外面:ナデ ハケメ 内面:ナデ ハケメ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:紫褐色 良好	3mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:紫褐色 良好	良好	
17-04 弥生 土器	16.4	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	4mm以下の砂粒を含む 外面:風化のため不明 内面:茶褐色 良好	4mm以下の砂粒を含む 外面:風化のため不明 内面:茶褐色 良好	良好	外面上に風化あり
17-05 弥生 土器	18.0	外面:ヨコナデ ナデ? 内面:ヨコナデ(ナデ)- (一部)指擦痕直裏)	青灰色砂礫	5mm以下の砂粒を多く含む 良好	5mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
17-06 弥生 土器	25.0	外面:ヨコナデ 内面:ナデ?	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 良好	3mm以下の砂粒を含む 良好	良好	
17-07 弥生 土器	12.4	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
17-08 弥生 土器	14.8	外面:ナデ? 風化のため不明(ハケメ)? 内面:ナデ ハケメ?	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
17-09 弥生 土器	15.0	外面:ナデ 内面:不明のため不明	青灰色砂礫	5mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	5mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	良好	2系のハラ指擦沈 竹管状工具による剥突
17-10 弥生 土器	20.4	外面:ヨコナデ 指擦痕直裏 他不明 内面:ヨコナデ指擦直裏 他不明	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
17-11 弥生 土器	23.0	外面:ナデ ハケメ 内面:ナデ	青灰色砂礫	5mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	5mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	良好	外面上に6状ハラ指擦沈線文
17-12 弥生 土器	19.4	内・外面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	口縁部:4条平行沈線文
17-13 弥生 土器	25.5	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	5mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	5mm以下の砂粒を含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	良好	外面上に3系ハラ指擦沈線文
17-14 弥生 土器	30.0	外面:ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ?	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	刻目文 7条ハラ指擦平行沈線文
17-15 弥生 土器	36.8	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	4条ハラ指擦沈線文
18-01 弥生 土器	37.6	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:風化のため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 良好	2mm以下の砂粒を含む 良好	良好	口縁部:4条平行沈線文 削突実
18-02 弥生 土器	19.2	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 良好	2mm以下の砂粒を含む 良好	良好	口縁部:4条平行沈線文 削突実
18-03 弥生 土器	19.4	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	1mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	良好	口縁部:刮削
18-04 弥生 土器	23.4	風化のため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	口縁部:刮削
18-05 弥生 土器	27.2	内・外面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を少し含む 良好	3mm以下の砂粒を少し含む 良好	良好	口縁部:刮削
18-06 弥生 土器	29.8	外面:ナデ 指擦痕直裏(爪) 内面:ナデ?	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含み亞 硫酸塗 良好	2mm以下の砂粒を含み亞 硫酸塗 良好	良好	頭部:指擦痕直裏
18-07 弥生 土器	28.0	風化のため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	2mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	良好	
18-08 弥生 土器	19.0	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ(ナデ)-(一部)ハラミガキ?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	良好	
18-09 弥生 土器	18.2	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を僅かに含む 外面:茶褐色 内面:灰褐色 良好	良好	
18-10 弥生 土器	17.6	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	1mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	良好	
18-11 弥生 土器	15.4	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	口縁部:刮削
18-12 弥生 土器	13.6	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	1mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	良好	口縁部:2条平行沈線文
18-13 弥生 土器	12.4	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を多く含む 良好	1mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	口縁部:平行沈線文
18-14 弥生 土器	15.6	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ、ハラミガキ?	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 良好	1mm以下の砂粒を少し含む 良好	良好	口縁部:平行沈線文
18-15 弥生 土器	15.8	外面:風化のため不明 内面:ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	削突実
18-16 弥生 土器	22.8	内・外面:風化のため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
19-01 弥生 土器	15.4	内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	口縁部:3条平行沈線文
19-02 弥生 土器	13.6	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ(ヘラケズリ)	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	2mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	口縁部:5条平行沈線文
19-03 弥生 土器	26.6	外面:風化のための擦痕不明 内面:ヨコナデヨコナデ 他不明	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	口縁部:5条平行沈線文
19-04 弥生 土器	11.8	内・外面:風化のため不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 良好	2mm以下の砂粒を含む 良好	良好	
19-05 弥生 土器	34.4	外面:風化のため不明 内面:ヨコナデ、ハラミガキ、ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 良好	1mm以下の砂粒を含む 良好	良好	
19-06 弥生 土器	15.4	外面:ヨカケズリ? ナデ?	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 白黄色~	2mm以下の砂粒を含む 白黄色~	良好	
19-07 弥生 土器	9.0	外面:風化のため不明 内面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
19-08 弥生 土器	10.2	内・外面:ナデ?	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
19-09 弥生 土器	7.8	外面:不明 内面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	良好	
19-10 弥生 土器	8.3	外面:ナデ? 内面:ナデ(ハラミガキ?)	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 良好	2mm以下の砂粒を含む 良好	良好	
19-11 弥生 土器	10.3	外面:風化のため不明 内面:ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 良好	2mm以下の砂粒を含む 良好	良好	
19-12 弥生 土器	5.7	外面:ナデ 内面:ハラミガキ、ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 良好	2mm以下の砂粒を含む 良好	良好	

神田番号	埋蔵	法面(cm)	形態・手法の特徴	出土場所	地・土・色・調・焼成	備考
	器種	口径	底径	高さ		
19-13	先牛 底部	7.5	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	4mm以下の砂粒を含む 濃灰褐色 良好	
19-14	先牛 底部	8.0	外面:ナデ? 内面:ヘラミガキ,ナデ	青灰色砂礫	5mm以下の砂粒を含む 外面:透明 褐色 内面:淡灰褐色 良好	
19-15	先牛 底部	6.8	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色 良好	
19-16	先牛 底部	7.8	外面:ハケメ 底部ナデ 内面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以上の砂粒を多く含む 淡灰褐色 良好	
19-17	先牛 底部	9.6	内・外面:ナデ	青灰色砂礫	4mm以上の砂粒を多く含む 暗灰褐色 良好	
19-18	先牛 底部	4.2	内・外面:ナデ,ハケメ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	ミニチュア土器
19-19	先牛 側面部	8.0	内・外面:風化のため不明	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色 良好	
20-01	土師 裏	16.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ナデ,ハケメ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 暗灰褐色 良好	
20-02	土師 裏	25.4	内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 茶白色 良好	
20-03	土師 裏	18.4	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ナデ,ハケメ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色 良好	
20-04	土師 裏	15.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ 鉢底部不明	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	
20-05	土師 裏	16.2	内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
20-06	土師 裏	14.0	内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
20-07	土師 裏外	18.6	外面:ヨコナデ 後ナデ 内面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	
20-08	土師?	16.8	内・外面:ヨコナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 暗褐色 良好	
20-09	土師 高环		外面:ハケメ後ナデ 内面:ナデ(輪状あり)	青灰色砂礫	2mm以上の砂粒を僅かに含む 茶褐色 良好	环部:内面に暗文
20-10	土師 側面部	13.4	外面:ヨコナデ 内面:ナデ,ハケメ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 暗灰褐色 良好	高环の脚、円形容の穿孔あり
21-01	須恵 底部	12.2	外面:圓軸ナデ 底部へラケメ 内面:ハケメ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を僅かに含み茶 褐色 良好	
21-02	須恵 底部	12.8	内・外面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	青 茶色 良好	
21-03	須恵 底部	7.6	内・外面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	微細な砂粒を含む 暗灰褐色 外面:暗灰褐色 良好	环の脚部?
21-04	土師 口縁	20.4	内・外面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	5mm以下の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	頭部:1条の沈様有り
21-05	土師 裏	27.2	外面:ヨコナデ,ナデ 内面:ヨコナデ,ハケメ	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色 良好	
21-06	土師 底	36.6	内・外面:風化のため不明	青灰色砂礫	3mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
21-07	土師 底	13.0	外面:圓軸ナデ(一部擦損直彎) 内面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を含む 黄褐色と灰 色のまだら 良好	
21-08	土師 底	14.2	内・外面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 淡灰褐色 良好	
21-09	土師 底	10.6 5.6 2.6	外面:圓軸ナデ 底部圓軸系切り) 内面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含む 淡灰褐色 良好	
21-10	土師 底	10.6	外面:圓軸ナデ 底部圓軸系切り) 内面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含み茶 褐色 良好	
21-11	土師 底	10.0 6.4 2.2	内・外面:圓軸ナデ,圓軸系切り	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含み茶 褐色 良好	
21-12	土師 底	9.7 6.9 2.0	外面:圓軸ナデ 底部へラケメ? 内面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含み茶 茶褐色 良好	
21-13	土師 底	10.1	内・外面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 茶褐色 良好	
21-14	土師 底	10.8	内・外面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含む 茶褐色 良好	
21-15	土師 底	8.6 3.6 2.4	内・外面:ヨコナデ 底部擦損直彎切り)	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を少し含み茶 褐色 良好	
21-16	土師 底	8.2 5.2 2.0	外面:圓軸ナデ 底部圓軸系切り) 内面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含み茶 褐色 良好	
21-17	土師 底	7.4 4.3 1.7	外面:圓軸ナデ 底部圓軸系切り) 内面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	1mm以下の砂粒を僅かに含み茶 褐色 良好	
21-18	土師 底	5.1	外面:圓軸ナデ 底部圓軸系切り) 内面:圓軸ナデ	青灰色砂礫	2mm以下の砂粒を含む 淡灰褐色 良好	
22-01	須文 底		外面:条痕,ナデ 内面:条痕	青灰色砂礫	3mm以上の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	剥離文
22-02	須文 底		内・外面:ナデ	青灰色砂礫	3mm以上の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	剥離文
22-03	須文 底		外面:条痕 内面:ナデ?	青灰色砂礫	3mm以上の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	剥離文
22-04	須文 底		外面:ナデ? 条痕? 内面:ナデ?	青灰色砂礫	1mm以上の砂粒を含む 暗灰褐色 良好	剥離文
22-05	須文 底		外面:条痕 内面:口縁部ナデ?	青灰色砂礫	2mm以上の砂粒を含み茶 灰色~ 茶褐色 良好	
22-06	須文 底		外面:ナデ,異種条痕 内面:ナデ	青灰色砂礫	1mm以上の砂粒を多く含む 灰~ 褐色 良好	剥離文
22-07	須文 底		外面:ナデ 内面:風化のため不明	ナ-3	2mm以上の砂粒を含む 灰褐色~ 茶褐色 良好	剥離文
23-01	先牛 底	5.4	外面:ナデ? 指擦痕集、ヘラミガキ	ナ-1	1~2mm以下の砂粒を多く含む 外面:淡灰褐色 内面:淡灰褐色 良好	
23-02	先牛 底	30.2	外面:ヨコナデ,内面:ヨコナデ,ナデ	ナ-3	3mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色 良好	頭部:沈線
23-03	先牛 底	24.0	外面:ナデ? 内面:ヨコナデ?	ナ-1	1~2mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色~ 灰色 内面:淡灰褐色 良好	口縁部:2束単位の割格子文
23-04	先牛 底	18.8	外面:ヨコナデ ハケメ 内面:ヨコナデ,ナデ,ヘラミガキ	ナ-3	1mm以下の砂粒を多く含む 暗灰褐色 良好	
23-05	先牛 底	23.2	内・外面:口縁部ヨコナデ 鉢底ハケメ	ナ-1	難粒を含む 茶灰褐色 良好	

辨別番号	種類	法量(cm)			形態・手法の特徴	出土場所	胎土・色調・焼成	備考
		口径	底径	器高				
23-06	碗生 縁	23.8			外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ?	III-1	3mm以下の砂粒を多く含む 黒灰褐色 良好	口縁部:平行沈縫文 側面:指痕仕面欠陥
23-07	碗生 縁	13.0			外面:ヨコナデ	III-3	良好	口縁部:平行沈縫文
23-08	碗生 縁	20.4			外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ?	III-1	1~2mmの砂粒を含む 外面:灰白色~灰黒色 内面:灰白色 良好	口縁部:4条平行沈縫文
23-09	碗生 縁	17.4			外面:ナデ	III-1	1mm以下の砂粒を多く含む 淡灰褐色 良好	口縁部:13条平行沈縫文 外側にすり付道
23-10	碗生 縁	5.4			外面:ナデ 内面:口縁部ヨコナデ 前部ヘラケズリ	III-2	1~2mmの砂粒を含む 外面:泥灰褐色 良好	
23-11	碗生? 縁	13.0			外面:ヨコナデ? (一部ハケメ)	III-3	2mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色 良好	
23-12	碗生 縁	12.4			外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ?	III-3	2mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	
23-13	土瓶? 高足?	16.7			外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ? ハケメ	III-3	1mm以下の砂粒を僅かに含む 淡灰褐色 良好	
23-14	高足 片	12.2			内・外面:圓軸ナデ	III-1	1mm程度の白色砂粒を含み微 漆黒灰色	

表3 西川津遺跡Ⅲ区出土陶磁器観察表

辨別番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	備考
24-01	皿	10.6	2.65	4.6		淡灰褐色	内面に胎土目
24-02	皿			4.4	密		内面に鉄鉢
24-03	皿	9.4	2.6	2.4			龍泉
24-04	水注				密		広東産 瓶?
24-05	皿	9.4	3.0	4.0	密		李朝 高台に胎土目
24-06	高炉	12.2					
24-07	碗	12.4	6.3	4.7	密		美濃天目
24-08	指鉢	15.0					肥前系
24-09	甕	22.0					備前
図版21a	碗						越州窯系の青磁
図版21b	碗						龍泉窯の青磁 蓮弁をもつ
図版21c	碗						
図版21d	碗						肥前系
図版21e	碗						肥前系

表4 西川津遺跡Ⅲ区出土土製品・銭貨観察表

押出番号	種類	法量(cm)			重さ(g)	形態・手法の特徴	出土場所	胎土・色調・焼成	備考
		長さ	最大径	孔の径					
25-01	土錘	8.8	4.4	1.6	136.4	ナデ	III-1	1mm以下の砂粒を少し含む 黒褐色 良好	
25-02	土錘	8.8	4.0	1.7	91.7	ナデ	III-2	1mm以下の砂粒を少し含む 黒褐色 良好	
25-03	土錘	2.9	3.6	0.7	35.5	ナデ	III-1	2mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色 良好	
25-04	土錘	4.0	0.9	0.3	2.2	ナデ	III-1	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰褐色 良好	
25-05	土錘	2.6	0.9	0.4	2.6	ナデ	III-1	1mm以下の砂粒を僅かに含む 黒褐色 良好	
25-06	土錘	3.4	1.1	1.0	2.1	ナデ	III-1	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰褐色 良好	
25-07	劫鍤車?	4.8	4.8	0.5	21.9	ナデ? (風化のため調整不明)	III-2	2mm以下の砂粒を多く含む 淡茶灰色 良好	
25-08	有孔円盤?	—	径3.8	0.2~0.4	14.1	ナデ? (風化のため調整不明)	III-1	2mm以下の砂粒を多く含む 淡灰色 良好	4つの孔をもつ
25-09	銭貨	—	径2.3	—	3.3		III-3		漢(?)元寶 (草書 990年初鉄)
25-10	銭貨	—	径2.4	—	3.7		III-3		唐圓通寶 (草書 959年初鉄)

表5 西川津遺跡Ⅲ区出土石製品観察表

押出番号	種別	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	石材	備考
26-01	石錘	III-3	2.5	2.1		2.4	黒曜石	
26-02	石包丁	III-1	5.5	7.0		18.2		
26-03	石錘	III-3	5.8	11.4		74.7		
26-04	石錘	III-1	6.9	5.4		76.8		
27-01	玉素材	III-1	6.2	11.1	1.6	77.0		菅玉 擦切の溝
27-02	玉素材	III-1	4.6	3.8	0.5	16.0		菅玉 擦切の溝
27-03	玉素材	III-3	5.0	3.3	1.0	15.2		菅玉 擦切の溝
27-04	砥石?	III-1	5.6	8.6		55.5		
27-05	砥石?	III-3	6.2	4.6		107.4		
27-06	不明 石製品	III-1	11.2	7.6	10.6	396.4		祭紀具?

表6 西川津遺跡Ⅲ区木製品観察表

押出番号	種類	法量(cm)			出土場所	備考
		長さ	最大径	厚さ		
28-01	楕	15.2	7.0	7.2	III-1 青灰色粘質土	高台は平面やや精円形
28-02	下歎?	5.9	9.3	1.9	III-3 青灰色砂礫層	
28-03	不明	5.3	5.0	2.4	III-3 青灰色砂礫層	
28-04	下歎?	11.8	8.4	1.9	III-2 青灰色粘質土	
29-01	下歎	20.0	11.3	2.4	III-1 青灰色粘質土	
29-02	*	29.2	8.0		III-1 青灰色砂礫層	
29-03	不明	47.1	2.1	1.6	III-3 青灰色砂礫層	
29-04	*	36.9	11.0		III-3 青灰色砂礫層	
29-05	*	112.0	5.1		III-2 青灰色砂礫層	

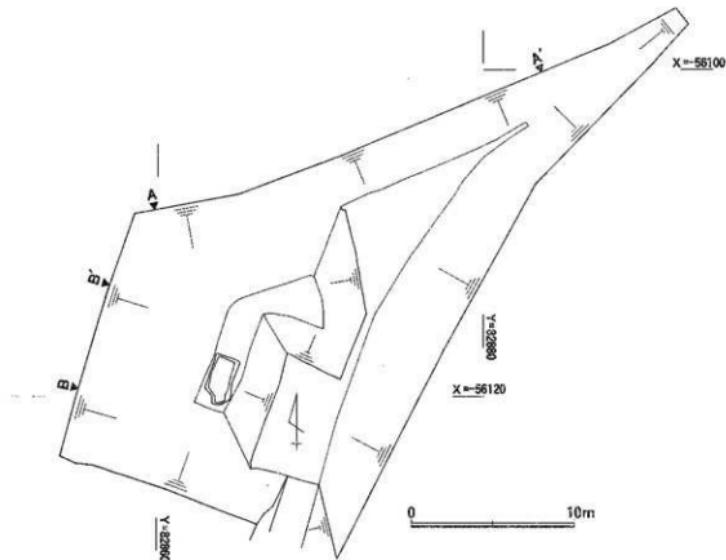
第4章 VI区の調査

第1節 調査の経過と概要

調査経過

西川津遺跡VI区は朝駒川と持田川の合流地点付近に位置し、左岸の河川敷を中心とする部分である。海崎橋付近については1983（昭和58）年に調査が実施され、縄文時代の遺構としては土坑、遺物では、早期末～前期の土器を大量に確認している¹⁾。このときの地形図を見ると、朝駒川は現在より西側を流路とし、今回調査を行ったVI区の位置は水田になっていた。

VI区は、海崎橋付近で行われた前回の調査区よりもさらに約50m上流に所在する。調査区の状況は、大きく水田部分と河川敷部分に分かれ比高差がおよそ2mあったため、水田部分の発掘を先行して土層の確認を行うとともに、比高差を小さくしてから河川敷部分の調査にとりかかった。調査開始時には、遺構や遺物包含層は標高0m付近までに存在しそれ以下は無遺物層と考えていたが、標高0m以下にも遺物包含層が存在することがわかった。無遺物層は適宜重機により除去し、最終的には最深部で標高-2m付近まで掘り下げを行った。水田部分は重機により表土から約1mまで除去し、その下位にある青灰色粘質土から人力で掘り下げを行った。河川敷部分は表土のみ薄く除去し、以下は人力で掘り下げた。



第30図 西川津遺跡VI区 調査区全体図 S = 1:300

調査概要

VII区は、下流で実施された以前の調査で地山が確認され、縄文時代の土壌などが検出されている。今回も遺構の存在が想定されたが、水田部まで含めて調査区全体が朝駒川の旧河道と考えられ、河道内に杭列遺構を検出したほかは遺構は認められなかった。

基本的な層序は、旧水田耕作土を除去すると河川堆積物層が厚く存在し、最下部ではこの付近の基盤層となっている玄武岩が存在する。北壁、西壁それぞれで分層は可能だが、実際の調査ではそれぞれの層位を把握することは困難であった。

主要な遺物包含層は砂礫層1（北壁15層）、砂礫層2（北壁19層・西壁8層）で、ここから弥生時代の土器を中心に遺物が多量に出土した。また、粘質土と細砂の織状堆積（北壁21層・西壁10層）以下では、砂層と混在する疊層から少量ながら縄文土器が出土し、砂礫層1・2よりも古い時代の堆積があったことを示している。このほか土層図には示すことができなかつたが、調査区の南東部に存在する淡青灰色土層から、まとまって土器が出土している。この層は砂礫層1より上層に存在し、土器の時期は全体的に新しいものである。

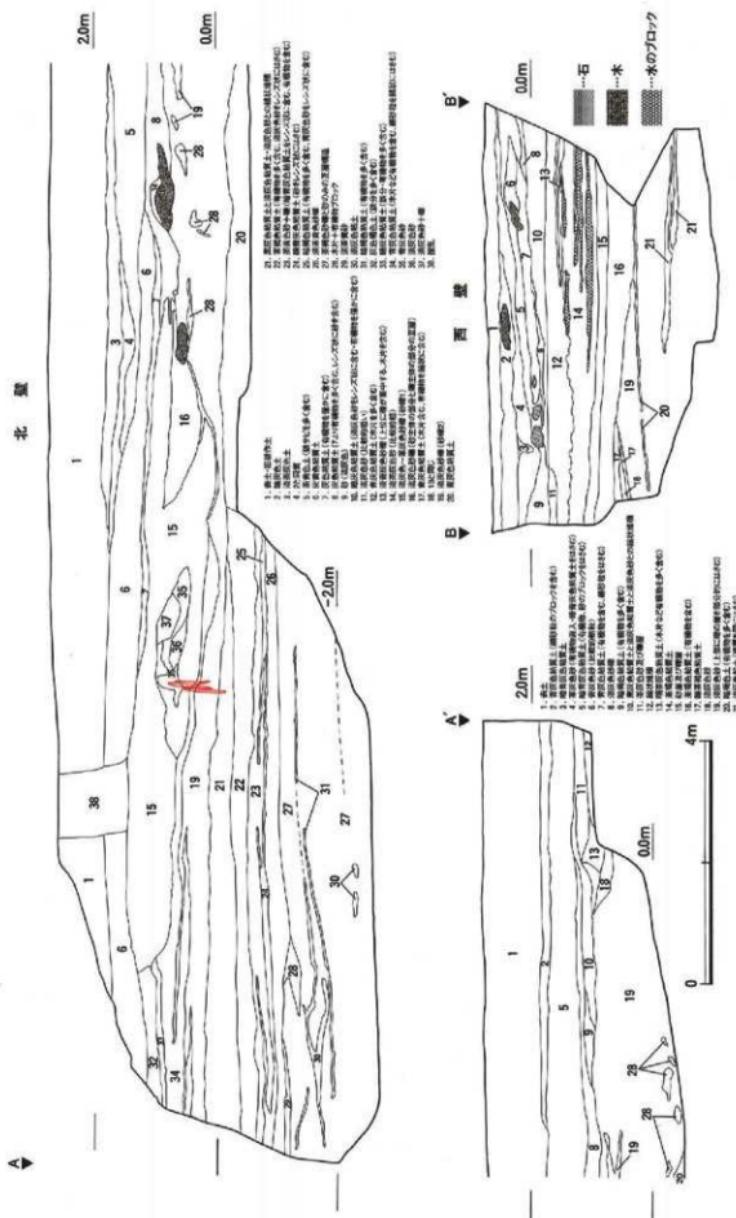
遺物は砂礫層1・2から縄文時代～古墳時代の土器が出土しているほか、磨石などの石製品、分銅形土製品、鏡、杭などの木製品が出土している。

第2節 調査の結果

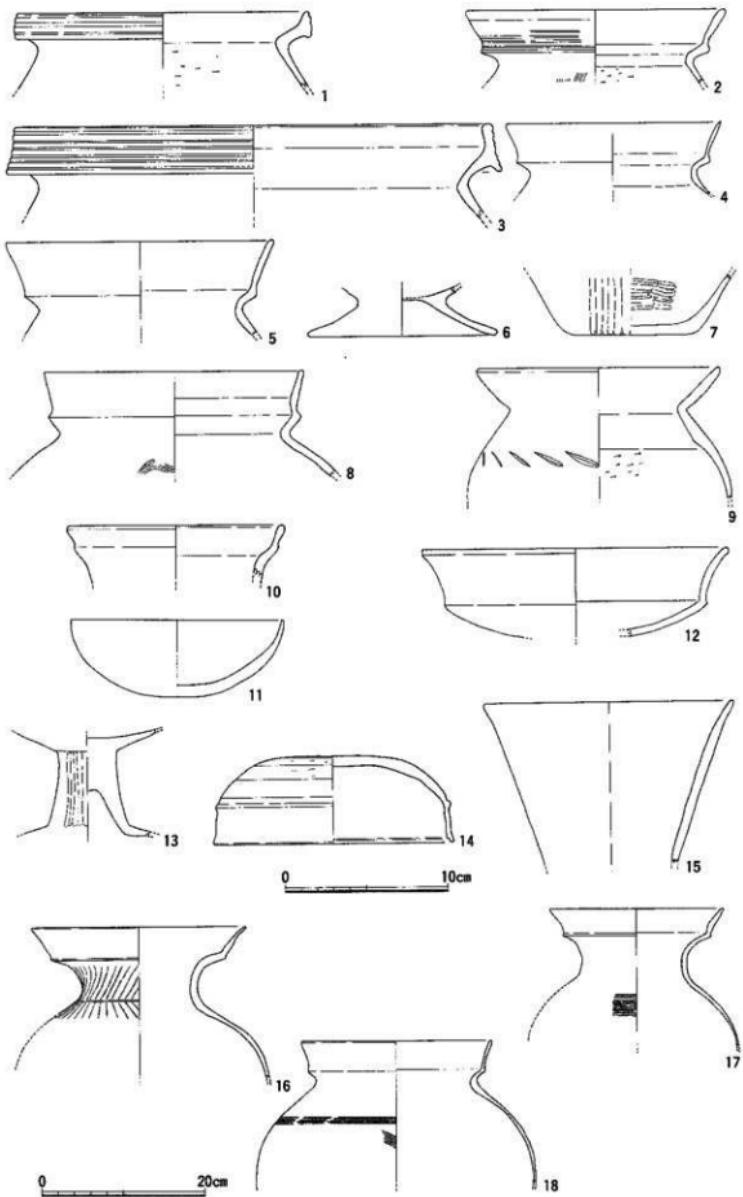
VII区については、それぞれの遺物包含層、遺構を層位的に上位のものから記述する。

淡青灰色土出土遺物（第32図）

淡青灰色土は砂礫層1の上位に位置し、砂礫を含まないことから増水時ではなく、比較的流れが緩やかな時期に堆積した層と考えられる。第32図1～7が弥生土器、8～13・15～18は土師器、14は須恵器である。1～5はいずれも壺で、4をのぞき口縁端部に沈線を施し、2では沈線が細く多条化する。調整は風化のため不明なものもあるが、内面頸部以下はヘラケズリを施したものと考えられる。6は脚部で、器壁は薄く脚端部は丸くおさめる。鉢または高坏の脚部と考えられる。7は底部で、内外面ヘラミガキが認められる。8～10は壺である。8は複合口縁の端部に平坦面をもち、肩部には波状文がかすかに認められる。9は単純口縁で、肩部にはヘラ状工具による刺突文を施す。内面のヘラケズリは、頸部よりやや下位から施される。10は複合口縁が形骸化したもので、頸部が長く壺とも考えられる。11は壺で、器壁は表面が剥離している。丸底で、口縁部先端では器壁が薄くなる。12は高坏で、外面壺底部に段をもち、口縁部が外反する。古墳時代のものと考えたが、弥生時代終末まで遡る可能性がある。13は高坏の脚で、途中から屈曲して端部にいたる。脚外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施した後ナデている。14は壺蓋で外面に突帯をもち、口縁部内面は段をもつ。15は口径約15cmをはかる口縁である。風化のため調整など詳細は不明であるが、直口壺の口縁の可能性がある。16～17は壺、18は壺でいずれも大形のものである。風化が進んでいるが、16の頸部にはヘラ描きの沈線を組み合わせた有軸羽状文、18の肩部にはクシ描きの平行沈線と波状文が認められる。遺物の時期は、1・3が出雲V-1～2様式²、2が同V-3様式、4～6が同V-4様式、8～12・15～18は松山編年のⅡ～Ⅲ期³、11・13が同Ⅲ～Ⅳ期、14が古墳時代後期で大谷編年の出雲2～3期⁴である。



第31図 西川津遺跡VI区 土層図 S=1:80



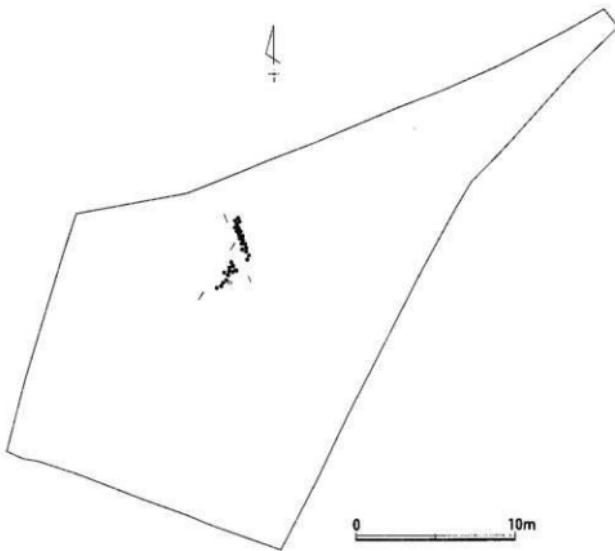
第32図 VI区 淡青灰色土出土土器実測図 $S = 1:3$ 16~18 $S = 1:6$

杭列状遺構（第32・33図）

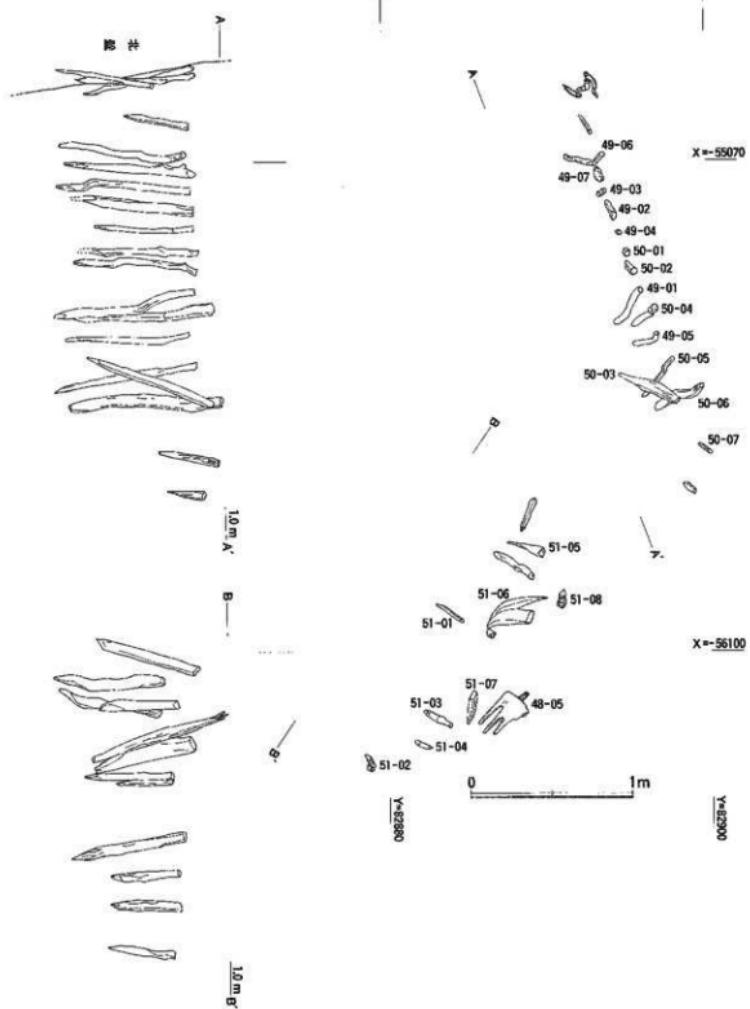
VI区の中央付近に存在する旧河道で検出された杭列である。この河道は、この調査区の主要な遺物包含層である砂疊層1に覆われていた。杭上面の高さは標高約1mである。検出時にはこの杭列に自然木が引っかかるように残っていたが、加工の痕跡はなかったため、後の自然堆積にかかるものと考えて除去した。

杭は大きく2群に分けられると考えられ、河道に平行するように約20本、直交するように約10本の杭が打ち込まれている。杭の長さは0.4m～1.0mと様々であるが、河道に平行な一群が直交するものにくらべ長い傾向が認められる。杭は土層図（第31図）から考えると、青灰色粘質土（北壁第34層）に打ち込まれたものと見られる。

杭列の時期は、後述する砂疊層1の遺物から考えて、古墳時代前期を下ることはないものと考えられる。なお、河道に直交する杭列に近接して弥生時代の鏃が1点出土しており、この杭列の時期を示す可能性もある。



第33図 VI区 杭・木製品出土位置図 S=1:300



第34図 VI区 杭・木製品出土状況実測図 S=1:30

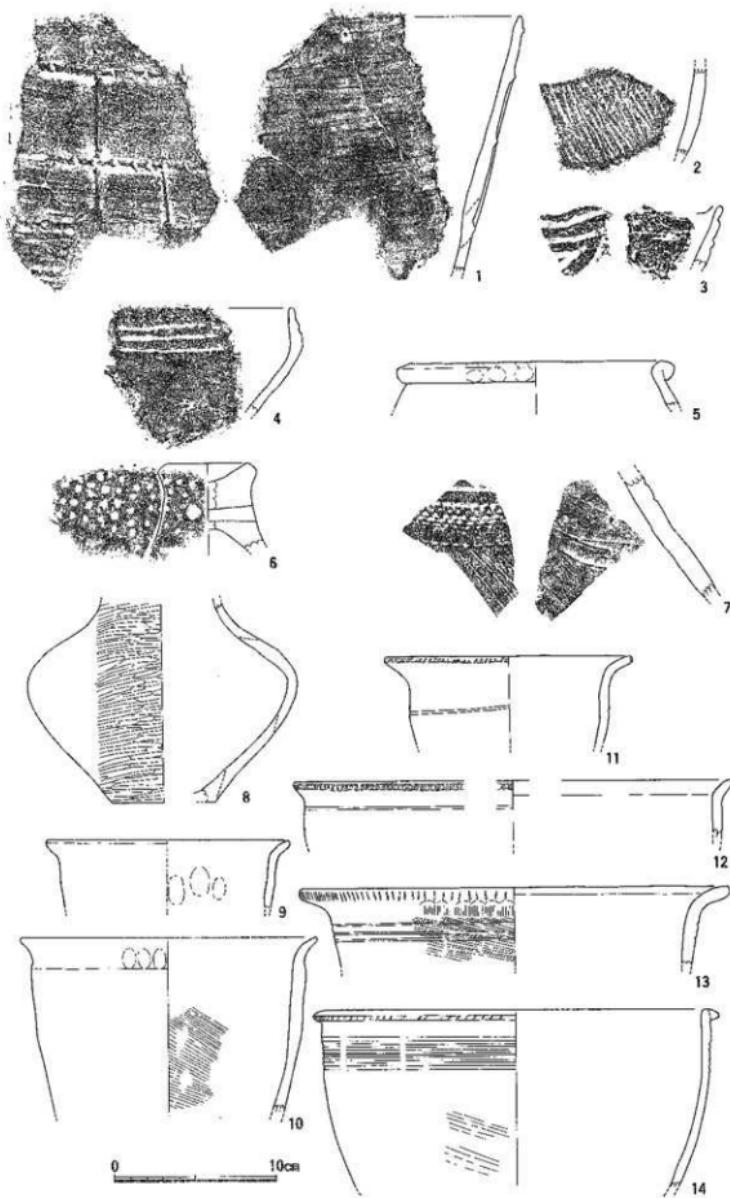
砂砾層1出土遺物（第34～40図）

砂砾層1からは、縄文時代～古墳時代前期までの遺物が出土しているが、その大多数は土器である。第35図は1～4が縄文土器、5・7～14が弥生土器である。1は深鉢で、胴部から口縁部へ直線的にのびるものである。外面には横方向と縱方向の隆帯をもち、横方向の隆帯には刻目が施される。内外面とも条痕調整である。2も深鉢で外面に縄文をもつものである。3は波状となる口縁部で、外面には凹線が認められる。4は浅鉢で、風化しているが外面の凹線は巻き貝によるものと考えられる。5は朝鮮系無文土器の可能性がある。口縁部を外面に折り曲げて肥厚させるもので、指頭圧痕が認められる。6は時期・器種とも不明の土器である。蓋または台状を呈し、外面には多数の刺突文をもつほか、中央付近には径1cmの円孔が貫通する。7は壺の肩部付近で、外面には列点文、ヘラ描き文が施される。8は壺の胴部で、外面全体がヘラミガキで調整される。9～14は甕である。9は無文で外面に指頭圧痕が残る。10も無文であるが、頸部付近で器壁が薄くなりアクセントがつく。頸部には指頭圧痕、内面にはハケメが残る。11は頸部やや下に沈線をもつもので、口縁端部に刻日文が施される。12は正確な口径が不明であるが大形のもので、頸部に1本の沈線をもち、口縁部にはヘラによる刺突文が施される。13はヘラ描きの沈線が多条化するもので、口縁部には刻目文をもつ。頸部付近には、縱方向と斜め方向のハケメが認められる。14は口縁部が短く外傾するもので端部には刻目文をもつ。頸部の沈線は6本施される。遺物の時期は、1が前期初頭、2が中期、3が後期初頭、4が晚期である³⁾。6は縄文時代のものと考えておきたい。7は出雲II-1様式であろうか。8～12が出雲I-2様式、13が同I-3様式、14が同I-4様式と考えられる。なお、5は弥生時代中期のものと見られる。

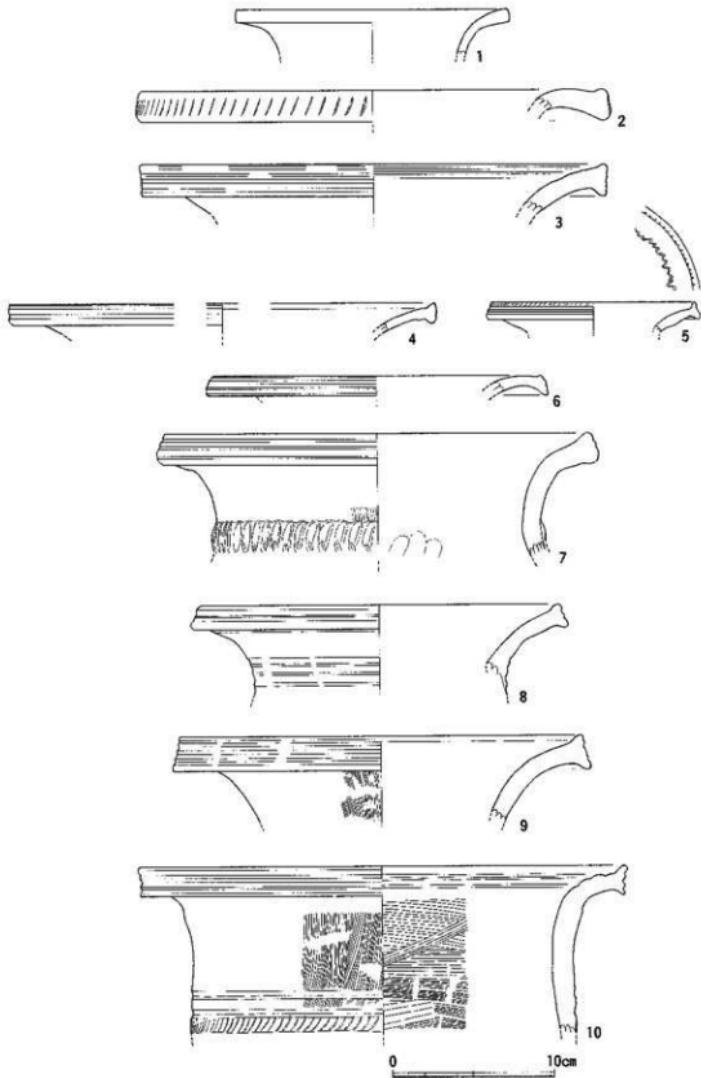
第36図は弥生土器の壺である。1は口縁が大きく聞くもので、端部は全体に肥厚し、面をもつが文様はない。2は端部外面にヘラ描きの刻目文をもつものである。3～6は端部がわずかに上下に拡張し、外面には凹線文をもつものである。4は外面のほか、内面にも5条の凹線をもつものである。5も口縁内面にヘラ描きの波状文をもつ。7は口縁部に凹線を施すが、口縁部の外反が緩やかである。頸部には貼付の指頭圧痕帯をもつ。8も口縁部の外反は緩やかで、頸部は破損しているが、少なくとも4条の凹線文が施されている。9は頸部外面にハケメが認められる。10は頸部が長く、口縁部は短く外反する。口縁部には外面のほか内面にも3条の凹線文をもち、頸部にも2条の凹線文とヘラ描き刺突文が認められる。頸部の内・外面はハケメで調整される。遺物の時期は、1が出雲II-1様式に相当すると考えられる。2は出雲III-1～2様式、3～10は同III-2様式～IV-2様式のいずれかに相当すると考えられるが、口縁部のみの破片が多く、特定は困難である。

第37図は甕である。1は口縁が短く外反し、頸部には8条のクシ描き平行沈線を施す。2は口縁がくの字に屈曲し、端部はわずかに上方へつまみ上げられるように拡張する。3は2と同様の形態をとるもので胴部内・外面はハケメで調整される。4は口縁部がわずかに肥厚し、頸部付近の器壁が胴部よりやや薄くなる。胴部最大径付近にクシ描きの列点文を巡らせ、調整は胴部上半が内・外面ともハケメ、外面胴部下半は縱方向のヘラミガキである。5は大形の甕で、口縁端部に1条の浅い沈線を巡らせる。胴部外面にはハケメが認められる。6は口縁部が肥厚し、わずかに上方に拡張する。口縁端部には刻目文、頸部には指頭圧痕帯、胴部最大径付近にはクシ描きの列点文が2段にわたって施される。調整は胴部上半に内・外面ともハケメが認められる。

遺物の時期は、1が出雲II-1様式、2～6については凹線文が認められないことから、同III-1～2



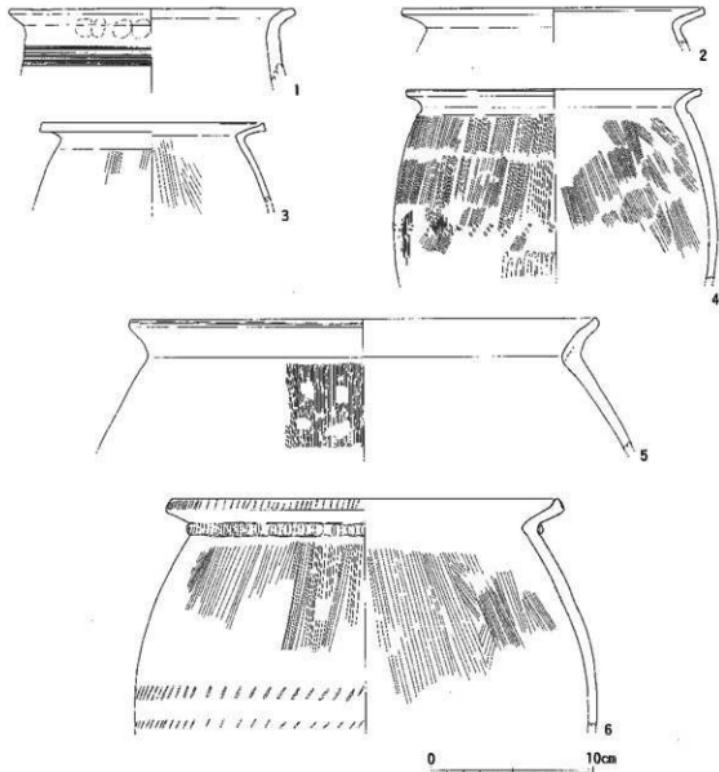
第35図 VI区 沙砾層1出土土器実測図(1) S=1:3



第36図 M区 砂礫層1出土土器実測図(2) S = 1:3

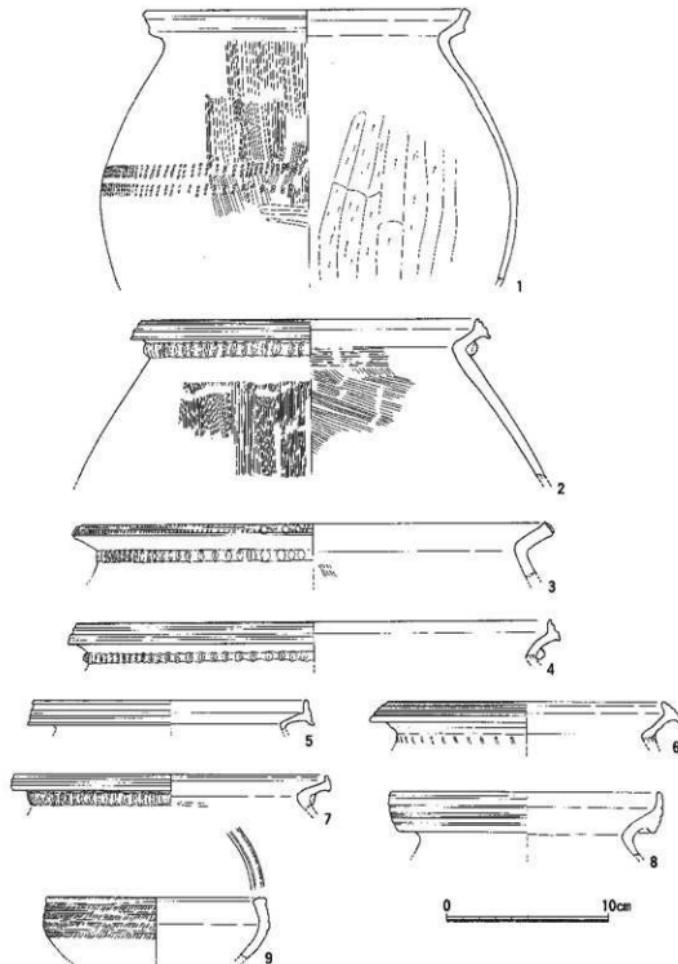
様式に相当すると考えられるが、全体の器形をうかがわせるものがないため、詳細は不明である。

第38図は壺と高坏である。1は口縁が上方に大きく拡張するもので、口縁端部には沈線が施されるほか、頸部最大径付近にはクシ書きの列点文が2段にわたって施される。調整では頸部内面のかなり頸部に近い位置までヘラケズリが施されるのが注目される。2~7は頸部がくの字に屈曲し、肥厚する口縁端部に凹線文が施されるものである。2は頸部に指頭圧痕突帯をもち、ハケメ調整が認められる。3は口縁部付近のみの破片で、口縁部は凹線文のほか刻目文、円形浮文により加飾される。4も指頭圧痕突帯をもつもの、5は口縁部のみの破片で、頸部以下の調整は不明である。6は頸部に粘土紐を貼り付けず、指頭圧痕文のみを施すものである。8は口縁部が上方に大きく拡張し、5条の凹線文を施すものである。調整はヨコナデのみで、ヘラケズリは確認できない。9は高坏で、坏部は内湾して端部の上面には2条の沈線が施されるほか、坏部外面に4条の凹線と刻目文が巡らされる。内面には砂粒の移動痕が残り、ヘラケズリのちナデで調整したものと見られる。



第37図 VI区 砂疊層1出土土器実測図(3) S = 1:3

遺物の時期は、1については、ヘラケズリの範囲がかなり上位にまで及ぶことから時期が下る可能性もあるが、クシ書き列点文の施文位置から出雲IV-2様式と考えておきたい。2~8については出雲IV-1~2様式と考えられる。9については坏部の形態から出雲IV-2様式に特定できると考えられる。

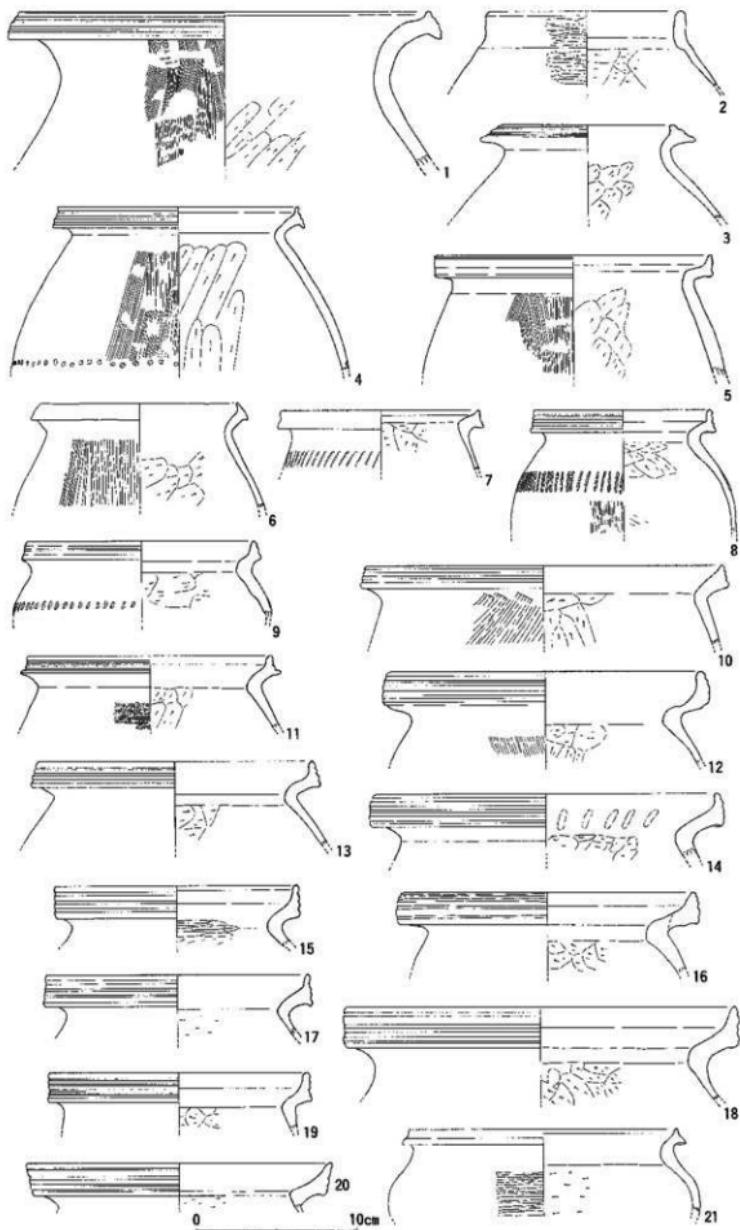


第38図 M区 砂礫層1出土土器実測図(4) S=1:3

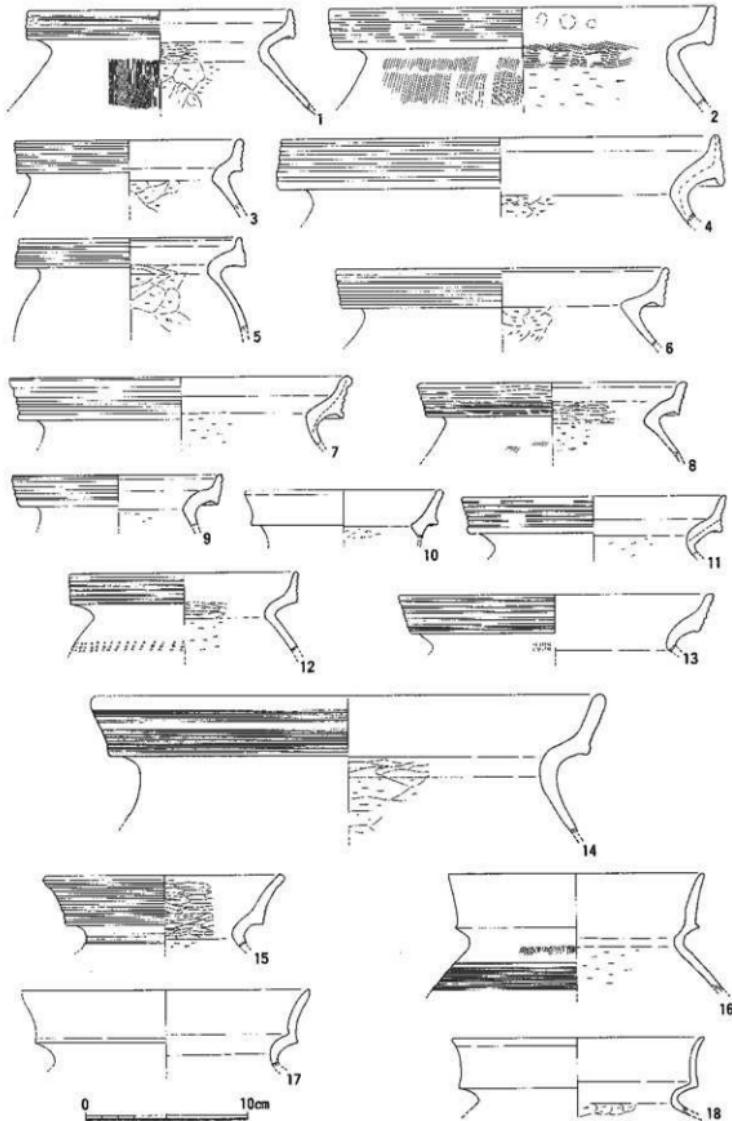
第39・40図は弥生時代後期の土器を掲載した。第39図1・2は壺、3～20が甕、21が鉢と見られる。1は口縁部が緩やかに外反し、端部は上下に拡張して4条の凹線を施す。頸部以下をヘラケズリで調整する。2は直口壺で、口縁部は胴部よりもやや厚く、端部は丸くおさめる。外面は口縁端部をのぞいて細かなヘラミガキ、内面は口縁部～頸部をヨコナデ、胴部はヘラケズリで調整する。3～6は内面のかなり高い位置まで縱方向のヘラケズリを施すが、頸部にまで及ばないものである。口縁の形態は、3のように全体に肥厚するもの、5のように上方に拡張するものなど各種あり、口縁端部には2～3条の凹線文を施すが、6のように無文のものも存在する。口縁端部以外への施文は、4で胴部最大径付近に刺突文をもつほかは認められない。7～9は外面の頸部よりやや下に刺突文をもつものである。いずれも頸部付近まで横方向のヘラケズリで調整される。7のように口縁部に文様はもたないものも存在するが、口縁は肥厚・拡張する。7はクシ状工具、8は貝殻腹縫、9はヘラ状工具による刺突である。10～20は、施文が口縁端部の凹線文のみで、刺突文が認められないものだが、これは土器の残存状況によるところも大きいと考えられる。10のように口縁部全体が肥厚するものもあるが上方に拡張するものが多く、3条～5条の凹線文を施すものである。13・16のように頸部内面に面をもつものや、15のようにヘラミガキを施すものも存在する。21は鉢と考えたが、下半部の形状は不明である。外面には横方向の細かいヘラミガキが施される。遺物の時期は、いずれも出雲V-1様式と考えられる。

第40図はいずれも甕である。1～9・11～13は口縁端部が拡張し、口縁端部に4～5条の擬凹線文を施すものである。口縁部～頸部付近までの破片が多く、胴部の施文や調整が不明なものが多いが、12では外面の頸部からやや下にクシ描きの列点文が施される。調整は1・2・8など外面にハケメを残すものと、5や12のようにナデ調整のものがある。内面は胴部に横方向のヘラケズリを施すが、1のように頸部にヘラミガキを施すもの、2のように横方向のハケメを施すものなども見られる。14・15は、口縁端部に細い多条の沈線が施されるものである。14は口縁部が大きく上方に拡張し、外面に14条の平行沈線が巡る。頸部の内面は横方向のヘラミガキ、胴部は横方向のヘラケズリである。15は口縁端部に17条の平行沈線が巡るほか、頸部にも同様な沈線が少なくとも4条認められる。口縁部内面は横方向の細かいヘラミガキ、頸部以下はヘラケズリである。16～18は口縁端部が文様をもたないものである。16は比較的器壁が厚く、口縁の先端に向かい先細りとなる。外面の頸部やや下にクシ描きの平行沈線を巡らせる。17・18は、16よりも器壁が薄くなり、口縁部が緩やかに外反しながら上方へ拡張して先端は先細りとなる。内面の頸部以下はヘラケズリを施す。

遺物の時期は、1～13が出雲V-2様式、14・15が同V-3様式、16～18が同V-4様式と考えられる。なお、10は口縁端部に文様をもたないものであるが、口縁形態・調整から出雲V-2様式のものと考えられる。



第39図 VI区 砂砾層1出土土器実測図(5) S = 1:3



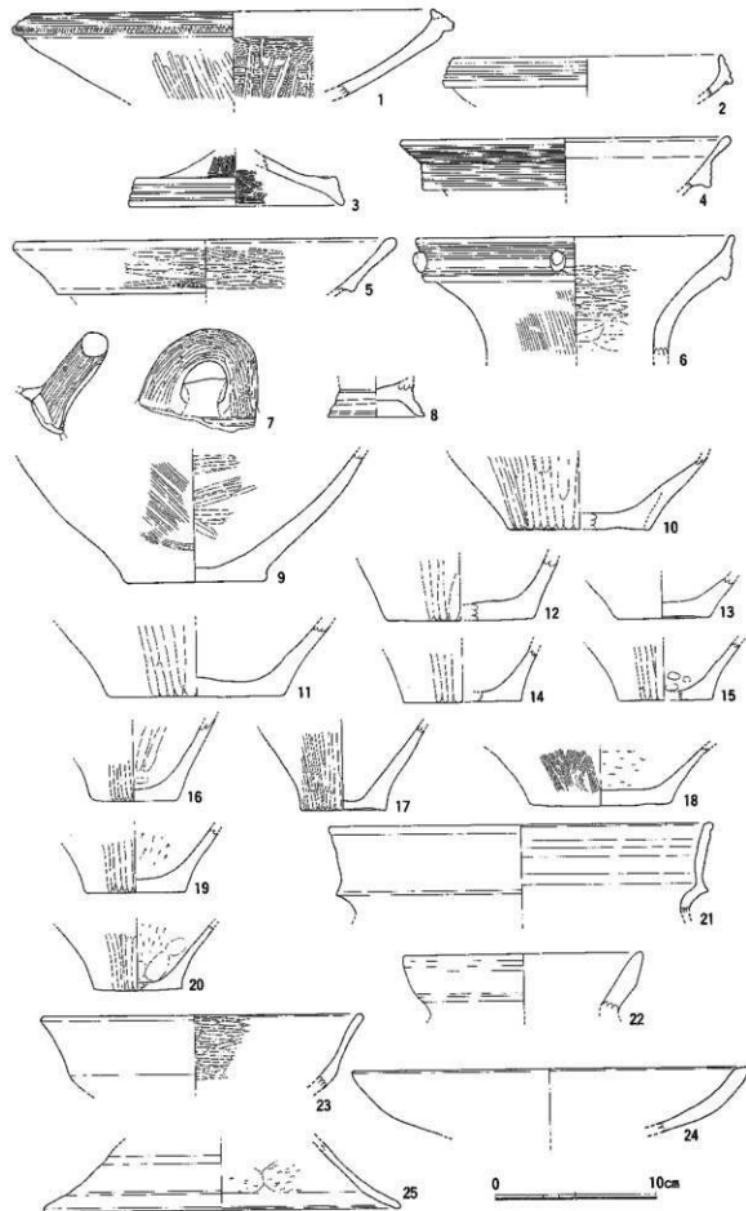
第40図 VI区 砂礫層1 出土土器実測図(6) S=1:3

第41図は弥生時代の高坏・器台・把手・底部、土師器の壺・高坏・器台を図示した。1・2は高坏の坏部、3は脚部である。1は壠部が拡張し、3条の凹線と刻目文が施される。坏部外側がヘラミガキ、内面はハケメの後ヘラミガキで調整される。2も口縁部に3条の凹線文をもつ。3は脚端部が複合口縁状を呈し、3本の凹線が施される。内・外面ともハケメで調整される。4~6は器台でいずれも受部である。4は外面に10条の平行沈線を巡らせる。外面の一部はヘラミガキ、内面はヨコナデで調整される。5は外面に文様をもたないもので、内・外面とも横方向の細かいヘラミガキで調整する。6は口縁部外側に平行沈線のほか、円形浮文を貼り付ける。外面はハケメ、内面は受部をヘラミガキ、筒部をヘラケズリで調整する。7は把手で、細かいヘラミガキで調整する。この把手がつく土器の器壁は比較的薄く、内面はヘラケズリが認められることから、注口土器の肩部につくものと見られる。8は脚部で、外面に3条の沈線が巡る。9~20は底部で、9は外面にハケメ、内面にヘラミガキが認められる。10~14・16・17はいずれも外面が縱方向のヘラミガキ、内面はナデが施される。18~20はいずれも内面にヘラケズリが施されるものであるが、19・20はヘラケズリが縱方向で、外面はヘラミガキであるのに対し、20は横方向のヘラケズリで外面はハケメである。21は土師器の壺で、複合口縁の先端部が外側へ屈曲する。22も壺であるが器壁が厚く、短く外傾する単純口縁で外面にはナデの痕跡が残る。23・24は高坏と考えられる。口径は23が20.8cmで坏部が深く口縁端部は丸くおさめるものである。調整は坏部内面に横方向のヘラミガキが施される。24は復元口径が24.6cmと大きく、浅い坏部をもつものと見られる。先端になるにつれて徐々に器壁が厚くなり、端部には平坦面をもつ。25は鼓形器台の脚部である。脚端部に向かってハの字状に開き、端部は丸くおさめる。文様はもたず、内面はヘラケズリで調整する。

造物の時期は、1~3が出土V-1様式、4・6が同V-2様式、5・7がV-3様式に相当すると考えられる。9~20については、内面ナデ調整のものは出土III-1様式以前、ヘラケズリが見られるものは同III-2様式以降と考えられるが、それ以上の特定は困難である。土師器については、21・25が松山編年I期、23が同III期と考えられる。22・24については詳細は不明である。

砂砾層2出土遺物（第42・43図）

砂砾層2からは、縄文時代～弥生時代の遺物が出土している。遺物の時期が砂砾層1と重なるところもあるが、下限は弥生時代で、古墳時代の遺物は出土していない。第42図1~4は縄文土器である。1は浅鉢と考えられ、外面に斜め方向の隆帯をもつ。内・外面とも条痕調整である。2は胎土に纖維を含み内・外面とも条痕調整を施す。3・4は尖底文土器で、口縁部のやや下方に刻み目をもつ突帯を巡らせるものである。5・6は弥生時代の壺である。5は肩部の破片で、ヘラ描きの平行沈線などを施文する。6は頸部に段をつくり出す。7~11は壺である。7は口縁端部を外側へ折り曲げて肥厚させるもので、頸部にヘラ描き沈線が施される。8は無文のもので、外面にハケメ、内面に指頭圧痕が認められる。9は口縁が外側へ屈曲し、わずかに肥厚するもので鉢の可能性もある。頸部には指頭圧痕をもつ貼付突帯を巡らせる。調整は内・外面ともハケメである。10も口縁部が屈曲するもので、外面はハケメ、内面は部分的にヘラミガキが認められる。11は口縁部が肥厚し、端部には平行沈線が施される。肩部は内・外面ともハケメで調整される。12・13は鉢で、12は口縁端部がT字状に拡張し、刻目文が施される。また胴部にはクシ描きの列点文も施文される。13は大形のもので、胴部は内済して口縁部に主る。口縁部は12と同様にT字状に拡張し、上



第41図 VI区 砂礫層1出土土器実測図(7) S=1:3

面には3条単位のクシ描き格子文が施されるほか、口縁部から胴部には刻目突帯文、クシ描き刺突文が施される。

遺物の時期は、1が縄文時代前期初頭⁶、2が早期末⁷、3・4が晩期⁸である。6～8は出雲I-2～4様式、9・10・12が同III-1様式、13がIII-2様式、11がIV-1様式に相当する。

第43図1～5は堀、6～13は脚部・底部である。1は器壁が全体に厚く、口縁が上方に拡張し4条の平行沈線を施す。内面はヘラケズリで調整するが、頭部付近は指頭圧痕が残る。2は5条の平行沈線を施し、頭部まで横方向のヘラケズリで調整する。3は口径が小さく、口縁部に凹孔をもち、頭部に平行沈線、刺突文を施すなど装飾性の強いものである。内面頭部はヘラミガキ、以下はわずかながらヘラケズリが認められる。4は比較的器壁が厚く、口縁部先端が先細りになるものである。胴部内面はヘラケズリと見られる。5は小形の壺で、単純口縁をもつ。胴部最大径付近から4段にわたって半截竹管による刺突文を施し、内面は頭部までヘラケズリで調整する。6は小形の壺ないし鉢の底部と見られ、内面に指頭圧痕が残る。7は底部穿孔された脚部で内・外ともヘラミガキを施す。8～13は外面に縱方向のヘラミガキを施すものである。9については、最下部付近にハケメが認められるほか、砂粒の移動痕もありヘラケズリが行われた可能性もある。内面調整はナデ、ハケメ、ヘラミガキ・ヘラケズリと各種のものがある。

遺物の時期は、1が出雲V-1様式、2・3が同V-2様式、4がV-4様式に相当する。5は内面ヘラケズリ調整を施しているが、器形・文様の特徴からは出雲III様式とも考えられる。脚部・底部については内面調整から13が出雲III-2様式以降、その他は同III-1様式以前の可能性が高い。

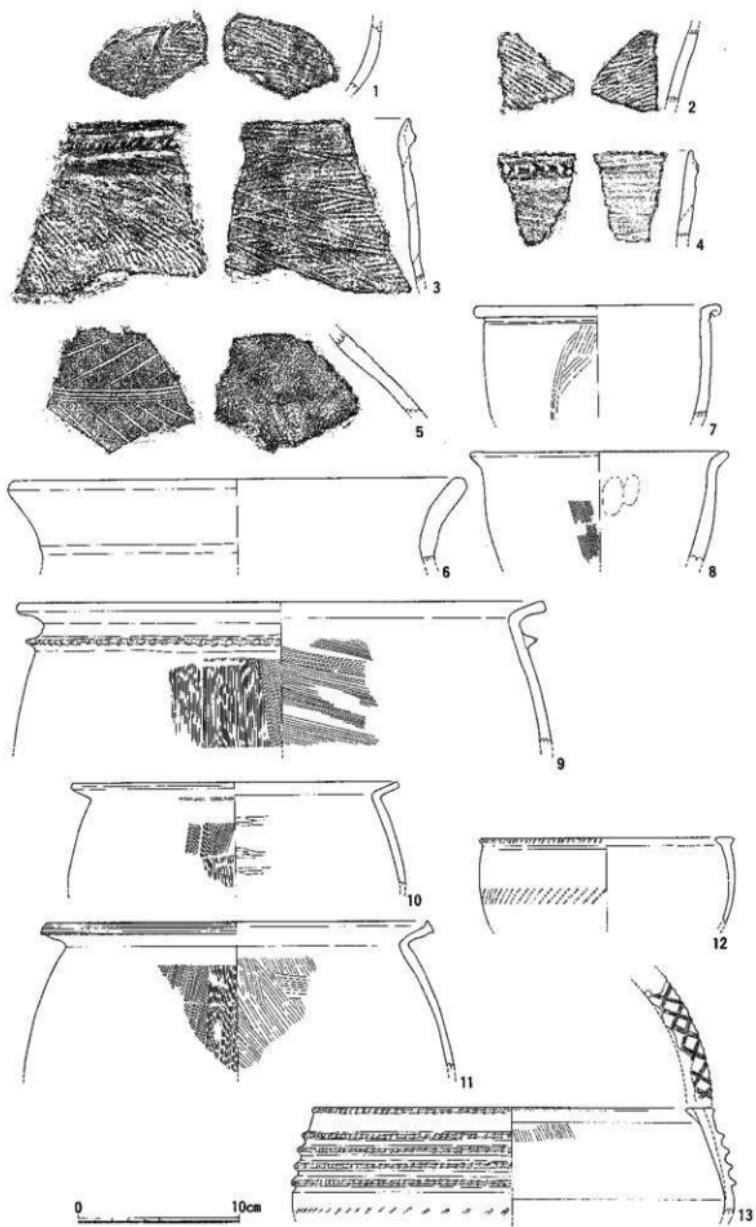
砂砾層3・4出土土器（第44図）

遺物包含層である砂砾層は、北壁の土層観察では23層、26層、27層の3つに分層できる。一方西壁では15層、19層の2つにしか分けられない。このため、北壁と西壁の層位については、北壁23層はそのまま西壁15層に対応させ砂砾層3、北壁26層・27層の2つは西壁19層に一括して対応させ砂砾層4としておく。ただし、19層は20層・21層といった有機物を含む粘質土を挟み、細分できる可能性をもつ。なお、これらの層は二次堆積と考えられるものの、縄文土器以外の遺物は出土していないことから、堆積した時期が出土遺物の時期に比較的近い可能性がある。

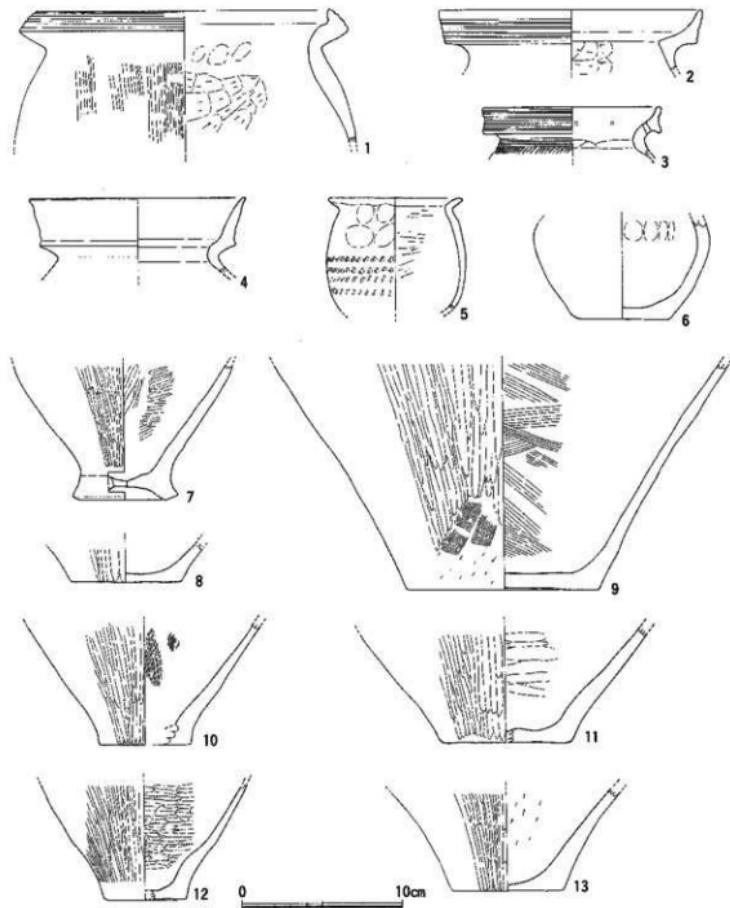
第44図1～4は砂砾層3、5～8が砂砾層4から出土したもので、いずれも深鉢と考えられ、胎土に纖維を含んでいる。1は内・外表面を条痕調整する。2は口縁部が肥厚し、貝殻腹縁による刺突文をもつもので内面は条痕調整である。3は、外面に半截竹管様の二叉の工具と2枚貝の貝殻腹縁を用いた連續刺突文を施す。内・外とも条痕調整である。4は、内・外とも条痕が認められる。5は底部付近で、丸底になるものと考えられる。外面には縄文、内面には条痕が施される。6は外面は条痕地で、一部に縄文がみられる。7は縄文を地文とし、口縁部に貼付突帯をもつ。突帯には2枚貝による刺突文が施されるほか、器表にも同様な刺突文が複数列施されるようである。

8は内・外表面条痕調整とみられる。

1は長山式、2・3が西川津A式で、4も西川津式と見られるが、文様がないため詳細は不明である。5・6・8は菱根式、7は長山式で、時期は縄文時代早期末～前期初頭にあたる⁹。



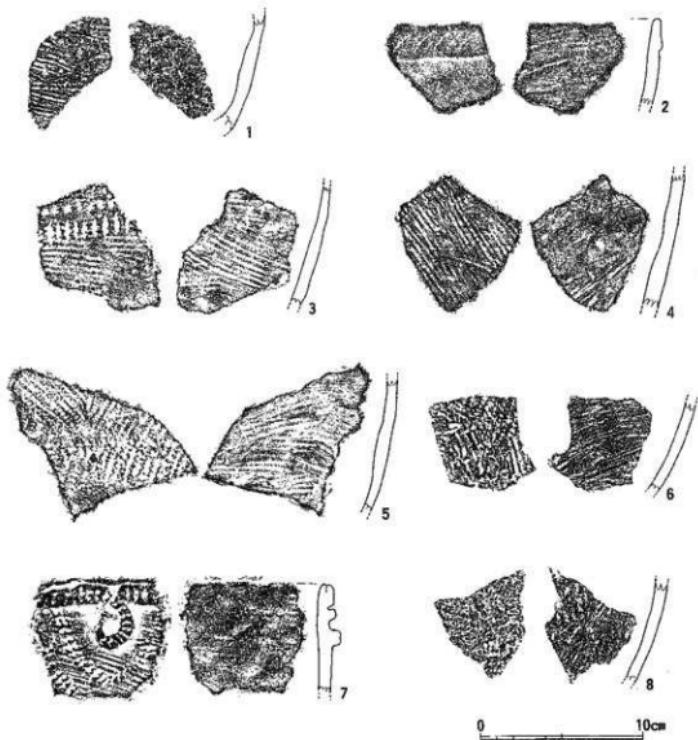
第42図 VI区 砂疊層2出土土器実測図(1) S=1:3



第43図 VI区 砂疊層2出土土器実測図(2) S=1:3

VI区出土土器 (第45・46図)

第45・46図は、壁の崩落などにより出土層位が特定できなかった土器のうち、図化可能なものを掲載した。第45図1~4は縄文土器でいずれも深鉢である。1は胸部から口縁部へ直線的にのびるもので、外面に羽状縄文、内面に条痕をもつ。2は波状口縁で、口縁部が肥厚する。外面には太い凹線をもち、内面は条痕調整である。3・4は突帯文土器で、口縁よりやや下に刻目を有する突帯が巡る。内・外とも条痕調整である。5~18は弥生土器である。5は壺の胸部で、ヘラ描きの沈線文、刻日文などが施される。調整は内・外ともヘラミガキである。6は壺で、口縁が緩やかに外反する。7~9は壺である。7は口縁が大きく外反し、端部は肥厚する。頸部には凹線が認め



第44図 VI区 砂礫層3・4出土土器実測図 S=1:3

られる。8は短頸壺で、肥厚する口縁の上面に2条の沈線文が施される。内面はナデであるが、ハケメと見られる工具痕がわずかに残る。9は大きく開く口縁の端部で、上面に4条の凹線とクシ状工具による刻目文が施される。10は鉢と考えられる。肩部から直立して口縁部に至り、端部が小さくT字状に拡張する。内・外面ともナデ調整と考えられ口縁部直下には指頭圧痕が残る。11～17は壺である。11は口縁端部がわずかに上方につまみ上げられるように拡張し、外面に刻目文が施される。全体に風化が著しいが、内面の一部に粗いハケメが認められる。12は口縁全体が肥厚し、端部は丸くおさめる。肩部外面はハケメで調整する。13～16は口縁端部に平行沈線を施すものである。15は頸部に指頭圧痕突帯をもつが、そのほかは頸部以下を欠くため、詳細は不明である。18は高壺で、口縁端部が肥厚し、刻目文を施す。内・外面ともヘラミガキで調整する。

遺物の時期は、1が縄文時代早期末¹⁰⁾、2は同後期初頭、3・4は晩期である¹¹⁾。5・6は出雲I-2-3様式、7・10～12・18が同III-1～2様式、8・9・13～17がIV-1～2様式と考えられる。

第 46 図 1~6・8・9 は弥生土器の壺で、口縁端部が拡張して外面に 3~5 条の平行沈線を施すものである。内面頸部付近から下位にはヘラケズリを施すが、4・6 では頸部の一部にヘラミガキが加えられている。9 は肩部付近まで残存し、外面に刺突文を巡らせていているのがわかる。7 は頸部がやや長く、壺の可能性がある。内面の口縁部から頸部にかけてはハケメで調整する。10 は壺と考えられ、口縁部が大きく拡張し、10 条の細い沈線が施される。11 も弥生土器の壺で、口縁端部がわずかに外側へ屈曲する。口縁部には施文されず、肩部に平行沈線が施されるのみである。12 は短い単純口縁をもつ壺で、頸部はくの字に屈曲する。文様は施されず、内面頸部以下はヘラケズリで、胴部下位はさらに細かいヘラミガキを加える。13~18 は底部で、13~16 は内面ナデ、17・18 はヘラケズリが施される。16 は底部に穿孔がある。19・20 は脚部である。19 の胴部内面、20 の脚部内面はヘラケズリで調整される。21 は須恵器の坏身で比較的長いかえりをもつ。

遺物の時期は 1~9 が出雲 V-1 様式、10 が同 V-3 様式、11 が V-4 様式と考えられる。12 は出雲 V-3~4 様式のいずれかに相当すると見られる。底部・脚部については、内面ナデ調整を施す 13~16 は出雲 III-1 様式以前、17~20 は同 III-2 様式以降の可能性が高い。21 は古墳時代後期である。

VI区出土石製品・土製品（第 47 図）

第 47 図は石製品と土製品を掲載した。1 は、砂砾層 1 の上にのる砂+粘質土層から出土した磨石で、一方の面がやや平坦になり、その中央付近に径約 2 cm の浅いくぼみをもつ。2 は砂砾層 1 から出土した石錐で、板状の石の両短辺にくぼみをつくる。3 は分銅形土製品で、これも砂砾層 1 から出土した。半截竹管状ないしクシ状の工具による刺突文、ヘラ描沈線文などが施されるものである。

VI区出土木製品（第 48~52 図）

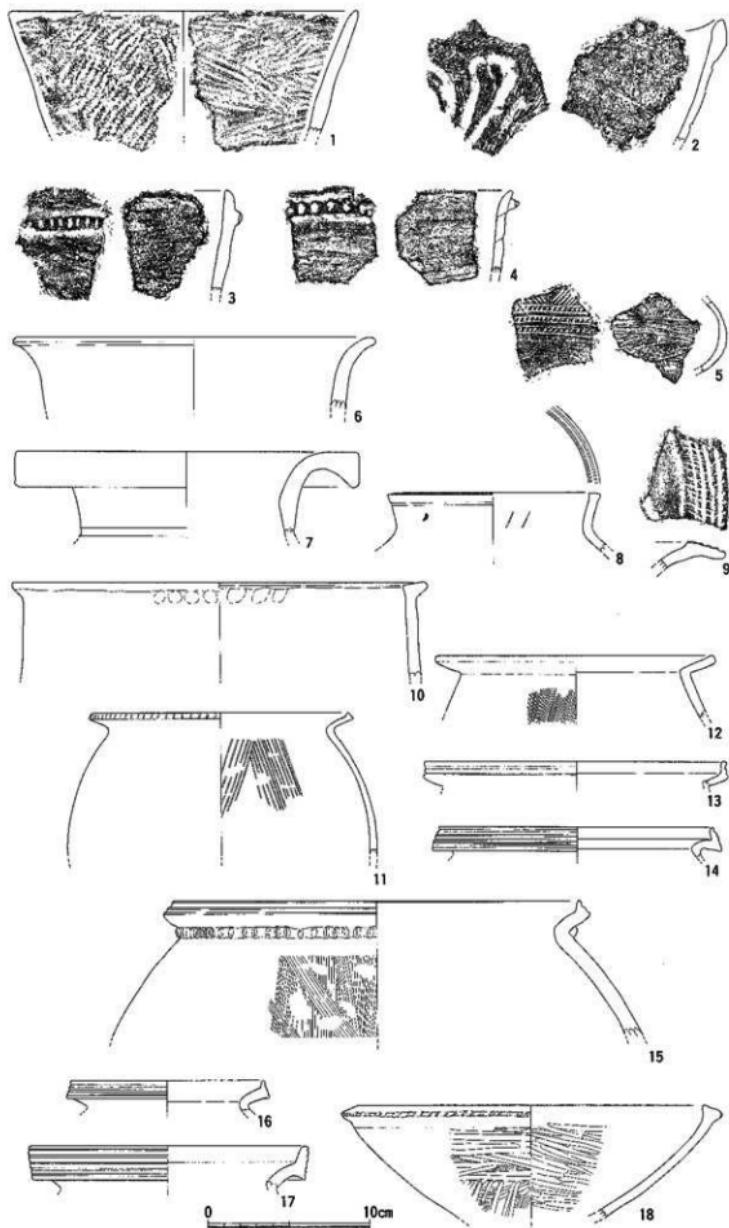
VI区から出土した木製品は、杭列状造構を構成する杭が多数を占めるが、高坏などの容器、鋤、祭祀具とも考えられる用途不明の木製品なども出土している。

第 48 図-1 は高坏の坏部である。坏底部は比較的平坦で、底部外周には花弁状の裝飾が施される。底部のほぼ中心となる位置には、小さな孔をもつ。2・3 は用途不明の木製品である。2 は一方の端部を欠いているが、もう一方の端部はふくらみをもつように加工される。横断面は半円形である。3 は薄い板状で、片方の端部を欠くが、もう一方の端部は突起状に加工される。何らかの祭祀具の可能性が考えられる。4 は用途不明の部材である。各面ともきれいに面取りされている。5 は鋤の先端部分である。4 本刃とみられ、柄を取り付けるためのくぼみをもつ。6 は柄とも考えられるが、一端は杭のように削られている。7 は一方の端部にふくらみを残し反対側をとがらせている。8 は一方の短辺に削り込みをもち、長辺の円孔が認められる。

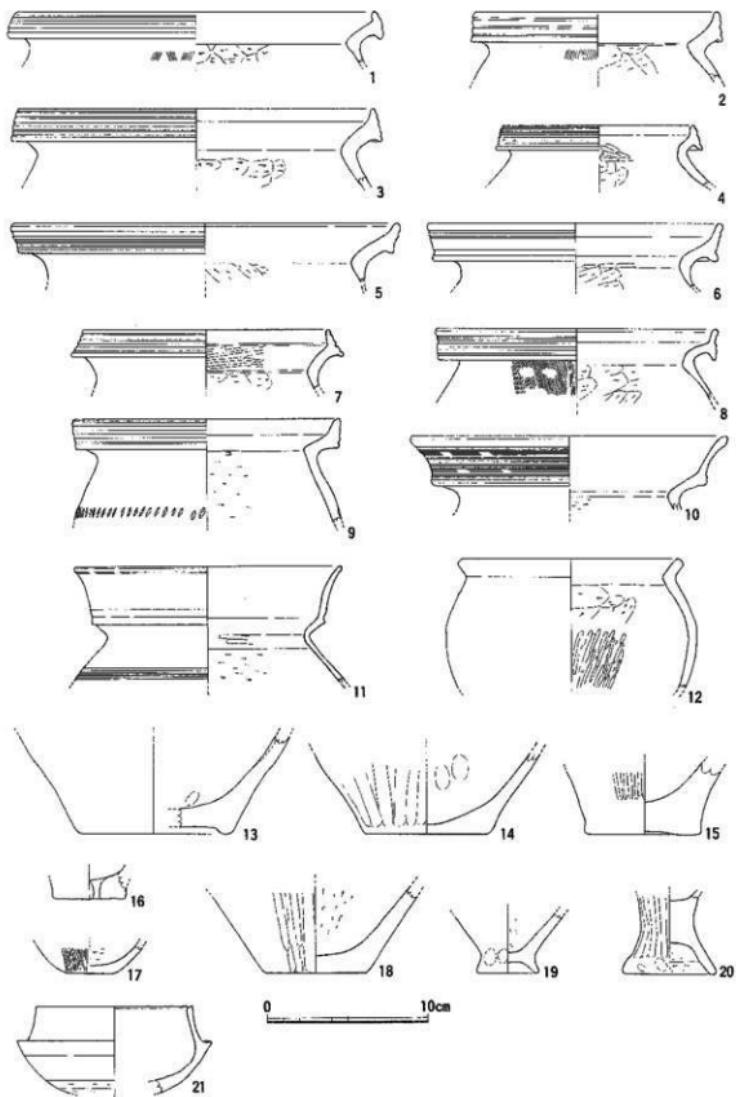
9 は薄い板状の木製品で、円孔が 3 つ認められる。10 は板状の木製品で、用途不明である。

第 49・50 図は杭である。自然木の先端のみを削って杭としたものがほとんどで、全体に加工を施したもののは第 49 図 2・6、第 50 図 2・4 など少数である。長さは 36.0cm ~ 93.1cm と様々である。

第 52 図は梯子と考えられる。径 10cm 前後の比較的太い自然木に、深さ 4~8 cm のくぼみを 3 つ設けている。



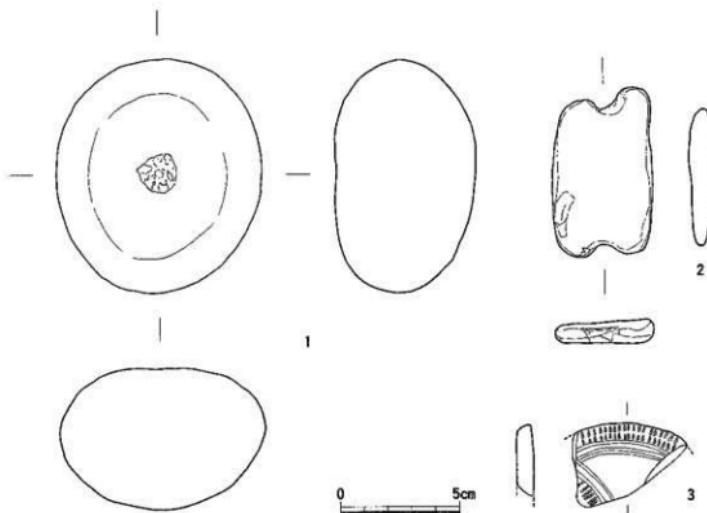
第45図 VI区出土 土器実測図(1) S=1:3



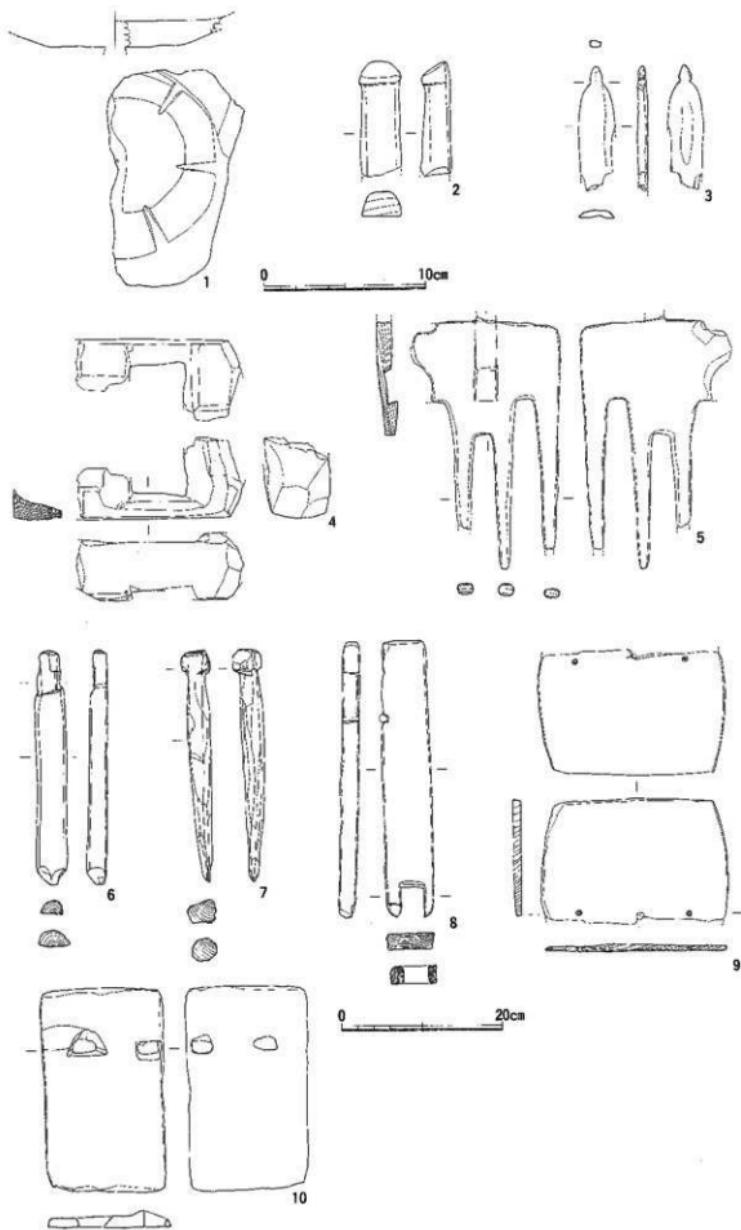
第46図 VI区出土 土器実測図(2) S = 1:3

註

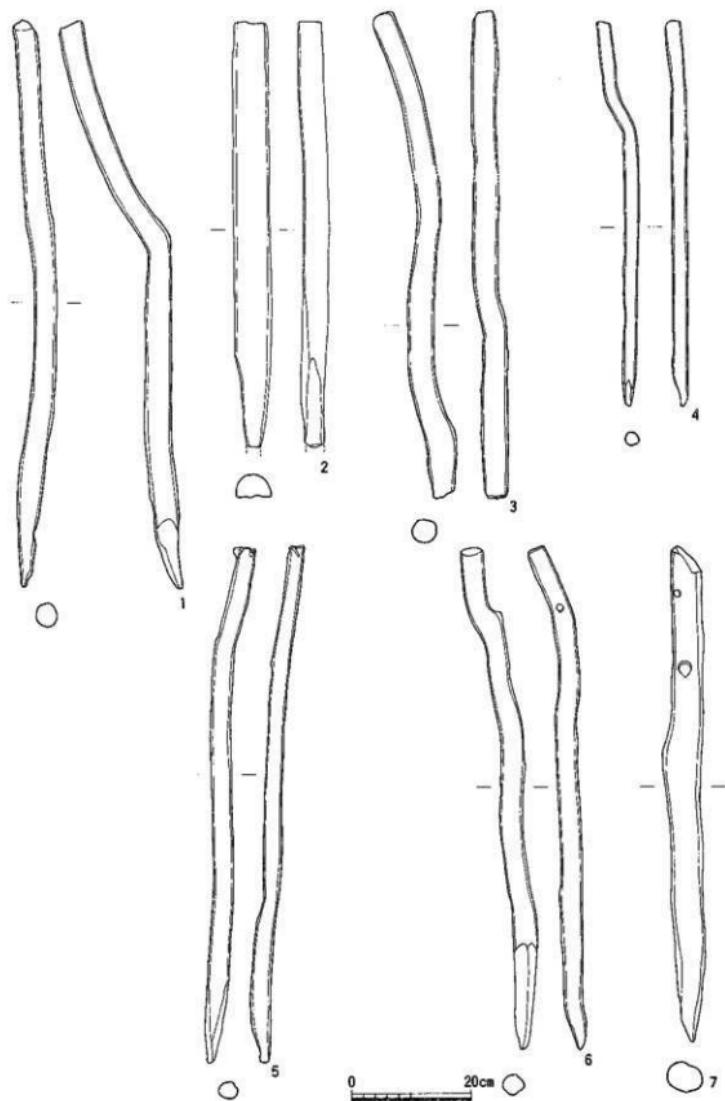
- 1) 島根県教育委員会「西川津遺跡」Ⅲ 1987
- 2) 松本岩雄「出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年」—山陰・山陽編一 1992
以下、出雲○様式と記載したものはこの編年による。
- 3) 松山哲宏「山陰における古墳時代前半期の土器様相」「島根考古学会誌」第8集 1991
以下、松山編年○期と記載したものはこの編年による。
- 4) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「島根考古学会誌」第11集 1994
以下大谷編年○期と記載したものはこの編年による
- 5) 小林達雄 編「縄文土器大観」1・3・4 1989
- 6) 井上智博「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」「考古学研究」38-2 1991
- 7) 註6に同じ
- 8) 小林達雄 編「縄文土器大観」4 1989
- 9) 註6に同じ
- 10) 註6に同じ
- 11) 註8に同じ



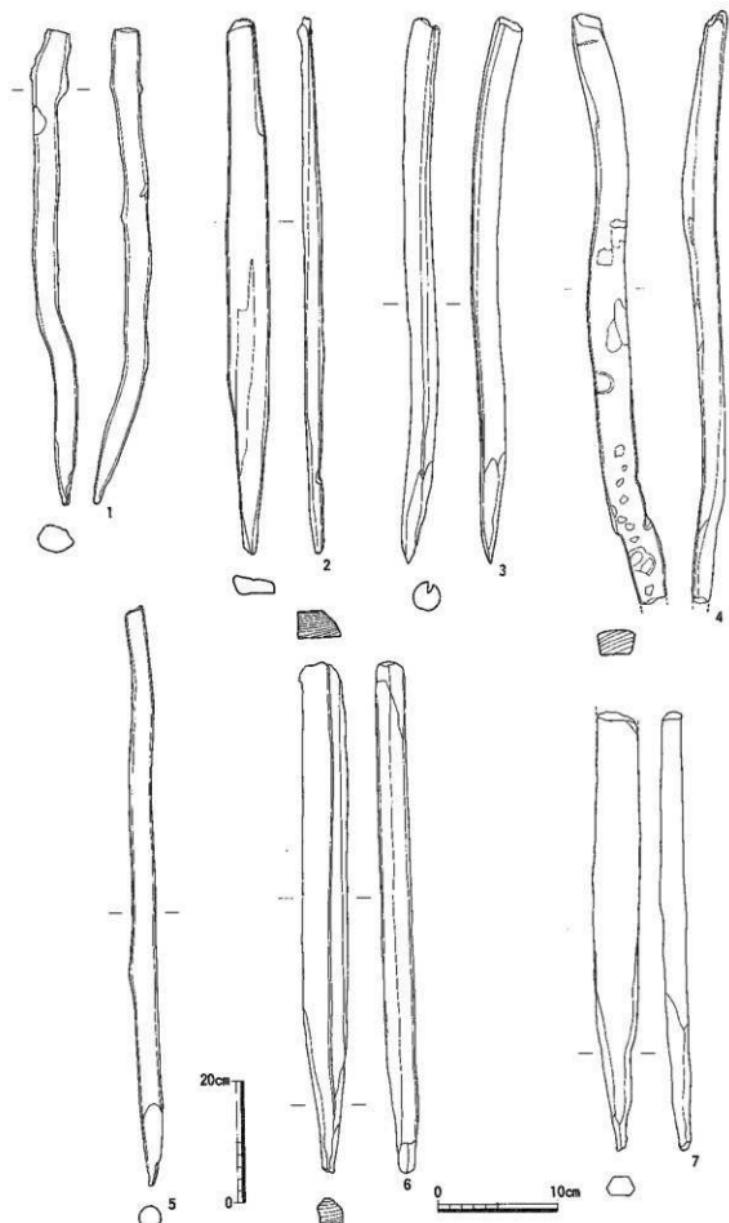
第47図 VI区出土 石製品・土製品実測図 S=1:2



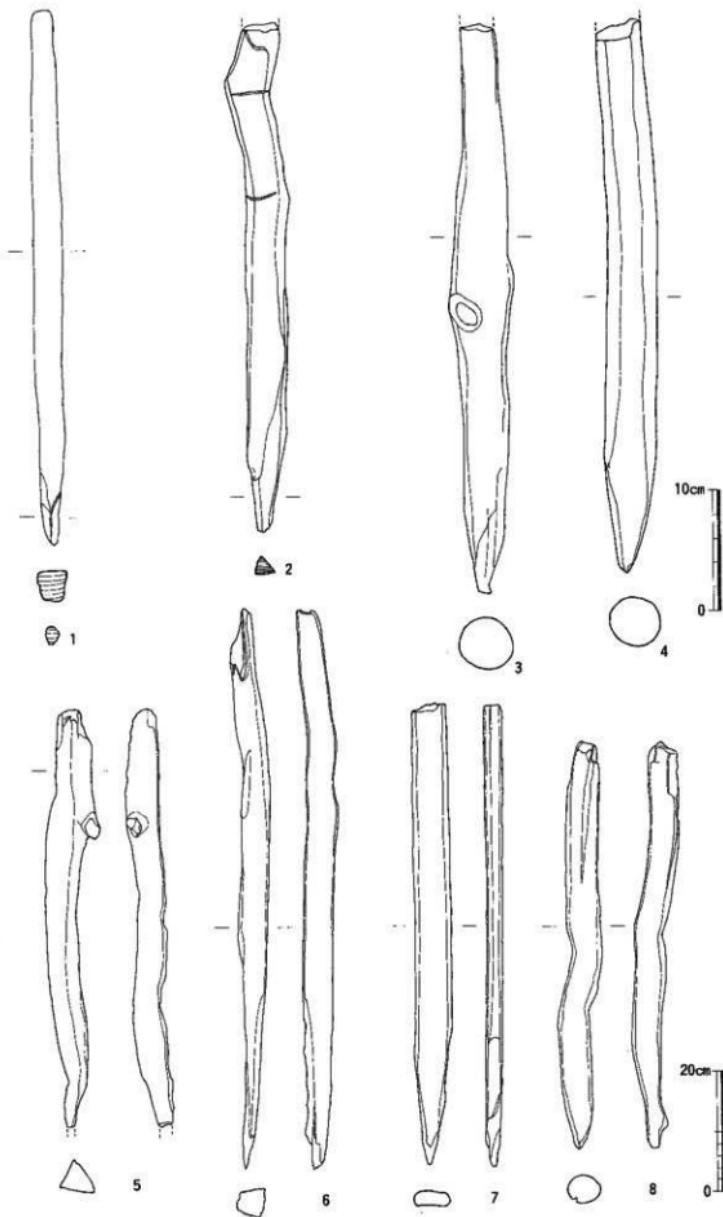
第48図 VI区出土 木製品実測図(1) S = 1:6



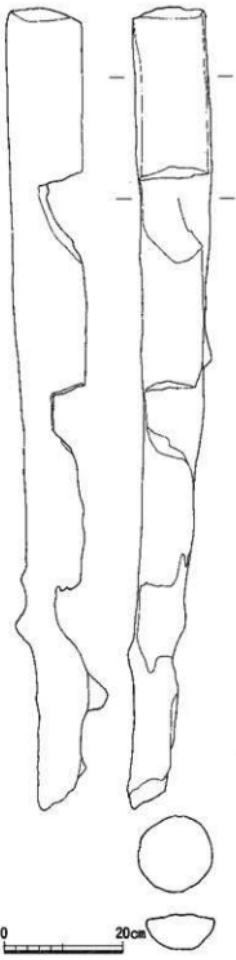
第49図 VI区出土 木製品実測図(2) S = 1:8



第50図 VI区出土 木製品実測図(3) 1~5 S=1:8 6~7 S=1:4



第51図 VI区出土 木製品実測図(4) 1~4 S=1:4 4~8 S=1:8



第52図 VI区出土 木製品実測図(5) S=1:8

表7 西川津遺跡VI区出土土器觀察表

探査番号	種類	遺物名 (cm)	形態・手法の特徴	出土場所	胎・色調・焼成		備考
					口径	底径	
32-01	甕生燒	17.6	外縁:ヨコナデ、ナデ 内縁:ヨコナデ? ハラケズリ	淡青灰褐色土	2mm以下の砂粒を多く含む	淡青褐色 良好	口縁部:3条平行沈線文
32-02	甕生燒	15.8	外縁:ヨコナデ、ハマケ 内縁:ヨコナデ、ハラケズリ	淡青灰褐色土	砂粒を含む	淡青色 良好	口縁部:7条平行沈線文
32-03	甕生燒	29.0	外縁:ナデ 内縁:風化のため不明	淡青灰褐色土	1~2mmの砂粒を多く含む	淡青白色 良好	口縁部:6条平行沈線文
32-04	甕生燒	13.0	外縁:ヨコナデ 内縁:ヨコナデ、ハラケズリ?	淡青灰褐色土	砂粒を含む	茶白色 良好	
32-05	甕生燒	16.4	風化のため不明	淡青灰褐色土	1mm以下の砂粒を多く含む 良好	淡青褐色 良好	
32-06	甕生燒部	11.2	内・外縁:風化のため不明	淡青灰褐色土	3mm以下の砂粒を多く含む 良好	淡青褐色 良好	低窯坪か?
32-07	甕生燒部	7.0	外縁:ハラカギ、底盤ナデ? 内縁:ヨコナデ、ナデ	淡青灰褐色土	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	外縁に波紋文
32-08	土器	15.8	外縁:ヨコナデ 内縁:ヨコナデ、ハラケズリ?	淡青灰褐色土	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青灰褐色 良好	
32-09	土器	14.6	外縁:ヨコナデ 剥離不規 内縁:ヨコナデ、剥離ハラケズリ	淡青灰褐色土	砂粒を含む 外縁:淡青褐色 内縁:淡青白色 良好	淡青褐色 良好	ヘラ剥剝実文
32-10	土器	13.0	内・外縁:風化のため不明	淡青灰褐色土	2mm以下の砂粒を多く含む 外縁: 淡青白色 内縁: 淡青褐色	淡青白色 良好	壺の可逆性もある
32-11	土器 环	13.0	表面削剥のため調査不明	淡青灰褐色土	1mm以下の砂粒を多く含む 2~5mmの砂粒を含む 良好	淡青褐色 良好	
32-12	土器 环	18.7	内・外縁:ヨココテ	淡青灰褐色土	2mmの砂粒を含む	淡青褐色	外縁に段
32-13	土器 环	18.7	外縁:ナデ、ハラカギ 内縁:ハラカギ? ナデナデ	淡青灰褐色土	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	
32-14	陶器 灰塗	14.4	外縁:ヨコナデ、白粉ハラケズリ? 内縁:ヨコナデ、ナデ	淡青灰褐色土	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	
32-15	土器 尊	15.2	風化のため不明	淡青灰褐色土	4mmの砂粒を含む	淡灰色 良好	直口壺か?
32-16	土器 尊	26.1	外縁:ヨココテ 内縁:ヨココテ、ハラケズリ?	淡青灰褐色土	3mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	ヘラ剥剝羽状文
32-17	土器 尊	20.8	外縁:ヨココテ? ハラケズリ?	淡青灰褐色土	1mm以下の砂粒を僅かに含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	
32-18	土器 尊	23.0	外縁:ヨココテ? 内縁:ナデ? ハラケズリ?	淡青灰褐色土	2mm以下の砂粒を少し含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	5条の平行沈線文、6条の波紋文
35-01	西文 波紋		内・外縁:骨質条痕	砂礫層?	2mmの砂粒を含む	淡青褐色 良好	波状口縁、凹縁文、中津式?
35-02	西文 波紋		外縁:条痕 内縁:ナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	舟元W
35-03	西文 波紋		内・外縁:ナデ?	砂礫層?	2mmの砂粒を含む	淡青褐色 良好	波状口縁、凹縁文、中津式?
35-04	西文 波紋		外縁:ナデ 内縁:風化のため不明	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	舟元による沈線、宮窓式
35-05	甕生燒	15.6	外縁:指擦压痕、ナデ 内縁:ナデ	砂礫層?	4mmの大砂粒を含む	淡青褐色 良好	網目系無人跡文か?
35-06	甕生燒 不規	4.9	風化のため不明	砂礫層?	3mmの大砂粒を含む	底灰 茶色 良好	凹円、刺突文
35-07	甕生燒		外縁:ナデ 内縁:ナデ、ハケメ	砂礫層?	1~2mmの大砂粒を含む	茶系灰色~灰色 良好	へら接沈線、シングル列点文
35-08	甕生燒 不規	6.4	外縁:ハラカギ、底盤ナデ 内縁:ナデ	砂礫層?	1mmの大砂粒を含む	茶系灰色~暗灰色 良好	
35-09	甕生燒 不規	15.0	外縁:ナデ? 内縁:ナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	
35-10	甕生燒 不規	18.2	外縁:ナデ(指擦压痕) 内縁:ナデ、ハケメ	砂礫層?	2mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	
35-11	甕生燒 不規	15.3	風化のため不明	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	茶系灰色~底灰 良好	
35-12	甕生燒 不規		外縁:ヨコナデ、ナデ 内縁:風化のため不明	砂礫層?	1~2mm以下の砂粒を多く含む 外縁: 淡青褐色~淡青灰色 内縁: 淡青褐色~底盤 良好	淡青褐色 良好	口縁部:ヘラ工具による割目目 縫隙1条の状況
35-13	甕生燒	26.6	外縁:ヨココテ、指擦压痕、ハケメ 内縁:ヨココテ	砂礫層?	1~2mm以下の砂粒を多く含む 外縁: 淡青褐色~淡褐色 内縁: 淡青褐色 良好	淡青褐色~淡褐色 良好	口縁部: 指擦压痕による割目目 縫隙1条の状況
35-14	甕生燒	23.4	外縁:ヨココテ、ナデ、ハケメ 内縁:ヨココテ、ナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	口縁部: 制鉄実文 頭部: 7条ヘラ接沈線文
36-01	甕生燒	16.8	風化のため不明	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	
36-02	甕生燒	28.8	内・外縁:ナデ?	砂礫層?	1~2mm以下の砂粒を多く含む 外縁: 淡青褐色~底盤 内縁: 淡青褐色~底盤 良好	淡青褐色 良好	口縁部: ヘラ工具による割目目 縫隙1条の状況
36-03	甕生燒	28.6	内・外縁:ナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 外縁: 淡青褐色 内縁: 淡青褐色 良好	淡青褐色 良好	口縁部: 4条平行沈線文 口縁部: 5条平行沈線文
36-04	甕生燒		外縁: 瓢のため不明 内縁: ヨコナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を含む 外縁: 淡青褐色 内縁: 淡青褐色 良好	淡青褐色 良好	口縁部: 2条平行沈線文
36-05	甕生燒	12.6	内・外縁:ヨコナデ 指擦压痕板	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色~底盤 良好	口縁部: 2条平行沈線文 口縁部: 4条平行沈線文
36-06	甕生燒	21.2	内・外縁:ヨコナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	口縁部: 3条平行沈線文
36-07	甕生燒	26.2	外縁:ヨコナデ、ハケメ 内縁: 口縁 ヨコナデ、指擦压痕板(指擦压痕板)、ナデ?	砂礫層?	1mm以下の砂粒を含む 外縁: 淡青褐色~淡褐色 内縁: 淡青褐色 良好	淡青褐色~淡褐色 良好	口縁部: 3条平行沈線文 頭部: 指擦压痕文
36-08	甕生燒	22.2	内・外縁:ヨコナデ	砂礫層?	4mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	口縁部: 2条平行沈線文 頭部: 4条平行沈線文
36-09	甕生燒	25.0	外縁: 指擦压痕(ハケメ 他)、風化のため不明 内縁: ヨコナデ(風化のため不明)	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	口縁部: 4条へら接平行沈線文
36-10	甕生燒	29.0	外縁:ヨコナデ、ハケメ 内縁:ヨコナデ、ナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	口縁部: 3条平行沈線文 頭部: 2条へら接平行沈線文、ハラ剥剝羽状文 内縁: ヨコナデ 3条へら接沈線文
37-01	甕生燒	17.6	外縁:ヨコナデ、ナデ 内縁:ヨコナデ、ナデ	砂礫層?	2mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	頭部: 8条平行沈線文
37-02	甕生燒	18.6	内・外縁:ヨコナデ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を多く含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	頭部: 8条クジ接平行沈線文
37-03	甕生燒	13.6	内・外縁:ヨコナデ、ハケメ	砂礫層?	1mm以下の砂粒を含む 底盤 良好	淡青褐色 良好	

堆積番号	種類	法量(cm)	形態・手法の特徴	出土場所	土・色調・焼成	備考
	器種	口径	底径	器高		
37-04	先生 窯	18.2	外面: ナ・ハケメ・ヘラミカキ 内面: ヨコナ・ハラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を少し含む 暗褐色	輪部: クシ彫刻突出 内面: 良好
37-05	先生 窯	28.8	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: 口縁部ヨコナ・底部ハカイ 内面: 口縁部ヨコナ・底部ナデ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 底部色	口縁部: 淡い洗練 内底: 良好
37-06	先生 窯	23.6	内・外面: ヨコナ・ハラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を僅かに含む 良好	輪部: 淡い洗練 内底: 良好
38-01	先生 窯	19.6	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: コヨナ・ナデ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 良好	輪部: クシ彫刻突出 内面: 良好
38-02	先生 窯	20.8	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ハケス・ナデ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰褐色	口縁部: 平行沈線文 内面: 良好
38-03	先生 窯	28.8	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: ヨコナ・ハラミカキ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を少し含む 底部色	輪部: 平行沈線文 内面: 良好
38-04	先生 窯	29.8	内・外面: ヨコナ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色	口縁部: 平行沈線文 内面: 良好
38-05	先生 窯	16.8	内・外面: ヨコナデ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 底部色: 灰色 良好	口縁部: 淡い平行沈線文 外周: 一回すす付箋
38-06	先生 窯	17.0	内・外面: ヨコナデ	砂礫層①	1mm以下の砂粒をやや含む 内面: 暗茶色 内底: 白色	口縁部: 平行沈線文 内面: 良好
38-07	先生 窯	19.4	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラミカキ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 灰色	口縁部: 平行沈線文 内面: 良好
38-08	先生 窯	16.6	内・外面: ヨコナ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を含む 外周: 暗褐色 内底: 黄褐色	口縁部: 平行沈線文 内面: 良好
38-09	先生 窯	15.4	外面: ナ・内面: ヘラケズリ/後ナデ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 底部色: 暗褐色	口縁部: 平行沈線文 内面: 良好
39-01	先生 窯	25.4	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を含む 良好	口縁部: 平行沈線文 内面: 一回すす付箋
39-02	先生 窯	12.0	外面: ヨコナ・ヨコナキ 内面: ヨコナ・底部ナデ 側面: ヘラズリ	砂礫層①	3mm以上の砂粒をやや含む 1mm以下の砂粒を含む 外周: 暗褐色 内底: 灰色	直口章
39-03	先生 窯	10.4	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	2mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 黄褐色	口縁部: 3条の平行沈線文 内面: 良好
39-04	先生 窯	15.0	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	2mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 暗褐色	口縁部: 2条の平行沈線文 内面: 良好
39-05	先生 窯	17.0	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ/後ナデ	砂礫層①	2mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色	口縁部: 2条の平行沈線文 内面: 一回すす付箋
39-06	先生 窯	12.2	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ナデ・ヘラケズリ	砂礫層①	3mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色	口縁部: 2条の平行沈線文 内面: 良好
39-07	先生 窯	12.4	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	微細粒を含む 底部色: 茶褐色 良好	輪部: クシ彫刻突出(一部ハケズリ)
39-08	先生 窯	10.8	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ/後ナデ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 乳白色-暗褐色	口縁部: 3条平行沈線文 内面: 一回すす付箋
39-09	先生 窯	14.0	外周: 濁化した不明 内面: 輪部ヘラズリ	砂礫層①	1~2mmの砂粒を含む 底部色: 灰褐色	輪部: 見出
39-10	先生 窯	22.0	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	3mm以下の砂粒を多く含む 外周: 黄褐色 内底: 黑褐色	口縁部: 3条平行沈線文 内面: 良好
39-11	先生 窯	15.0	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 暗褐色	口縁部: 3条平行沈線文 内面: 一回すす付箋
39-12	先生 窯	19.0	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ヨコナキ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を少し含む 底部色: 黑褐色	口縁部: 4条平行沈線文 内面: 良好
39-13	先生 窯	13.0	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を含む 底部色: 黑褐色	口縁部: 3条平行沈線文 内面: 良好
39-14	先生 窯	21.0	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・搭接痕・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を少し含む 外周: 暗褐色 内底: 暗褐色	口縁部: 3条平行沈線文 内面: 良好
39-15	先生 窯	15.0	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ヘラミカキ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 暗褐色	口縁部: 3条平行沈線文 内面: 良好
39-16	先生 窯	18.0	外面: ヨコナ・ハケメ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mmの砂粒を含む 外周: 暗褐色 内底: 暗褐色	口縁部: 4条へラズリ沈線文 内面: 良好
39-17	先生 窯	16.2	外面: ヨコナ・ヘラケズリ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を僅かに含む 灰褐色	口縁部: 3条平行沈線文 内面: 良好
39-18	先生 窯	24.0	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ナデ・ヘラケズリ	砂礫層①	1~2mmの砂粒を含む 外周: 暗褐色 内底: 暗褐色	口縁部: 4条へラズリ平行沈線文 内面: 良好
39-19	先生 窯	16.0	外面: ナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 暗褐色 内底: 暗褐色	口縁部: 5条平行沈線文 内面: で4回になってる
39-20	先生 窯	18.8	外面: ヨコナ・ヘラケズリ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1~2mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色-暗褐色	口縁部: 4条平行沈線文 内面: 良好
39-21	先生 窯	16.6	外面: ヨコナ・ヨコナキ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	微細粒を含む 外周: 淡褐色 内底: 黑褐色	輪部: 5条平行沈線文 内面: 良好
40-01	先生 窯	16.2	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: ヨコナ・ヨコナキ・ヘラケズリ	砂礫層①	2mm以下の砂粒を多く含む 外周: 淡褐色 内底: 黑褐色	輪部: 5条平行沈線文 内面: 良好
40-02	先生 窯	23.8	外面: ヨコナ・ハラケズリ 内面: ヨコナ・ナデ・ヘラケズリ・指接痕	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 良好	口縁部: 5条平行沈線文 内面: 良好
40-03	先生 窯	13.8	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を含む 外周: 黑褐色 内底: 黑褐色	輪部: 5条平行沈線文 内面: 黒色の付着物あり
40-04	先生 窯	27.0	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mmの砂粒を含む 外周: 黄白色 内底: 暗褐色	口縁部: 5条平行沈線文 内面: 良好
40-05	先生 窯	13.6	外面: ヨコナ・ナデ 内面: ヨコナ・ヨコナキ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mmの砂粒を多く含む 外周: 黑褐色 内底: 黑褐色	口縁部: 4条の平行沈線文 内面: 良好
40-06	先生 窯	20.5	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mmの砂粒を含む 外周: 淡褐色-灰褐色	口縁部: 5条へラズリ平行沈線文 内面: 良好
40-07	先生 窯	21.0	外面: ヨコナ・ナデ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 黑褐色 内底: 黑褐色	口縁部: 4条へラズリ平行沈線文 内面: 良好
40-08	先生 窯	16.4	外面: 口縁部ヨコナ・ナデ・ハラケメ 内面: ヨコナ・ヘラミカキ・ヘラケズリ	砂礫層①	1~2mmの砂粒をやや含む 黒褐色	口縁部: 16条へラズリ平行沈線文 内面: 良好
40-09	先生 窯	12.8	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 淡褐色 内底: 淡褐色-底部色: 淡褐色	口縁部: 4条平行沈線文 内面: 良好
40-10	先生 窯	12.2	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を多く含む 外周: 黄白色	口縁部: 5条平行沈線文 内面: 良好
40-11	先生 窯	16.4	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ナデ・ヘラケズリ	砂礫層①	1mm以下の砂粒を含む 外周: 暗褐色 内底: 黑褐色	口縁部: 6条平行沈線文 内面: 良好
40-12	先生 窯	14.0	外面: ヨコナ 内面: ヨコナ・ヘラミカキ・ヘラケズリ	砂礫層①	2mm以下の砂粒を少し含む 外周: 黑褐色 内底: 黑褐色	口縁部: 6条平行沈線文 内面: 良好

標名番号	種類	法量(cm)		形態・手法の特徴	出土場所	胎土・色調・焼成	備考
		口径	底径				
40-13	弥生 縫合	19.4		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ	砂礫層1	1~2mmの砂粒を含む 漆灰色 良好	口縁部:7条平行沈綱文
40-14	弥生 縫合	31.4		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ	砂礫層1	1mm以下の白色砂粒を多く含む 外面:白褐色 内面:漆灰色 良好	口縁部:12条平行沈綱文
40-15	弥生 縫合	15.0		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ	砂礫層1	1~2mmの砂粒を含む 外面:基盤色 内面:漆灰色 良好	口縁部:17条平行沈綱文 頸部:平行沈綱 文面:すす付箋
40-16	弥生 縫合	15.6		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色 良好	胸部:10条平行沈綱文
40-17	弥生 縫合	17.0		外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ? ヘラケズリ	砂礫層1	微砂粒を含む 黄白色 良好	
40-18	弥生 縫合	15.2		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を含む 漆灰色 良好	外面:黒色付箋物有り
41-01	弥生 縫合	24.8		外面:ヨコナデ・ヘラカギ 内面:ヨコナデ・ハケメ後ヘラカギ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を含む 外面:漆灰色 漆褐色 内面:漆灰色 漆褐色 良好	口縁部:3条平行沈綱文、斜目文
41-02	弥生 縫合	16.4		内・外面:ヨコナデ	砂礫層1	0mmの砂粒を含む 黒灰茶色 良好	口縁部:3条平行沈綱文
41-03	弥生 縫合?	13.2		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ハケメ	砂礫層1	1mmの砂粒を含む 外面:灰茶色 内面:漆灰色~漆褐色 漆褐色 良好	胸部:73条平行沈綱文
41-04	弥生 縫合?	20.4		外面:ヨコナデ・ヘラカギ 内面:ヨコナデ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	口縁部:10条平行沈綱文
41-05	弥生 縫合?	23.4		外面:ヘラカギ(一帯ハケ)、ヨコナデ 内面:ヘラカギ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を含む 灰褐色 良好	
41-06	弥生 縫合?	19.4		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ヘラカギ・ハケズリ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	口縁部:11条の平行沈綱文、 円形浮文
41-07	弥生 縫合?			外面:ヘラカギ 内面:ヘラカギ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を少し含む 灰褐色 良好	扣土質?
41-08	弥生 縫合?	5.9		外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ナデ	砂礫層1	1~2mm以下の砂粒を多く含む 漆灰色~漆色(一部明茶色) 良好	脚付箋:13条の沈綱
41-09	弥生 縫合	8.4		外面:ハカギ・ナデ 内面:ヘラカギ、ナデ	砂礫層1	2mm以下の白い砂粒を含む 外面:漆灰色~暗褐色 内面:暗褐色 良好	
41-10	弥生 縫合	8.8		外面:ヘラカギ 内面:ナデ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:漆灰色~暗褐色 内面:暗褐色 良好	
41-11	弥生 縫合	11.0		外面:ヘラカギ、ナデ 内面:ナデ	砂礫層1	微砂粒を含む 外面:灰褐色 内面:漆褐色 良好	
41-12	弥生 縫合	9.0		外面:ヘラカギ、ナデ 内面:ナデ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 漆灰色~暗褐色 良好	
41-13	弥生 縫合	5.8		内・外面:ナデ	砂礫層1	1~2mmの砂粒を含む 漆灰色~暗褐色 良好	
41-14	弥生 縫合	7.2		外面:ヘラカギ、ナデ 内面:ナデ	砂礫層1	1mmの砂粒を含む 外面:漆灰色~暗褐色 内面:漆褐色~暗褐色 良好	
41-15	弥生 縫合	5.8		外面:ヘラカギ、ナデ 内面:ナデ、指鉗痕	砂礫層1	微砂粒を含む 外面:漆褐色 内面:漆褐色 良好	
41-16	弥生 縫合	5.2		外面:ヘラカギ 内面:ナデ(指鉗痕压)	砂礫層1	微砂粒を含む 外面:漆褐色 内面:漆褐色 良好	
41-17	弥生 縫合	5.3		外面:ヘラカギ、ナデ 内面:ナデ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:漆褐色~暗褐色 内面:漆褐色~暗褐色 良好	
41-18	弥生 縫合	8.6		外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヘラケズリ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:漆褐色~暗褐色 内面:漆褐色~暗褐色 良好	
41-19	弥生 縫合	6.2		外面:ヘラカギ 内面:ヘラカギ・ナデ	砂礫層1	微砂粒を含む 外面:灰褐色 内面:漆褐色 良好	外面上にすす付箋
41-20	弥生 縫合	5.6		外面:ヘラカギ 内面:ヘラカギ・ナデ(指鉗痕压)	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 漆褐色~暗褐色 良好	
41-21	土師 甕	23.5		内・外面:ヨコナデ	砂礫層1	微砂粒を多く含む 漆灰褐色 良好	
41-22	土師 甕	14.8		内・外面:ヨコナデ	砂礫層1	微砂粒を含む 外面:漆素色 内面:漆褐色 良好	
41-23	土師 甕	20.8		外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:漆 内面:(無鉗痕) 漆褐色 良好	
41-24	土師 甕	24.6		外面:不明 内面:ナデ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:漆 内面:漆褐色 良好	
41-25	土師 甕	22.2		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ヘラケズリ	砂礫層1	1mm以下の砂粒を多く含む 黄白色	豊形器台、脚部
42-01	縄文 活鉢			内・外面:条板	砂礫層2	2mm以上の砂粒を多く含む 漆褐色 暗褐色 良好	斜めの隆起、西川津式
42-02	縄文 活鉢?			内・外面:条板	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 黑褐色 良好	長山式
42-03	縄文 活鉢			外面:ナデ 具輪各赤痕 内面:具輪各痕	砂礫層2	1mm以上の砂粒を含む 漆灰~暗褐色 良好	突蒂文土器、具輪腹縁による刻目
42-04	縄文 活鉢			外面:ナデ 具輪各痕 内面:具輪各痕	砂礫層2	1mm以上の砂粒を含む 灰褐色~ 暗褐色 良好	突蒂文土器、刻目文
42-05	弥生 縫合			内・外面:ハケメ後ナデ	砂礫層2	2mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	ヘラ縁沈綱、斜行文
42-06	弥生 縫合	27.6		内・外面:ナデ	砂礫層2	3mm以下の砂粒を多く含む 灰褐色 良好	頭部に沈紋 胡蘿蔔形土器?
42-07	弥生 縫合	15.0		外面:ナデ・ハケメ 内面:ナデ	砂礫層2	1mm以上の砂粒を僅かに含む 漆灰色 良好	頭部に沈紋 胡蘿蔔形土器?
42-08	弥生 縫合	15.8		外面:ナデ・ハケメ 内面:ナデ(指鉗痕压)	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 外面:漆 内面:漆褐色 良好	外面上にすす付箋
42-09	弥生 縫合	32.6		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ナデ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 漆褐色 暗褐色 良好	頭部:指鉗痕直串帶
42-10	弥生 縫合	20.0		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヘラカギ?	砂礫層2	1mm以下の砂粒を少し含む 漆白色 良好	
42-11	弥生 縫合	23.6		外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ・ナデ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 漆灰色 良好	口縁部:2条平行沈綱文
42-12	弥生 縫合	15.2		内・外面:ヨコナデ・ナデ?	砂礫層2	1mm以下の砂粒を含む 漆灰色 良好	頭部:6条のクラン指割文

辨認番号	種類 器種	法量(cm) 口径 底径 高さ	形態・手法の特徴	出土場所	胎土・色調・焼成		備考
					内面	外面	
42-13	弥生 鉢	24.8	外面:ナデ 内面:ナデ、ハケメ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:暗灰色 良好	口縁部:クシ痕(子文) 肩部:削目(捺文)、クシ痕(刻文)	
43-01	弥生 鉢	18.2	外面:ヨコナデ ハケメ 内面:ヨコナデ、ハラケズリ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 良好	口縁部:4条平行沈線文	
43-02	弥生 鉢	16.4	外面:ヨコナデ ハラケズリ	砂礫層2	2mm以下の砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 良好	口縁部:5条平行沈線文	
43-03	弥生 鉢	11.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ヘラガキ、ハラケズリ	砂礫層2	1mm程度の砂粒を多少含む 内面:赤茶色 良好	6条平行沈線文、円孔 平行沈線文、刻文(子文)(母文)(母文)	
43-04	弥生 鉢	13.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ナデ ハラケズリ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を含む 内面:赤茶色 良好		
43-05	弥生 鉢	8.1	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	砂礫層2	無砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 良好	輪郭部:斜文(牛糞竹筒) 内面:淡灰褐色	
43-06	弥生 底盤	5.5	外面:風化したやかまろ 内面:ナデ、捺痕(匠印)	砂礫層2	1~2mmの白色砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 良好		
43-07	弥生 鉢	6.5	外面:ヘラガキ、ナデ 内面:ヘラガキ、ナデ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:暗灰色 良好	すす付箋 底部:成段浅丸孔 窓か?	
43-08	弥生 底盤	6.8	外面:ヘラガキ 内面:ナデ	砂礫層2	2mmの大粒砂粒を含む 内面:白灰色~灰褐色 良好		
43-09	弥生 底盤	11.8	外面:ヘラガキ、ハマメ(一部ハラケズリ) 内面:ナデ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 外面:淡灰褐色 内面:暗緑灰褐色 良好		
43-10	弥生 底盤	5.6	外面:ヘラガキ、ヘラガキナデ 内面:ナデ、部分的ハケメ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 外面:淡灰褐色 良好		
43-11	弥生 底盤	7.6	外面:ナデ(向)にヘラガキ、ナデ 内面:ナデ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 外面:淡灰褐色 良好		
43-12	弥生 底盤	5.1	外面:ナデ(向)にヘラガキ、ナデ 内面:ナデ(向)にヘラガキ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:淡灰褐色 良好		
43-13	弥生 底盤	6.8	外面:ヘラガキ、ナデ 内面:ヘラガキ、ナデ	砂礫層2	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:暗灰色 良好		
44-01	縄文 鉢		内・外面:条痕	砂礫層3		長山式か?	
44-02	縄文 底盤		外面:風化の為不明 内面:条痕	砂礫層3	2mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	口縁部:肥厚、且び復縫による 縫合部、内面:条痕	
44-03	縄文 底盤		内・外面:条痕	砂礫層3	2mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	二又の工字と2枚貝による刺突、 西川津式	
44-04	縄文 底盤		内・外面:条痕	砂礫層3	2mm以下の砂粒を少し含む 内面:条痕	西川津の文献部分か?	
44-05	縄文 底盤		外面:羽状縞 内面:条痕	砂礫層4	1mmの大粒砂粒を含む 内面:暗褐色~黒褐色 良好	胎土に繊維を含む、要模式	
44-06	縄文 底盤?		内・外面:条痕?	砂礫層4	3mm以下の砂粒を少し含む 内面:条痕	要模(新)	
44-07	縄文 底盤		外面:条痕 内面:ナデ	砂礫層5	3mm以下の砂粒を少し含む 内面:条痕	貼付安棒、2枚貝による刺突、 長山式	
44-08	縄文 底盤		内・外面:条痕	砂礫層5	その他の砂粒を含む 内面:条痕	要模(新)	
45-01	縄文 底盤		外面:縄文 内面:条痕	砂礫層5	2mmの大粒砂粒を含む 内面:暗褐色~黒褐色 良好	要模式	
45-02	縄文 底盤		外面:条痕 内面:条痕	砂礫層5	4mmの大粒砂粒を含む 内面:条痕	波状口縫、輪廻消文、中津式	
45-03	縄文 底盤		外面:ナデ、条痕 内面:条痕	砂礫層5	1mmの大粒砂粒を含む 内面:条痕	突堤文土器、割目文	
45-04	縄文 底盤		外面:ナデ、条痕 内面:条痕	砂礫層5	1mmの大粒砂粒を含む 内面:条痕	突堤文土器、割目文	
45-05	弥生 食器		内・外面:ヘラミガキ	砂礫層5	1mmの大粒砂粒を含む 内面:暗褐色~黒褐色 良好	斜行文、沈線文 利突文	
45-06	弥生 食器	21.8	内・外面:ナデ	砂礫層5	1~2mmの砂粒を多く含む 内面:条痕		
45-07	弥生 食器	21.0	内・外面:ナデ?	砂礫層5	1mmの大粒砂粒を含む 内面:条痕	頭部に凹痕	
45-08	弥生 食器	11.8	外面:ヨコナデ 内面:ナデ(向)にヨコナデ?	砂礫層5	1mm以下の砂粒をやや多く含む 内面:暗褐色 良好	口縁部:2条平行沈線文	
45-09	弥生 食器		内・外面:ヨコナデ	砂礫層5	その他の砂粒を含む 内面:条痕	4条の凹縫、クシによる割目文	
45-10	弥生 鉢	25.6	外面:ヨコナデ ナデ? (捺痕(匠印)) 内面:ナデ、捺痕(匠印)	砂礫層5	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	斜行文、沈線文 利突文	
45-11	弥生 鉢	15.8	外面:ヨコナデ 内面:縦方向ハケメ	砂礫層5	1mm以下の砂粒を含む 内面:条痕	口縁部:斜目文	
45-12	弥生 鉢	17.0	外面:ナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	砂礫層5	1mm以下の砂粒をやや含む 内面:条痕	口縁部:2条平行沈線文	
45-13	弥生 鉢	18.6	内・外面:ヨコナデ	砂礫層5	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	口縁部:1条平行沈線文 内面:条痕	
45-14	弥生 鉢	17.0	内・外面:ヨコナデ	砂礫層5	1mm以下の砂粒を含む 内面:条痕	口縁部:5条平行沈線文	
45-15	弥生 食器?	25.0	外面:ナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	砂礫層5	1mm以下の砂粒を少し含む 内面:条痕	口縁部:平行沈線文 頭部:捺痕(匠印)	
45-16	弥生 食器	12.0	内・外面:ナデ	砂礫層5	1~2mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	口縁部:3条平行沈線文	
45-17	弥生 食器	16.9	内・外面:ヨコナデ	砂礫層5	1~2mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	口縁部:5条平行沈線文 内面:条痕	
45-18	弥生 食器	21.2	外面:ナデ、ハラケ後ヘラミガキ 内面:ヨコナデ、ヘラガキ	砂礫層5	1mm以下の砂粒を含む 内面:条痕	口縁部:ヘラ跡刻文	
46-01	弥生 食器	22.0	外面:ナデ	砂礫層5	1~2mmの砂粒を含む 内面:条痕	口縁部:3条平行沈線文 内面:条痕	
46-02	弥生 食器	15.0	外面:ヨコナデ ナデ(ハラケメ)	砂礫層5	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	すす付箋 口縁部:3条平行沈線文 (一端削り切れた)	
46-03	弥生 食器	22.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	砂礫層5	1~2mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	口縁部:3条平行沈線文 内面:条痕	
46-04	弥生 食器	11.6	外面:ヨコナデ(向)にヨコナデ 内面:ヘラガキ、ヘラケズリ	砂礫層5	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	すす付箋 1条平行沈線文	
46-05	弥生 食器	22.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラスリ	砂礫層5	1mm以下の砂粒を多く含む 内面:条痕	口縁部:4条平行沈線文 外面:すす付箋	

調査番号	種類 基盤	法蓋 (cm) 口径 底盤	手法の特徴	出土場所	胎土・色調・焼成		備 考
					器部	器名	
46-05	強生 窓	18.2	外面部:コナデ 内面部:ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 内面部:淡黃褐色～暗紅褐色 良好		口縁部:3条平行沈線文 全体:4条平行付帯
45-07	強生 窓	15.0	外面部:コナデ 内面部:ハケメ後ナデ、ヘラケズリ	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 内面部:淡黃褐色～暗紅褐色 良好		口縫部:4条平行沈線文 全体:5条平行付帯
46-08	強生 窓	17.2	外面部:コナデ、ハケメ 内面部:コナデ、ヘラケズリ	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 内面部:淡黃褐色 良好		口縫部:4条平行沈線文 全体:5条平行付帯
46-09	強生 窓	16.4	外面部:コナデ、ナデ 内面部:コナデ、ヘラケズリ	その他	1~2mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 (白線が走っている) 良好		口縫部:4条平行沈線文 網部:刺突文
46-10	強生 窓	19.6	外面部:コナデ 内面部:ナデ、ヘラケズリ	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 内面部:淡黃褐色 良好		10条の平行沈線文
46-11	強生 窓	16.4	外面部:コナデ、内面部:ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 内面部:淡黃褐色 良好		
46-12	強生 窓	13.4	外面部:コナデ 他化成のため不明 内面部:ナデ、ヘラケズリ、一部へラミガキ	その他	2~3mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 良好		脚部:7条平行沈線文
46-13	強生 底盤	9.2	外面部:ナデ 内面部:ナデ(腰注痕)	その他	1~3mmの砂粒を含む 外面部:淡白色 内面部:淡黃褐色 良好		
46-14	強生 底盤	7.6	外面部:ヘラミガキ 内面部:ナデ?	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡黑色 内面部:淡褐色 良好		
46-15	強生 底盤	6.8	外面部:ヘラミガキ、ナデ 内面部:ナデ?	その他	2~4mmの砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 良好		
46-16	強生 底盤	4.3	外面部:ナデ 内面部:黑化のため不明	その他	1~2mmの砂粒を多く含む 外面部:淡褐色 内面部:灰褐色 良好		焼成後穿孔、軽用鋤耕車か?
45-17	強生 底盤	2.4	外面部:ナデ、ハケメ 内面部:ヘラケズリ	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色～暗褐色 内面部:淡褐色 良好		
45-18	強生 底盤	6.4	外面部:ヘラミガキ 内面部:ナデ、ヘラケズリ	その他	2mmの大砂粒を含む 外面部:赤褐色～黒褐色 内面部:暗褐色 良好		
46-19	強生 底盤	3.6	外面部:コナデ 内面部:ヘラケズリ	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色～黒褐色 内面部:暗褐色 良好		ミニチュア工場?要か?
46-20	強生 底盤	5.4	外面部:ナデ? 開窓部:ヘラミガキ、腰注痕 内面部:ヘラケズリ、ナデ?	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色～暗褐色 内面部:淡褐色 良好		
46-21	強生 底盤	9.8	外面部:強引ナデ、ヘラケズリ 内面部:三筋ナデ?	その他	1mm以下の砂粒を多く含む 外面部:淡褐色～暗褐色 内面部:淡褐色 良好		

表8 西川津遺跡V区出土石製品・土製品觀察表

種別	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	備考
磨石	淡灰色砂礫層	9.7	8.6	589.9	
石鍤	砂礫層1	7.0	4.2	36.6	
分銅形土製品	砂礫層1	3.5	4.7	13.2	刺突文、ヘラ描沈線

表9 西川津遺跡VI区木製品観察表

拂図番号	種類	法量(cm)			出土場所	備考
		長さ	最大径	厚さ		
48-01	高壺			1.6	砂疊層2	
48-02	男模状木製品?	7.1	2.6	2.0		
48-03	人形代	7.7	2.2	0.5		
48-04	不明	20.5	10.0	3.2	砂疊層1	
48-05	鶴	30.9	18.6	1.9		
48-06	柄?	28.5	3.9	2.4		
48-07	不明	28.2	3.7	3.5	砂疊層1	
48-08	不明	33.7	6.0	2.4		
48-09	不明	15.4	22.9		砂疊層1	
48-10	不明	15.2	25.0	2.0		
49-01	杭	93.1	7.3		杭列状遺構	
49-02	杭	69.9	6.3		杭列状遺構	
49-03	杭	80.2	13.1		杭列状遺構	
49-04	杭	63.0	6.8		杭列状遺構	
49-05	杭	84.5	8.6		杭列状遺構	
49-06	杭	82.4	12.2		杭列状遺構	
49-07	杭	81.1	7.2		杭列状遺構	
50-01	杭	78.3	7.2		杭列状遺構	
50-02	杭	87.8	7.1		杭列状遺構	
50-03	杭	89.5	8.1		杭列状遺構	
50-04	杭	97.0	14.2		杭列状遺構	
50-05	杭	95.0	5.3		杭列状遺構	
50-06	杭	41.9	4.0	2.2	杭列状遺構	
50-07	杭	36.0	4.0	2.3	杭列状遺構	
51-01	杭	44.0	2.6	2.4	杭列状遺構	
51-02	杭	41.9	3.3		杭列状遺構	
51-03	杭	46.8	5.5		杭列状遺構	
51-04	杭	45.5	4.5		杭列状遺構	
51-05	杭	68.5	9.2		杭列状遺構	
51-06	杭	92.0	7.0		杭列状遺構	
51-07	杭	75.8	6.6		杭列状遺構	
51-08	杭	66.6	7.5		杭列状遺構	
52-01	梯子?	131.2	14.8			

第5章 平成13年度西川津遺跡発掘調査に係る 自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株）

はじめに

西川津遺跡は島根県東部、松江市西川津町地内に立地する遺跡である。西川津遺跡では、朝酌川改修工事に伴い昭和47年以降、断続的に発掘調査が行われてきた。平成13年度調査区は、一連の発掘調査の最上流の海崎地区に位置し、朝酌川と支流の持田川合流点に近接する。また今回の発掘調査が一連の発掘調査の最後となる。

西川津遺跡では、発掘調査の初期から継続的に花粉分析が行われており（大西・渡辺、1987ほか）、下流に位置する原の前遺跡、タテヨウ遺跡、近隣の島根大学構内遺跡などの花粉分析結果を踏まえた古植生が論じられてきた（たとえば、渡辺、2001）。前述の様に本調査区は一連の朝酌川改修工事の最上流部に位置し、持田川との合流点に近いことから、従来にない堆積相を示していた（島根県教育委員会・島根県土木部河川課（2003））。当初、層相対比から上部の泥層がK-Ah降灰層と考えられたが、今回の調査により下部の砂礫層に挟まれる泥層からK-Ah起源と考えられる火山ガラスが発見され、¹⁴C年代測定、花粉組成からもこれを指示する結果を得た。

本報告では、花粉分析、珪藻分析および¹⁴C年代測定を基に、K-Ah火山灰降灰以降数百年間の遺跡周辺の古植生、堆積環境などの古環境を推定した。

また本報告は、島根県教育厅埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化したものである。

分析試料について

花粉分析試料は島根県教育厅埋蔵文化財調査センターと協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。図1に試料採取地点を示す。調査トレンチ西壁で、すべての分析用試料が採取されている。

分析方法

花粉分析処理、珪藻分析処理は、渡辺（1995a, 1995b）に従って行った。プレバラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1,000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。珪藻分析では原則的検出総数が200個体以上になるまで同定を行った。また、¹⁴C年代はAMS法を用い、株式会社加速器分析研究所に委託して測定した。

分析結果

花粉分析結果を図2に、珪藻分析結果を図3、4に、¹⁴C年代測定結果を表1に示す。

図2の花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また、花粉ダイアグラム右側に「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。



図1 試料採取地点

総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

図3の珪藻ダイアグラムでは検出総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、白抜きスペクトルで示している。

図4の珪藻総合ダイアグラムで表した5つのグラフの内、左端の「生息域別グラフ」では同定した全ての種類を対象にそれぞれの要因（生息域）毎に百分率で表した。そのほかの4つのグラフでは、淡水種についてそれぞれの要因毎に百分率を算出し、累積百分率で示してある。

花粉分帶

西川津遺跡での花粉層序は渡辺（1999）により設定され、渡辺（2001）により修正が加えられ、10花粉帯が設定されている。また、10花粉帯はさらにいくつかの亜帯に細分されている。今回の分析層準は¹⁴C年代値から、既設定10花粉帯のVI、VII帯に相当する時期の堆積物である。

以下では花粉分帶の特徴を基に地域花粉帯を設定するが、同時に西川津遺跡での既知の花粉帯との比較を行い地域花粉帯の名称とした。以下に各花粉帯の特徴を示す。

また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

① VII带（試料No 15～5）

アカガシ亜属が卓越傾向にあり、出現率の低い下部の試料No 15、14でもコナラ亜属より低率になることはない。アカガシ亜属が卓越傾向にあることから、試料No 15～5はVII带に対比される。

試料No 15、14では、マツ属（複維管束亜属）が最も高い出現率を占め、モミ属、スギ属、アカガシ亜属、コナラ属、ムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属などが他の種類に比べ高い出現率を示す。一方、アカガシ亜属の出現率がコナラ亜属の出現率を下回らないこと、マツ属（複維管束亜属）が卓越する。また、試料No 14層準で得られた 6660 ± 50 yr B.P. の年代が得られ、試料No 15層準で火山ガラスが濃縮していることは、V区-AのVII带 b亜帯中（試料No 1-28と28の間）にK-Ah火山灰層を挟み、c亜帯（試料No 1-34層準）で 6910 ± 80 yr B.P. の年代が得られることと整合的である。これらのことから、試料No 15、14はb亜帯に対比される。

マツ属（複維管束亜属）の卓越傾向は大西ほか（1989）の区分 i, jでも認められるが、その後の分析では顕著に現れることが無かった。渡辺（1999）ほかでは、海崎地区でのマツ属（複維管束亜属）卓越（大西、1989）を局地的な現象であるとして対応してきたが、今回海先地区に隣接する調査区でマツ属（複維管束亜属）の卓越傾向が認められたことから、マツ属（複維管束亜属）の卓越傾向が局地的の植生を示している可能性が一層高まった。

試料No 13～5では、アカガシ亜属が卓越するほか、クマシデ属-アサダ属、ムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属が他の種類に比べ高い出現率を示す。花粉組成の特徴および下位層準がb亜帯に対比されることから、試料No 13～5はa亜帯に対比される。

② VI带 b亜帯（試料No 4～1）

アカガシ亜属がVII帶に比べ減少するが、他の種類に比べ依然高い出現率を示す。一方コナラ属、ムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属は増加し、他の種類よりやや高率を示す。また、シノキ属-マテバシイ属もやや増加する。また草本花粉の割合が高くなり、検出種類数も多くなる。試料No 13～5から、試料No 4～1への花粉組成の変化はV区-Aで得られたVII带 a亜帯からVI带 b亜帯への花粉組成の変化（渡辺、2001）と類似する。また試料No 7と6の間（VII带 a亜帯上部）で得られた¹⁴C年代（ 6090 ± 40 yr B.P.）も、V区-A試料No 1-6と5の間（VI带 b亜帯下部）で得られた¹⁴C年代（ 6020 ± 100 yr B.P.）と整合的である。これらのことから、試料No 4～1はVI带 b亜帯に対比される。

表1 ¹⁴C年代測定結果

試料 No	整理番号	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C (yrBP)	歴年代 ^a (cal y.)	測定番号 (IAAA-)
1	NK01-01	$6,130 \pm 40$	-27.47	$6,090 \pm 40$	BC5210～5170 BC5140～5120 BC5080～4900 BC4890～4840	10544
2	NK01-02	$6,140 \pm 40$	-28.46	$6,080 \pm 40$	BC5210～5180 BC5070～4840	10545
3	NK01-03	$6,280 \pm 40$	-31.87	$6,160 \pm 40$	BC5260～4950	10546
4	NK01-04	$6,770 \pm 40$	-31.11	$6,660 \pm 50$	BC5670～5480	10547

^a: 2 sigma, 95% probability

③ 各花粉帯の年代

VII带 b 亜帯下位の試料No.15では火山ガラスが混集しており、試料No.14層準では 6660 ± 50 yr B.P. の¹⁴C年代が得られている。また従来の結果（例えば渡辺、1999）では、K-Ah 火山灰層がVII帶 b 亜帯に認められている。これらのことからVII帶 b 亜帯はK-Ah 火山灰層（6300 yr B.P.頃）前後の植生を表していると考えられる。

VII帶 a 亜帯では、下位より 6160 ± 40 yr B.P.、 6080 ± 40 yr B.P.、 6090 ± 40 yr B.P. の¹⁴C年代が得られている。またV区-Aでは上位のVI帶 b 亜帯で 6020 ± 50 yr B.P. の¹⁴C年代が得られている（渡辺、1999）。これらのことから、VII帶 a 亜帯は 6100 yr B.P.頃の植生を表していると考えられる。

今回はVI帶 b 亜帯では¹⁴C年代が得られていないが、前述のように渡辺（1999）において 6020 ± 50 yr B.P. の¹⁴C年代が得られている。このことから、VI帶 b 亜帯は 6000 yr B.P.頃の植生を表していると考えられる。

珪藻分帯

珪藻分析結果をもとに地域珪藻帯を設定し、珪藻組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載した。また試料No.も下位から上位に向かって記した。

① D-VI帯（試料No.15, 14）

珪藻化石が含まれていなかった。

② D-V帯（試料No.13、12）

試料No.12では汽水種の *Thalassiosira bramaputrae* が卓越傾向にある。淡水種では両試料共に、*Cymbella tumida*などのアルカリ・止水・底生種が特徴的に出現する。

③ D-IV帯（試料No.11～8）

淡水種が60～80%を占める。汽水種では *Achnanthes brevipes* が卓越し、淡水種では底生の *Cymbella* 属や *Pinnularia* 属が卓越する。

④ D-III帯（試料No.7, 6）

淡水種の割合が低く、汽水種が卓越する。

⑤ D-II帯（試料No.5, 4）

汽水種や、海～汽水種が高率を示す。

⑥ D-I帯（試料No.3～1）

淡水種が卓越する。特に、底生の *Pinnularia* 属が卓越する。

古環境復元

① VII帶 b 亜帯期（6300 yr B.P.頃）の古環境

従来の調査でのK-Ah 火山灰層の分布は、中村（1999）、中村ほか（2001）で示されており、ほとんどの地点で泥質堆積物中に狹在されていた。今回の調査地点は西川津遺跡の最上流に位置し持田川との合流部に近いことから、K-Ah 火山灰層が河川堆積物中に狹在していたと考えられる。珪藻化石は検出されていないものの、古宍道渓奥の河口域で堆積したと考えられる。

従来の花粉分析結果との比較より、マツ属（複維管束葉属）は局地的な分布をしていた可能性

が高く、おそらく遺跡南方の丘陵にはアカマツ（あるいはクロマツ）が局地的に分布していたと考えられる。遺跡北・東方に広がる沖積地にはムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属などのニレ科を主体とする自然堤防林が分布していたと考えられる。また、カシ類でも先駆的な種であるアラカシが、自然堤防林中に混淆していた可能性もある。北山山地にかけてはトチノキやサワグルミを要素とする溪畔林が分布していたと考えられる。また、周辺の丘陵部にはカシ類、シイノキ類を主要要素とする照葉樹林が分布したと考えられる。遺跡近辺では現在でも照葉樹林中にモミの混淆している様子が観察されることから、当時もモミやスギなどの針葉樹が混淆していた可能性がある。コナラ類についてはミズナラ、カシワなどの冷温帯林要素、コナラ、クヌギ、アベマキなどの暖温帯の遷移林要素である可能性がある。繩文海進最盛期直前の時期であること、北山山地の標高がせいぜい 500 m 程度であることなどから、冷温帯林が北山山地に残存していた可能性は低く、ここでのコナラ類は、暖温帯の遷移林であるコナラ、クヌギ、アベマキなどに由来すると考えられる。

② V带 a 亜帯期（6100 yr B.P.頃）の古環境

層相が泥がちになり、珪藻化石も検出されるようになる。珪藻分析結果では上位ほど汽水種が高率を示し、この時期の終わりに向け海水準が上昇したことが明らかである。海水準の上昇に伴って古宍道湾はさらに拡大し、現在調査地北部に広がる沖積平野内に至ったと考えられる。この結果朝霧川の河口はさらに東へ、持田川の河口はさらに北東へ後退したと考えられる。

気温の上昇に伴い、コナラ類を主体とする遷移林はカシ類、シイノキ類を主要要素とする照葉樹林に変わり、照葉樹林の分布域は北山山地全体に至るまで拡大していったと考えられる。一方で針葉樹の混淆も丘陵部では希になり、山地部で認められる程度になっていったと考えられる。海水準の上昇に伴い沖積低地が狭まり、ニレ科の生育範囲は狭まったと考えられる。一方でトチノキやサワグルミを要素とする溪畔林が拡大した可能性がある。温暖化に伴う雨量の増加により、山地の荒廃が進んだ可能性もある。

④ VI带 b 亜帯期（6000 yr B.P.頃）の古環境

珪藻化石で淡水種が増加し、朝霧川、持田川の河口が再び調査地点に迫ったことが示唆される。呼応するように草本花粉の検出量が増加し、調査地近辺にイネ科、カヤツリグサ科の生育する湿原が広がっていったと考えられる。一方、河川沿いの微高地には、ニレ科の木々が自然堤防林を形成し、コナラ類を交える場所も認められるようになったと考えられる。

V带からVI带の間でアカガシ亜属花粉が減少するが、遺跡近隣での植生復活に伴う相対的なものであったと考えられる。

まとめ

西川津遺跡での花粉、珪藻分析の結果を踏まえ、遺跡近隣の古環境を考察した。特筆すべき点は以下の事柄である。

- ①西川津遺跡の地域花粉帶の内V带 b 亜帯からVI带 b 亜帯が確認できた。また、各花粉帶、花粉亜帶表示をおおよその時期が明らかになった。
- ②繩文時代早期末から前期にかけての海崎地区近辺の古環境が明らかになった。
- ③VI带 b 亜帯でマツ属（複雑管束亜属）花粉が卓越することから、従来推定されていた「海崎地区

でのアカマツ（あるいはクロマツ）の局地的な生育」がほほ明らかになった。

- ④VII带 b 亜帯でのコナラ亜属花粉を、コナラ、クヌギ、アベマキなどの暖温帯二次林要素に由来すると推定した。
 - ⑤VI带 b 亜帯でのアカガシ亜属花粉減少の原因を、遺跡近隣での植生復活に伴う相対的な現象であると推定した。
-

【引用文献】

- ・大西郁夫・渡辺正巳（1987）西川津遺跡（1983）の花粉分析、朝鶴川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区 I）、252-261、島根県教育委員会。
- ・大西郁夫・原田吉衛・渡辺正巳（1989）松江市、西川津遺跡の花粉分析、山陰地域研究（自然環境）、5, 45-54。
- ・大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帶と植生変化、地質学論集、39, 33-39。
- ・中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13,p.187-197。
- ・渡辺正巳（1995a）花粉分析法、考古資料分析法、84, 85. ニュー・サイエンス社。
- ・渡辺正巳（1995b）花粉分析法、考古資料分析法、86, 87. ニュー・サイエンス社。
- ・渡辺正巳（1999）西川津遺跡 96、97年度調査における花粉分析、朝鶴川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—西川津遺跡VI—、11, 321-328、島根県教育委員会・島根県土木部河川課。
- ・渡辺正巳（2001）西川津遺跡における花粉組成変遷と周辺地域の環境変遷、朝鶴川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—西川津遺跡Ⅴ—、13, 25-46、島根県教育委員会・島根県土木部河川課。

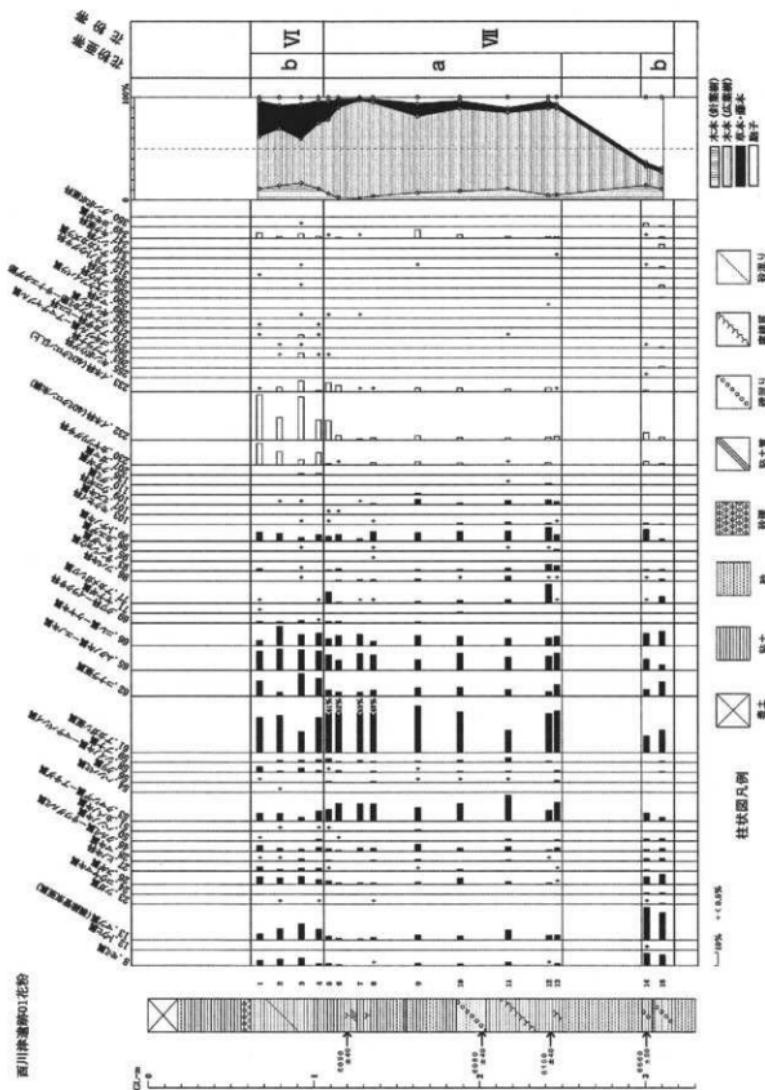


図2 花粉ダイアグラム

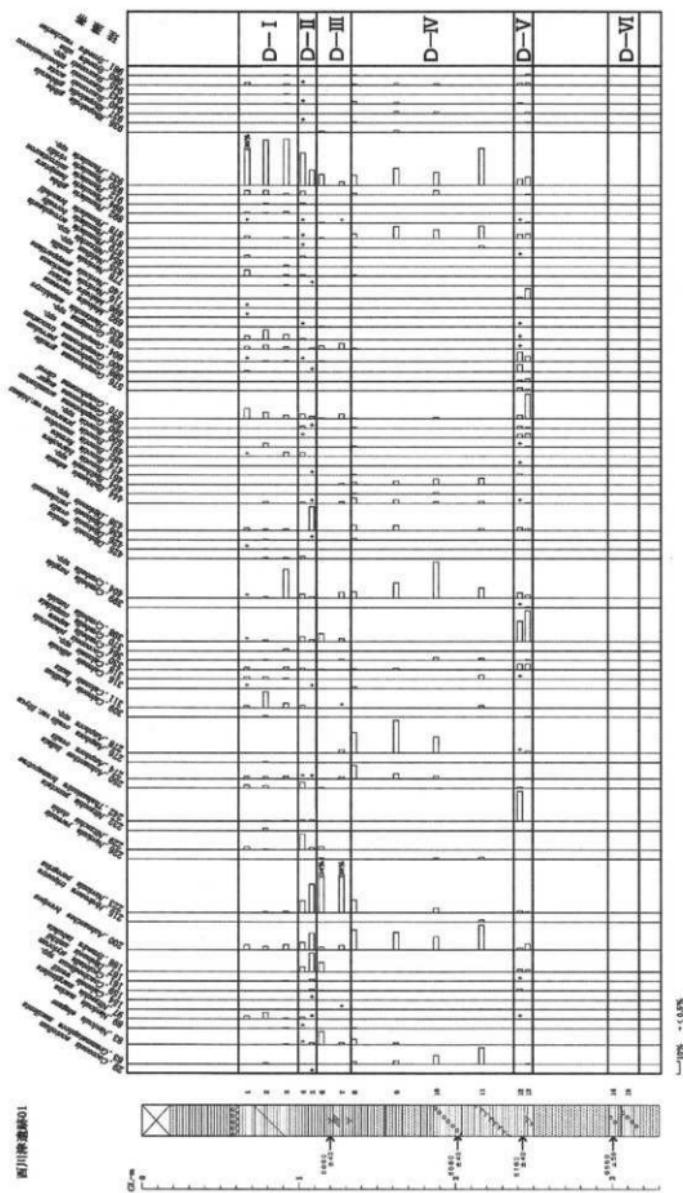


図3 珪藻ダイアグラム

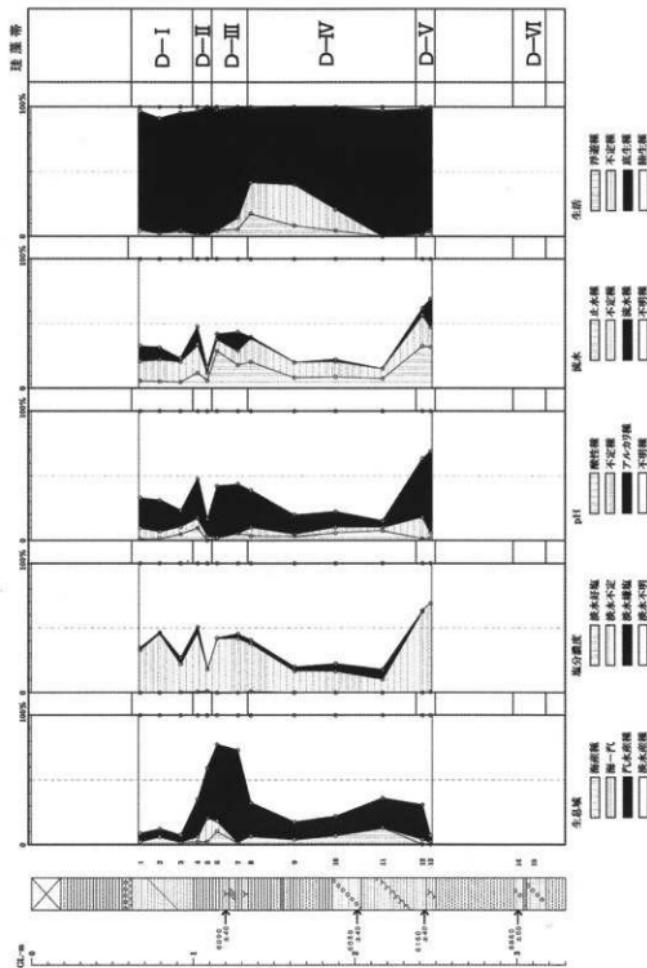


図4 珪藻総合ダイアグラム

第6章 小 結

今回の発掘調査は、1996（平成8）年に調査が実施されたⅢ区右岸の隣接地と、海崎橋の上流で西川津遺跡の北端に近いVI区について実施し、縄文時代早期末から近世まで6000年以上に及ぶ朝酌川の変遷の一端を窺うことができた。実質的な調査期間が5ヶ月あまりと短く調査対象面積も大きくなかったため、基本的には今回の調査成果は過去のそれを補強するにとどまるものである。

しかし、VI区で、宍道湖底の堆積物である宍道湖層¹⁾が存在しないことを確認したことは、当時の内川津遺跡の様相を考える上で重要な資料を提供することとなった。

1) Ⅲ区

今回の調査では、縄文時代から近世までの遺物を含む砂礫層を検出した。この砂礫層は1層で厚さは10cm～40cmと比較的薄いものであった。土器では、弥生土器が多数を占めるが、古代末から中世の土師器が比較的多く出土している。また、注目される遺物としては、陶磁器や錢貨、玉作の剥片が認められた。

遺物を包含する砂礫層の堆積年代については、1996（平成8）年の調査で下限を平安時代としている。今回はその南西に隣接する調査区を発掘したが、砂礫層出土遺物の下限は近世であった。遺物包含層の堆積時期については、前回の調査においても下流ほど新しくなる傾向があるとされている²⁾。また、Ⅲ区左岸の調査でも、この付近では南西側になるほど河道の時期が新しくなると想定されている³⁾ことから、過去の調査成果を追認したものといえよう。

なお、土層の最下層は宍道湖層となっており、この上面は標高-1.1～-1.6mで北（西）側ほど低くなっていた。この中にはアカホヤ火山灰が挟まれていた。この火山灰は調査区西壁のほぼ全面で検出されており、検出した高さは標高-1.8m～-1.9mである。

2) VI区

今回の調査は、過去の発掘調査を含めて西川津遺跡の最も北側（上流側）に調査区を設定して実施した。遺構としては、杭列状遺構を検出した。時期は、この遺構の上下に存在する砂礫層1・2の出土遺物から弥生時代後期～古墳時代と考えられる。この杭列の用途・性格については不明であるが、当時の人々の活動の所産であることは疑いない。

主要な遺物包含層は4層（砂礫層1～4）を確認し、縄文時代早期末から古墳時代までの遺物を検出した。このうち砂礫層1と2については、前者が縄文時代前期～古墳時代、後者が縄文時代前期～弥生時代と出土遺物の年代幅が広いが、砂礫層3・4については縄文時代早期末～前期初頭の遺物のみが出土している。この砂礫層3・4についても二次堆積である可能性は高いが、土器の年代観と堆積時期に大きな開きはなく⁴⁾、当該期の単純層と考え差し支えないであろう。ところで、西川津遺跡では隣接するV区を含め、ほとんどの調査区でアカホヤ火山灰を挟む宍道湖層が確認されることから、縄文時代早期末～前期には繩文海進の影響で内湾になっていたと考えられている。今回の調査区にこの宍道湖層が存在せず縄文時代早期末～前期初頭の砂礫層が存在するということは、少なくともその時期にVI区付近は内湾ではなく河口だったということを示す。また、砂礫層3・4の上にのる竪状堆積（第31回北壁の21層、西壁の12層）は縄文時代前期以降のある時期、

流れがきわめて緩やかな状態にあったことを示すものである。縄文海進による海面上界は前期初頭に停滞・小海退の時期があり、最高頂期は縄文時代中期初頭以降にあったとする報告⁵⁾があり、これとの関連も興味深い。

註

- 1) 烏根県教育委員会「原の前進跡」1995
- 2) 烏根県教育委員会「西川津遺跡」VI 1996
- 3) 烏根県教育委員会「西川津遺跡」VII 2000
- 4) 渡造正巳「平成13年度西川津遺跡発掘調査に係る自然科学分析」本書第5章所収
- 5) 烏根大学埋蔵文化財調査研究センター「烏根大学構内遺跡第1次調査」(備縄手地区1) 1997

付篇 西川津遺跡V-4-1区出土の杭状木製品について

V-4-1区調査区砂レキF層中から出土した杭状木製品については、都合により『西川津遺跡』に掲載できなかったので、紙面を借り報告したい。

出土状況

V-4-1砂レキ区F層中から出土しており、白状木製品（103図-1）の西側で加工痕のある先端を北西に向かって状態で出土した。水平ではなく、加工のない基部のレベルがやや高い状態であった。

杭状木製品の概要

杭状木製品は現存全長243.8cm、径は13.4cmである。基部側は破損のためか切り口は粗く、本体はほぼ全面にわたって、本来の樹皮を残している。

先端部は杭状に加工しているが、中心部から放射状円錐形に形を整えるのではなく、1/2面のみを手斧状の工具で削り取っている。手斧痕は5条確認でき、それぞれ基部は広く、先端ほど細くなっていく。手斧痕の最大幅は5.5mmほどで、長さは5.7~1.0cmほどである。加工痕全体の長さは30.3cmである。

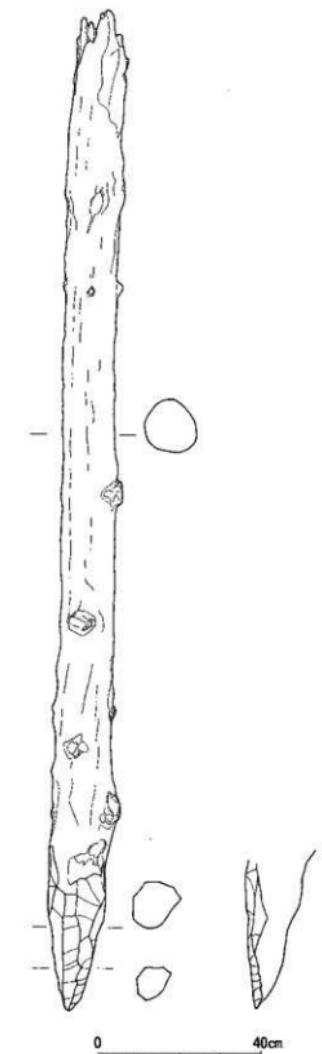
木製品の長さが長大であることから、建築部材や橋脚などの用途が考えられるが、表面には顯著な風化が見られないことから、未使用の可能性も残される。近隣では下流に所在する原の前遺跡で平安時代の橋脚が見つかっているが、全長438cmで先端は鉛筆状に丁寧な加工が行われたものである。

時期

杭状木製品が出土した砂レキF層は陶邑編年TK47の須恵器が最新の遺物である河川堆積層であることから、5世紀末~6世紀初頭を下限とすると考えられる。

【参考文献】

- 島根県教育委員会『西川津遺跡』 2001
島根県教育委員会『原の前遺跡』 1995



第53図 V-4-1区
出土杭状木製品実測図 S=1:12

図 版



III区全景



III-1区全景（北から）

図版 2



III-2区全景（北東から）



III-3区全景（南東から）



Ⅲ区西壁土層



Ⅲ区西壁土層（南端）

図版4



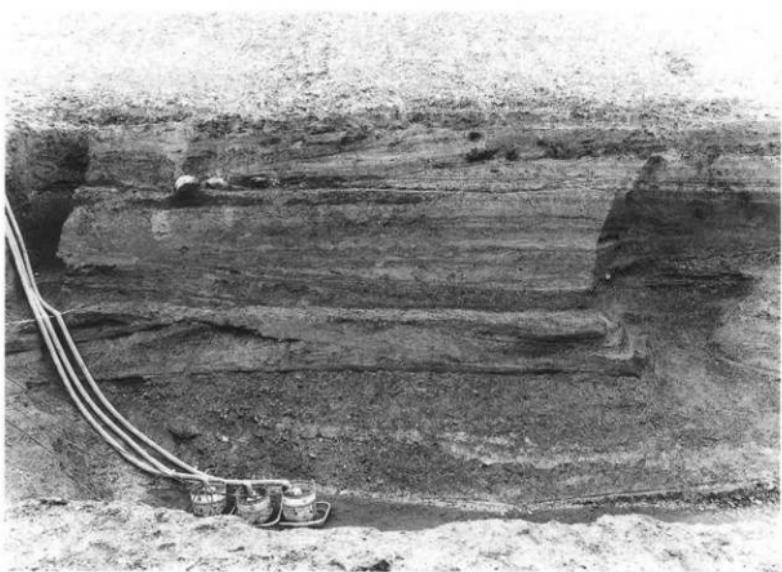
Ⅲ区南壁土層



Ⅲ区北西壁土層



VI区全景

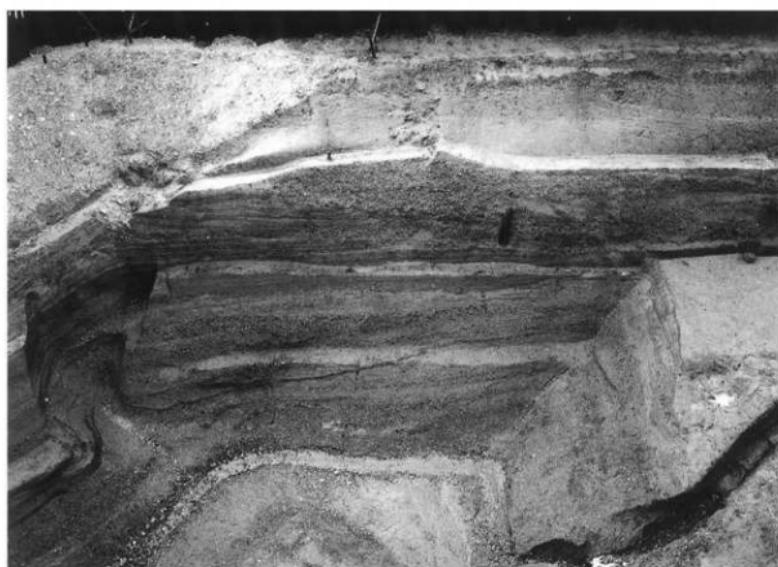


VI区西壁土層

図版 6



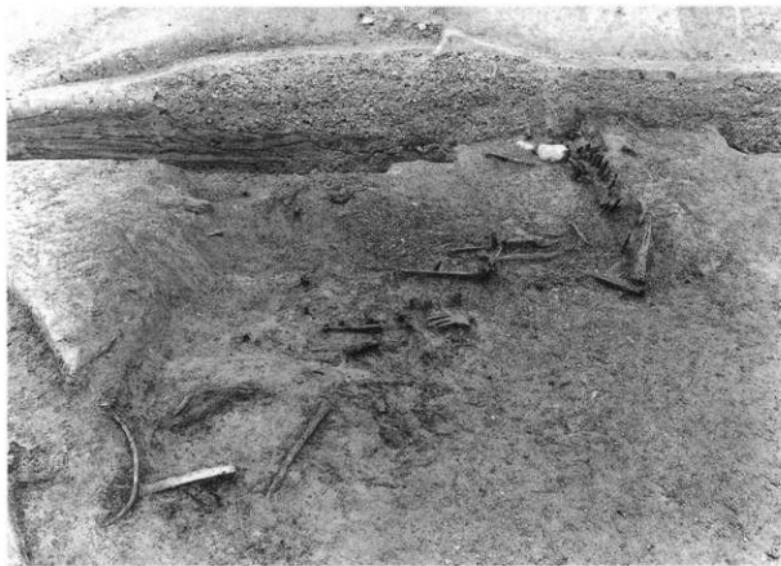
VI区北壁土層



VI区北壁土層（西側）



VI区北壁土層（西端付近）



VI区杭列検出状況

図版 8



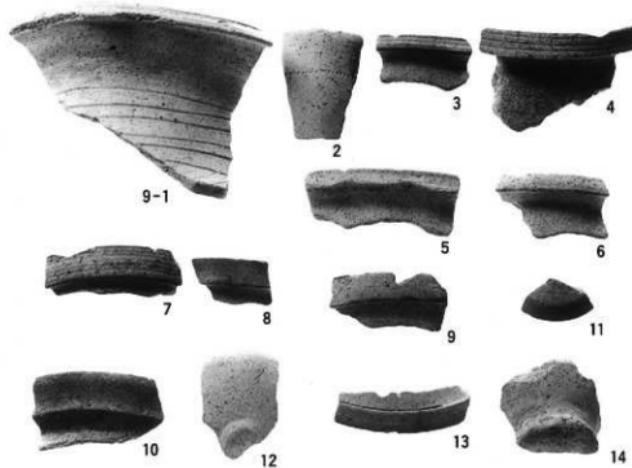
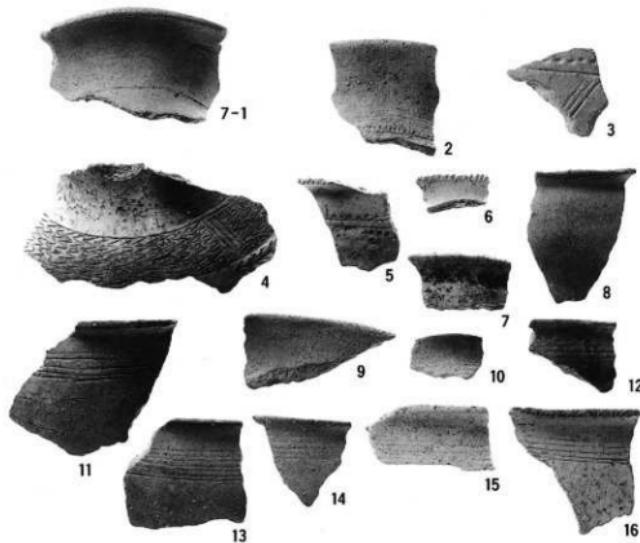
杭列検出状況
(北から)



同上（南から）

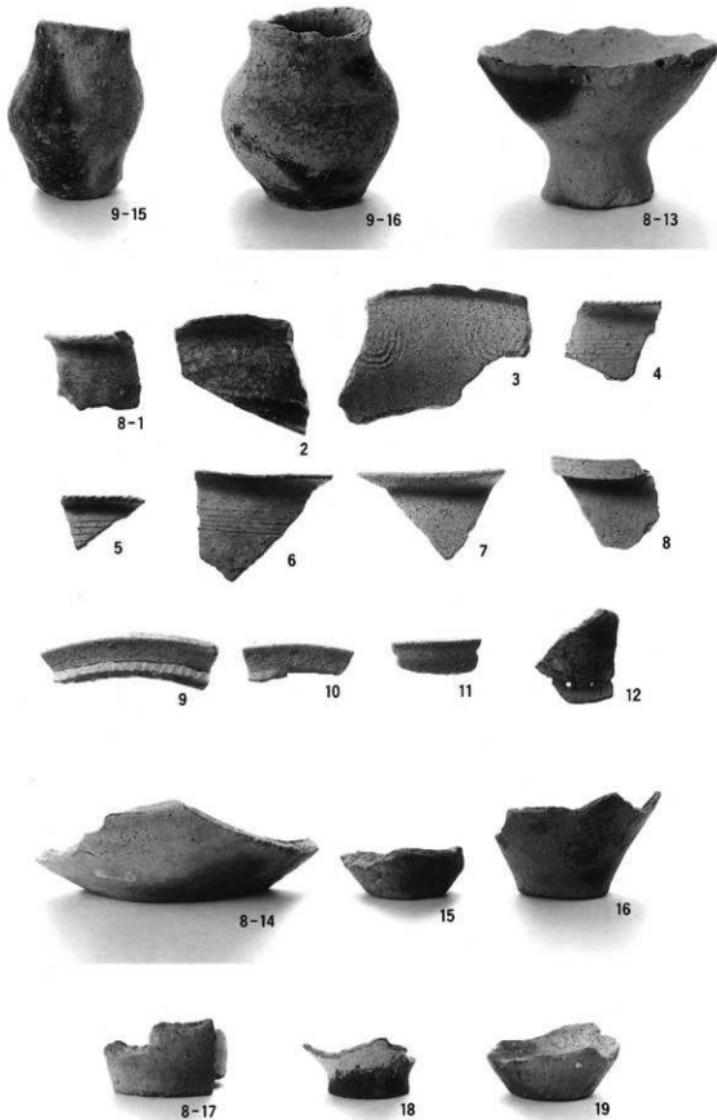


杭列と土層との関係

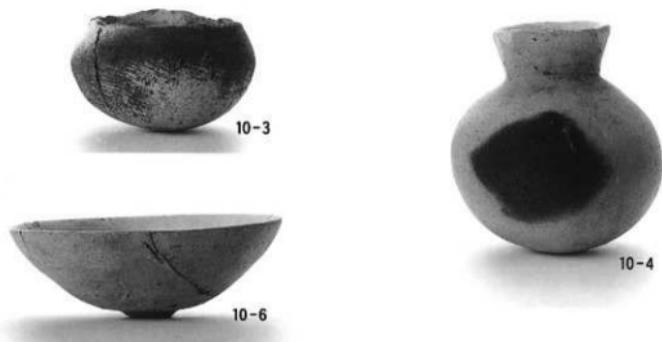
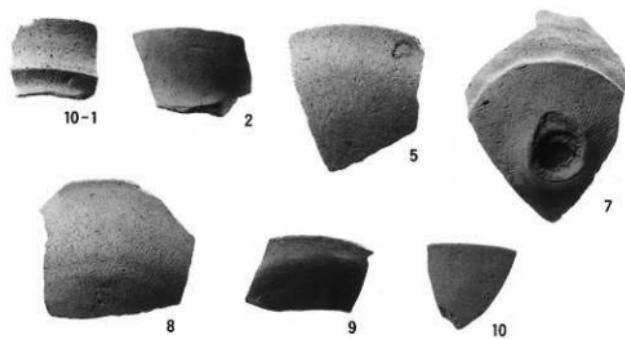


III-1区砂砾層出土土器

圖版 10

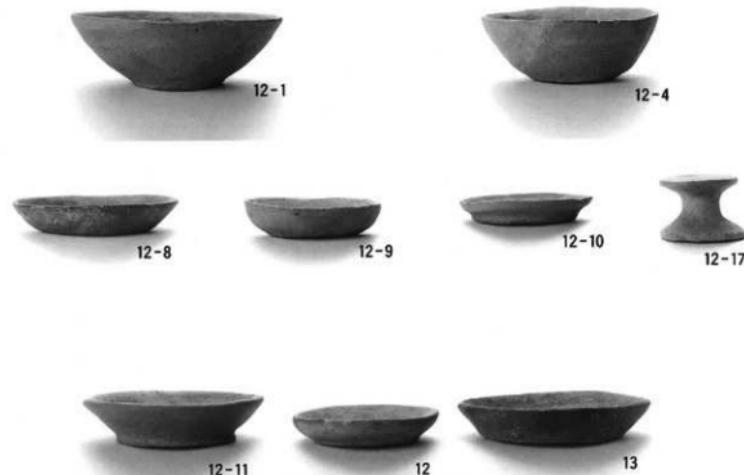
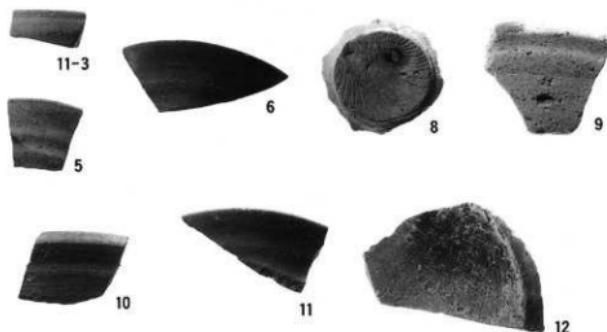


III-1区砂砾層出土土器

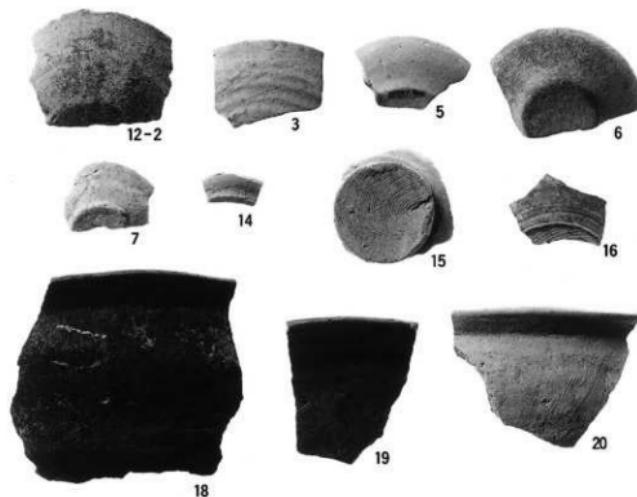


III-1区砂砾層出土土器

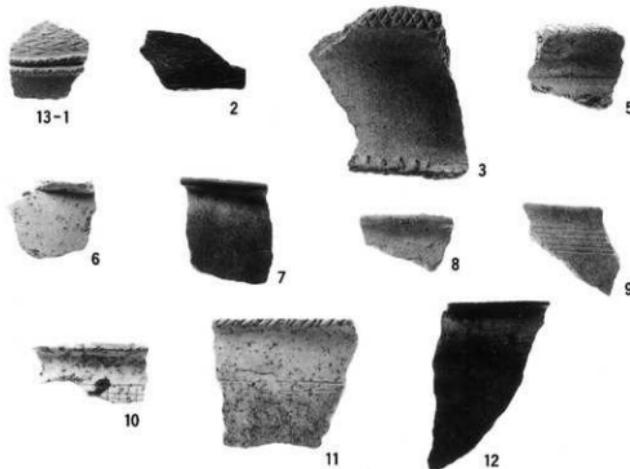
图版 12



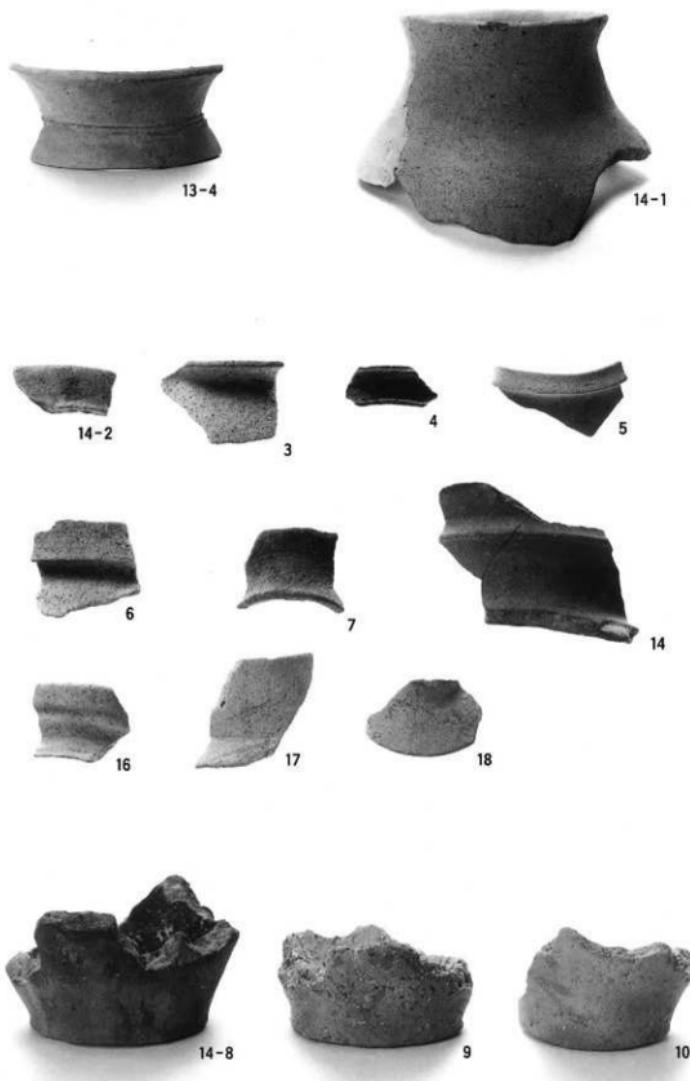
III—1 区砂砾层出土土器



III-1区砂砾層出土土器



III-2区砂砾層出土土器



III-2区砂礫層出土土器



14-11



12



14-13



14-15



14-19



15-2



15-1



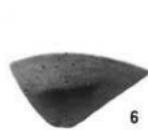
3



4



5



6



7



8

図版 16

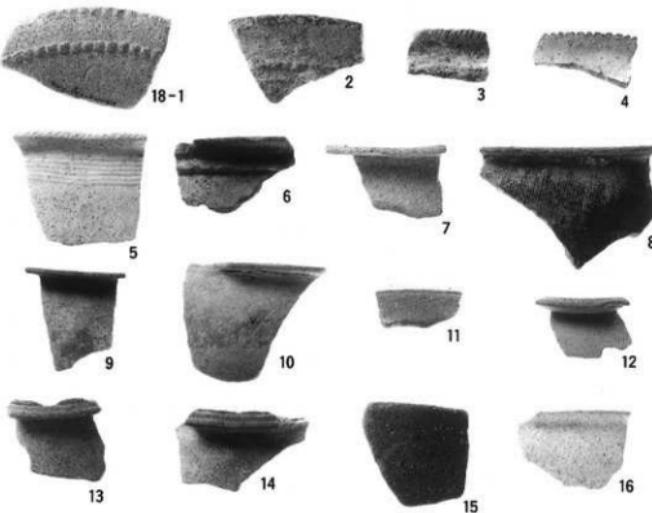
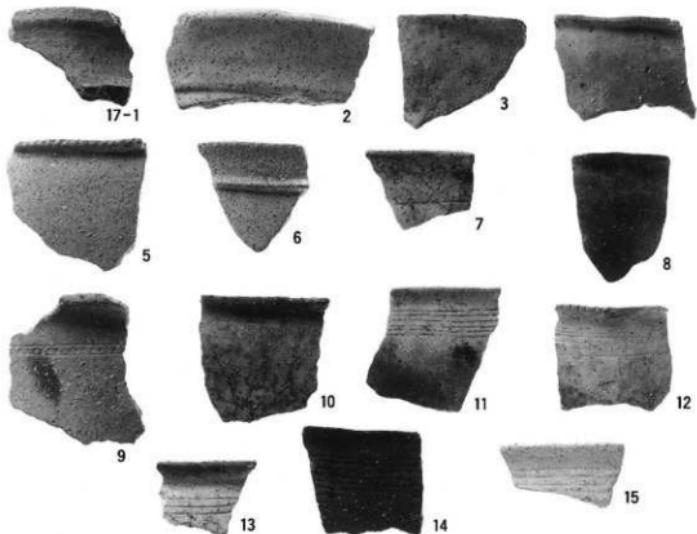


III-2区砂砾層出土土器



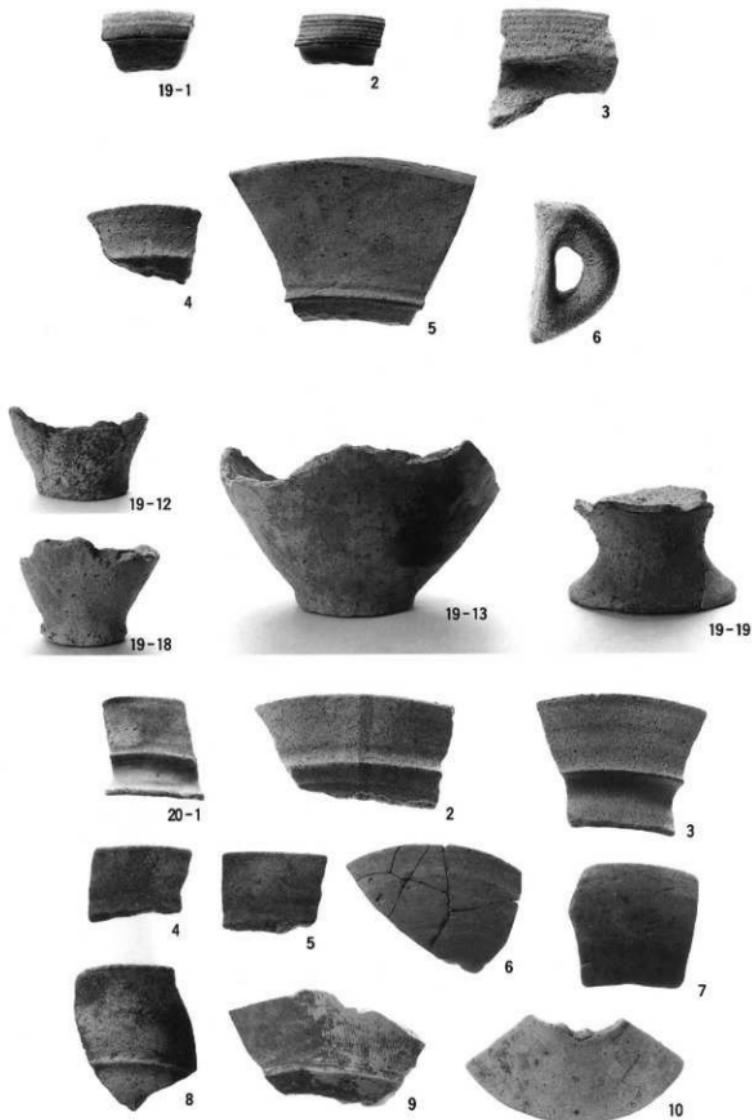
III-3区灰茶色砂層出土土器

図版 17

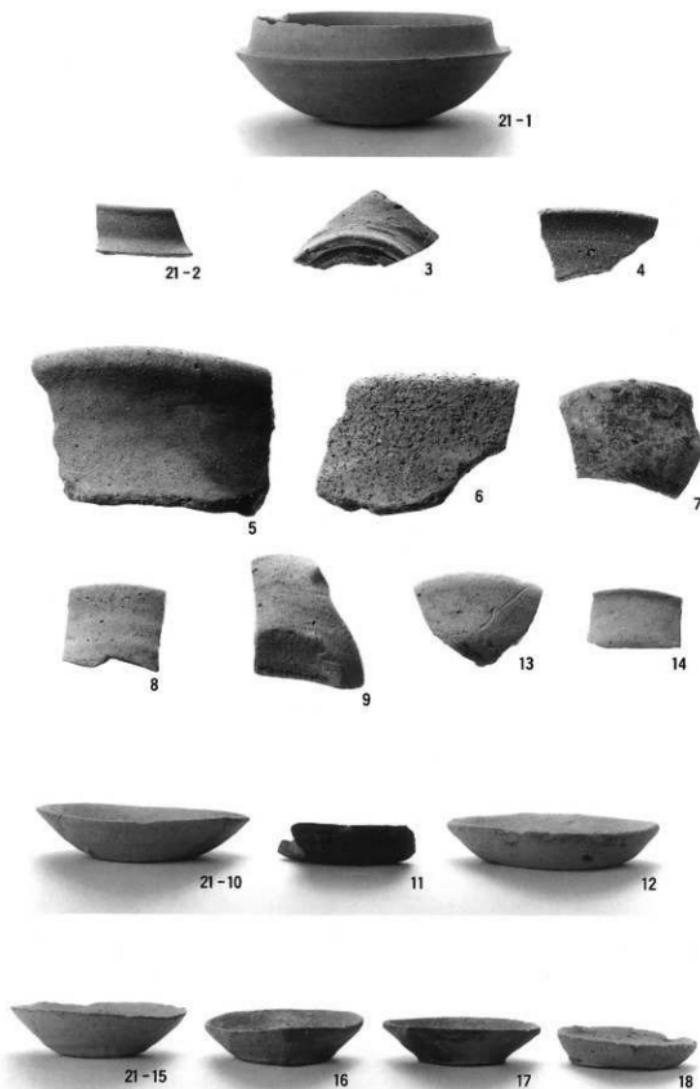


III-3区砂礫層出土土器

図版 18

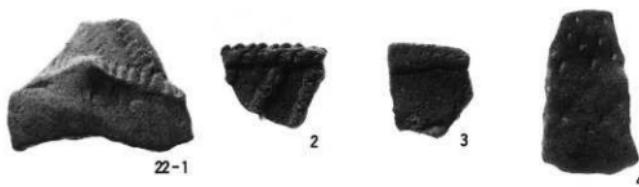


III-3区砂礫層出土土器

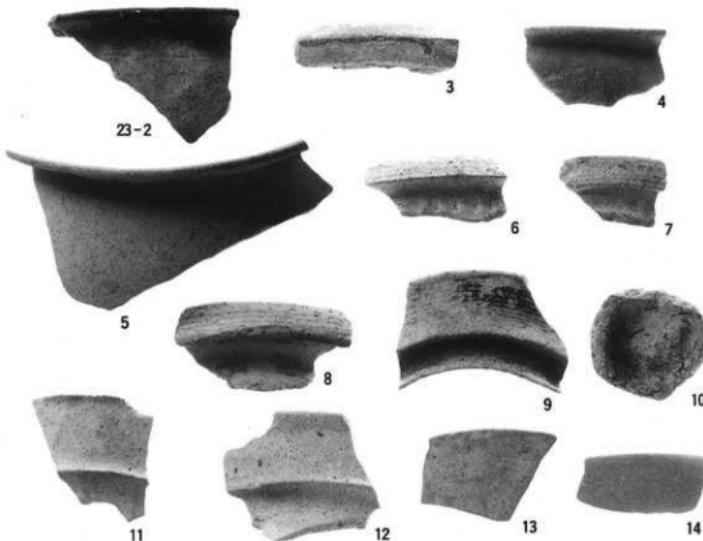


III - 3 区砂砾層出土土器

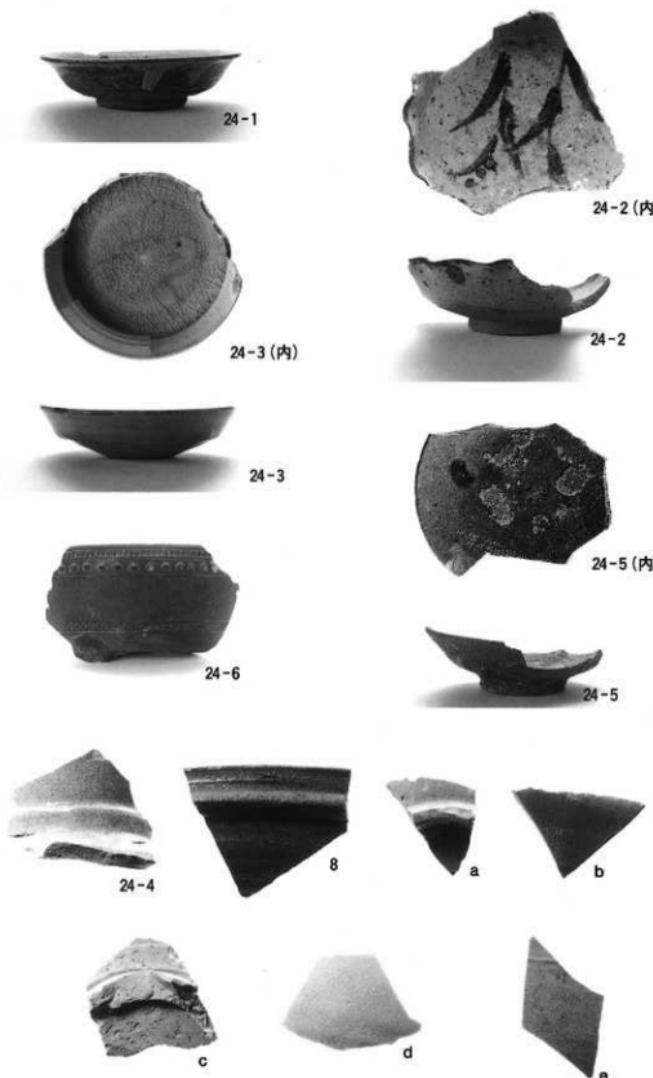
図版 20



III区出土縄文土器



III区出土土器



III区出土陶磁器

圖版 22



24-7



24-9



24-4 (内)



8 (内)



a (内)



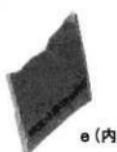
b (内)



c (内)



d (内)



e (内)

III区出土陶磁器



25-1



2



3



25-9



4



5



6



7

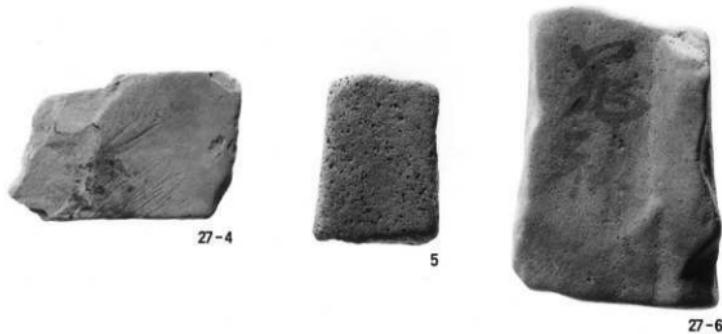
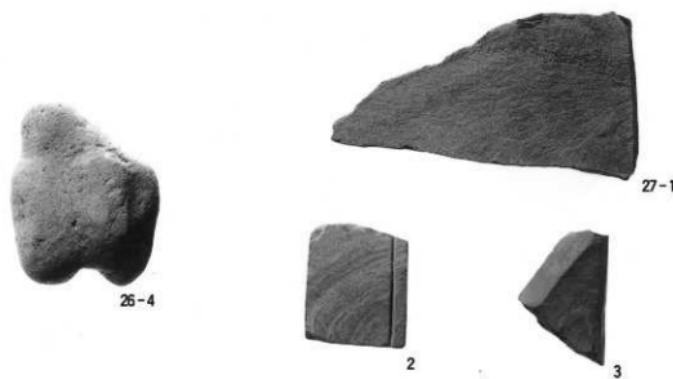


8



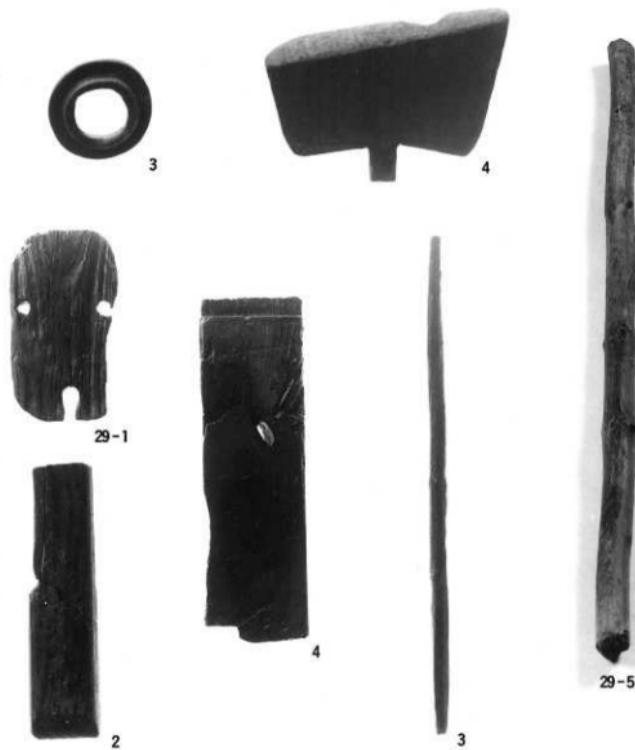
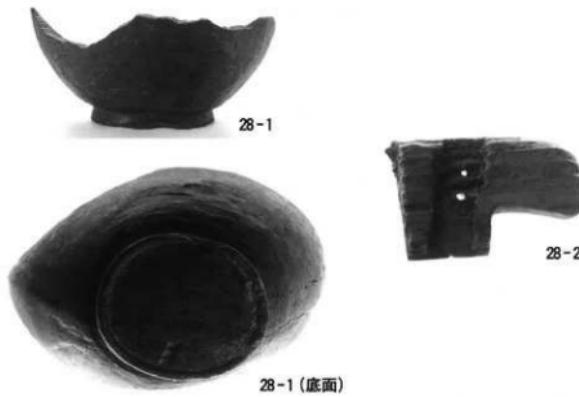
25-10

III区出土土製品・錢貨

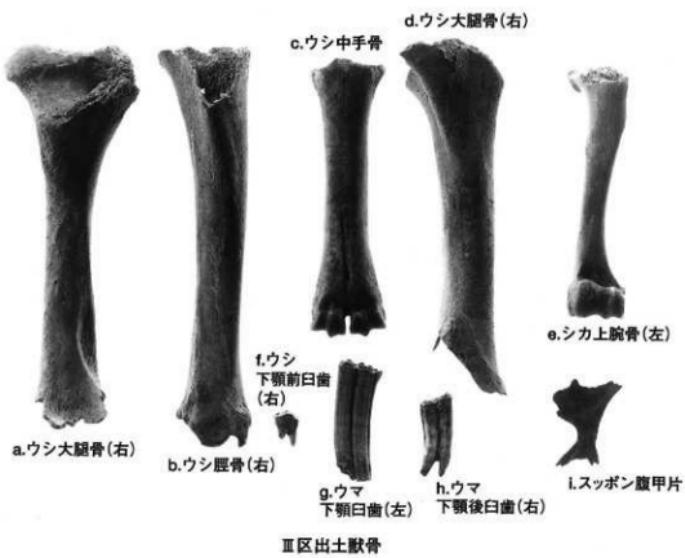


III区出土石製品

図版 24



Ⅲ区出土木製品



图版 26



32-2



32-9



32-11



32-7



32-6



32-16



32-13

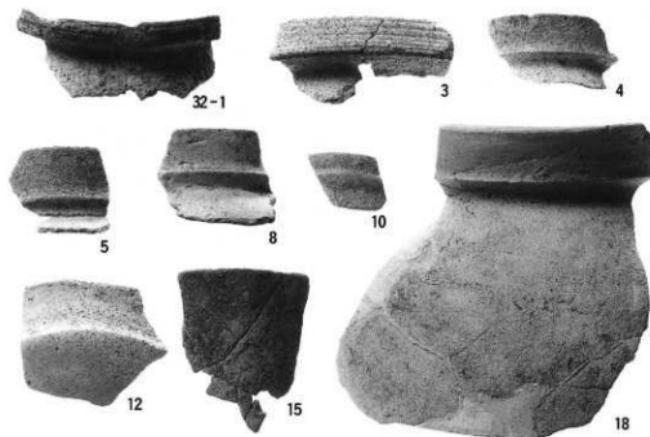


32-14

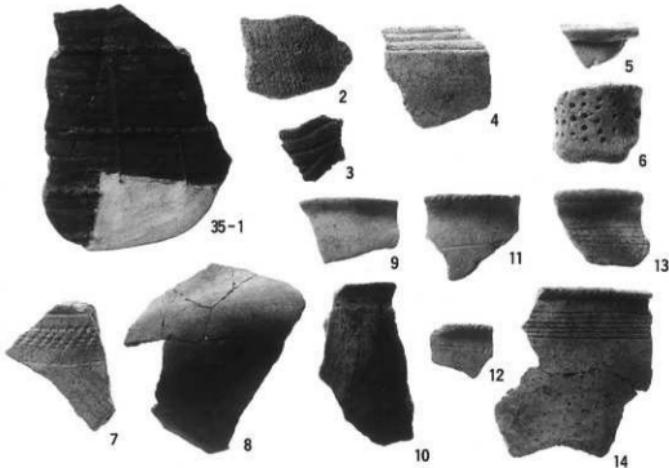


32-17

VI区淡青灰色土出土土器

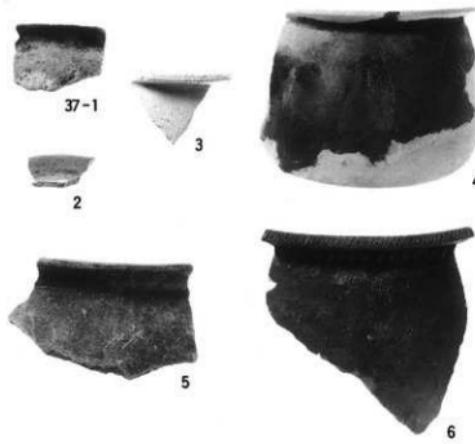
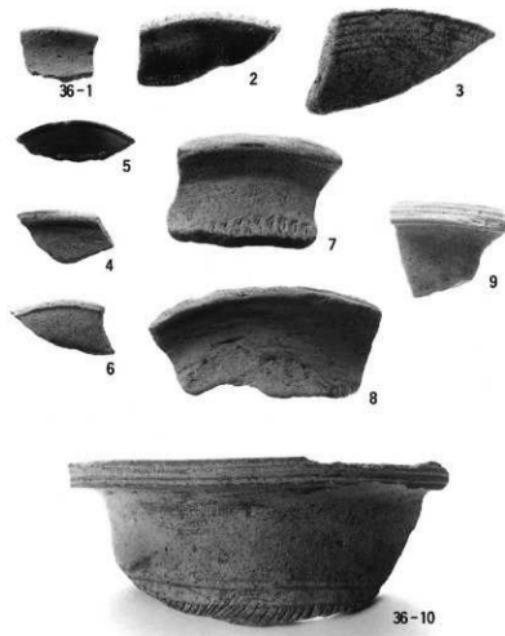


VI区淡青灰色土出土土器

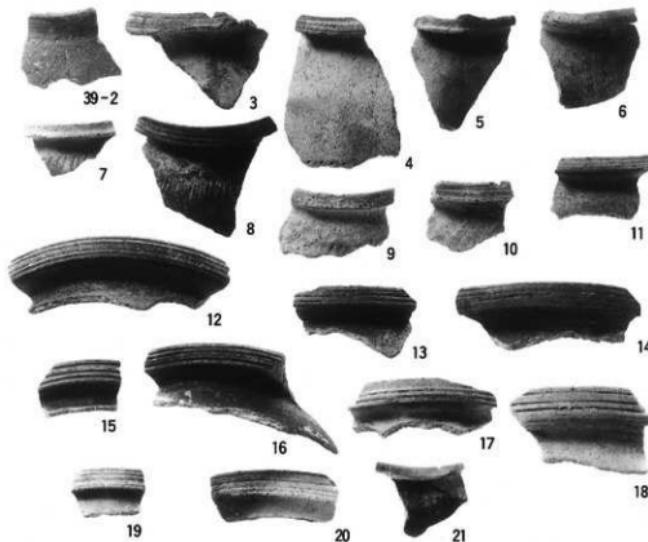
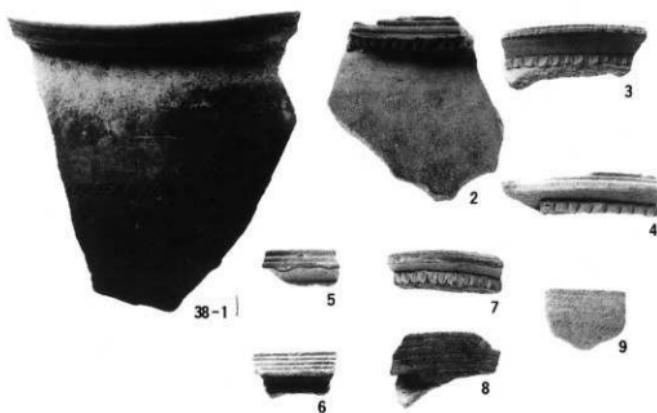


VI区砂礫層 1 出土土器

図版 28

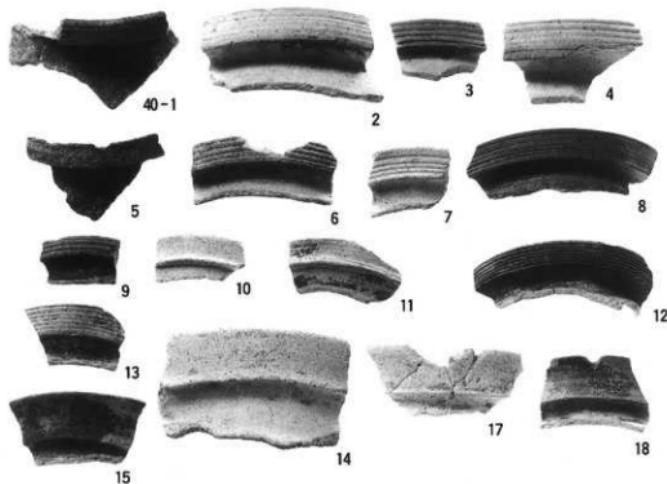


VI区砂礫層 1 出土土器

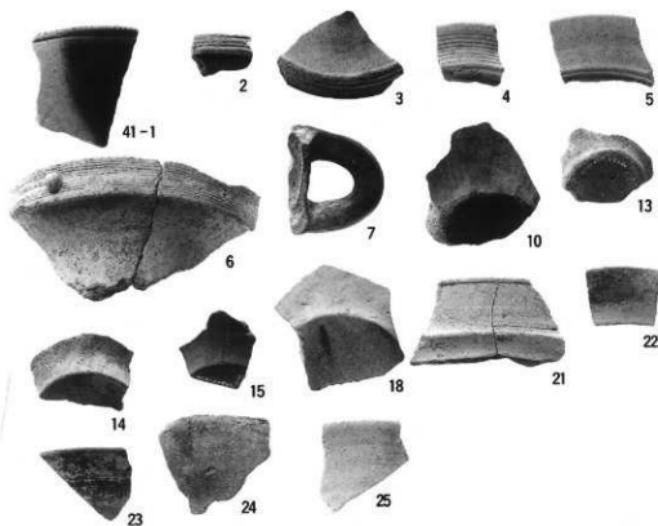


VI区砂疊層1出土土器

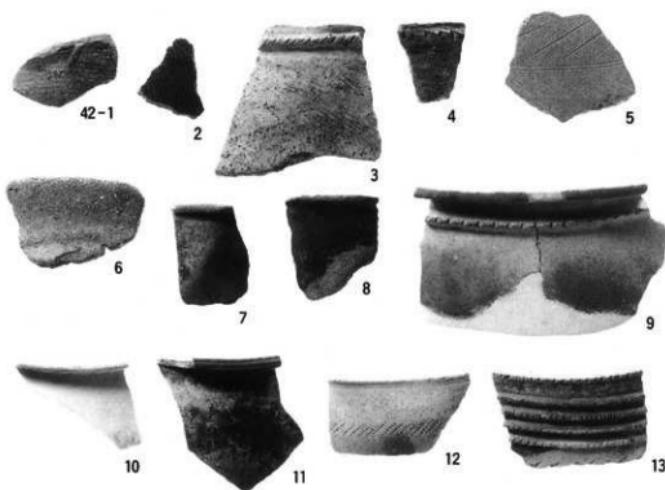
図版 30



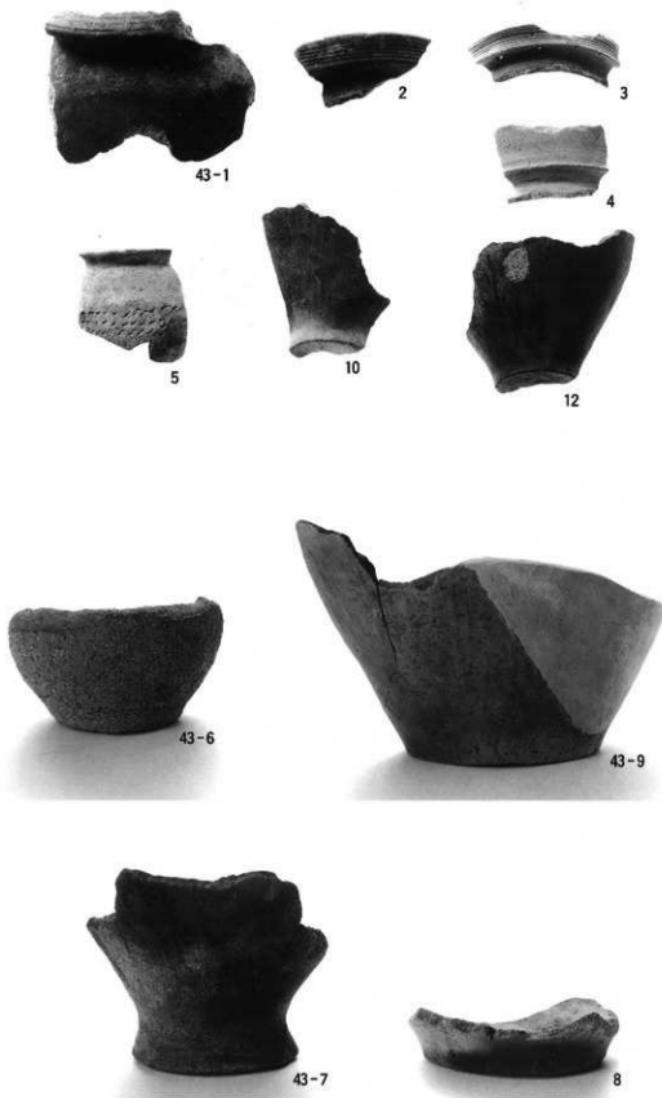
VI区砂礫層1出土土器



V区砂礫層1出土土器

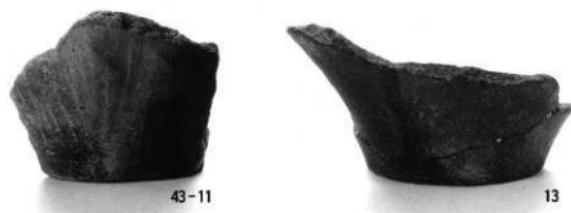


VI区砂砾層 2 出土土器

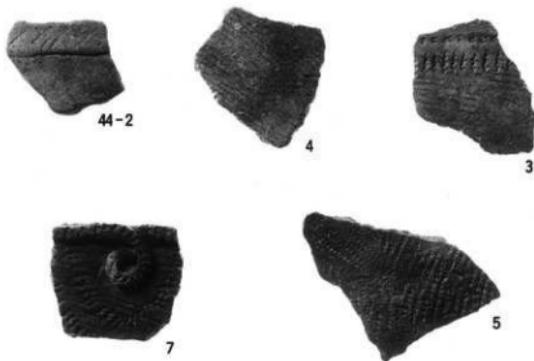


VI区砂砾層 2 出土土器

图版 34



VI区砂砾层 2 出土土器



VI区砂砾层 3 · 4 出土土器



45-1



2



5



3



4



45-6



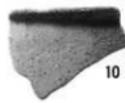
7



8



9



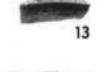
10



11



12



13



14



15

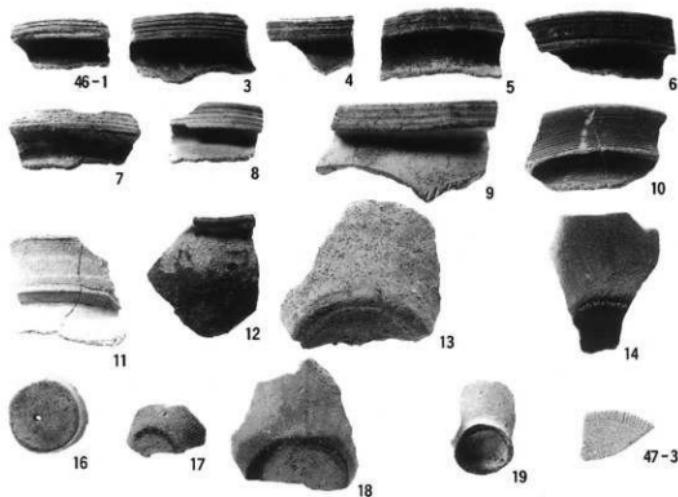


16



18

圖版 36



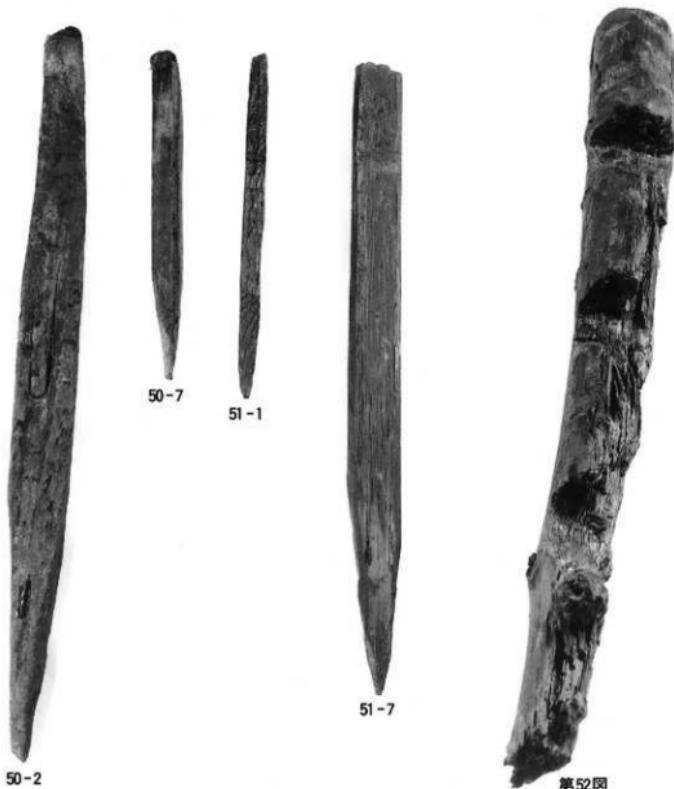
VI区出土土器



VI区出土石器・土製品



VI区出土木製品



VI区出土木製品

報告書抄録

フリガナ	ニシカワツイセキ						
書名	西川津遺跡Ⅸ						
圖書名	朝鶴川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	朝鶴川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第14冊						
編著者名	岩橋孝典 宮本正保 渡邊正巳						
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター URL http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/						
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL0852-36-8608 E-mail:maibun@pref.shimane.jp						
発行年月日	2003年3月						
収録遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号			(西暦年月日)		
ニシカワツイセキサン 西川津遺跡Ⅲ区	島根県松江市 西川津町560	32201	35° 29'05"	133° 04'37"	20020702～ 20021217	1240m ²	朝鶴川 広域河川 改修事業
ニシカワツイセキヨン 西川津遺跡VI区	島根県松江市 西川津町609		35° 29'27"	133° 04'48"			
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西川津Ⅲ区	河川跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	河川跡	弥生土器 土師器、須恵器 陶磁器 錢貨			
西川津VI区	河川跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	河川跡 杭立状遺構	縄文土器 弥生土器			

*北緯・東経は日本測地系による

西川津遺跡 IX

朝鶴川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第14号

発行 2003年3月

編集 島根県教育委員会

島根県松江市殿町一番地

印刷 柏村印刷(株)